山嶽寮

甲南山岳会通信　第７０号　　２０１５年１０月

1925年(大正14年) 旧制甲南高等学校に山岳部が誕生
2015年(平成27年) 創部90周年を迎えました

甲南山岳部・甲南山岳会

山　嶽　寮　　甲南山岳会通信７０号　　２０１５年１０月

追　　悼

思い出の記　大関のこと　牧野　宏　・・・・・・・　1
大関の思い出　越田和男　・・・・・・・　3
大関さんが逝ってしまった　飯田　進　・・・・・・・　5

随　　想

この一葉に寄せて　・・・・・・・　6
鷲尾　顕 / 福田泰次 / 南里章二　/　松本好博　/ 髙橋けい子/
大柳香代子 / 納富清司　/ 大森雅宏　/ 鳥井陽子 / 川野幸彦 /
山本恵昭　/ 八木　健　/ 阿部康彦　/ 西名俊英 / 松成　健 /
（既刊山嶽寮・個人蔵アルバムからの再録を含みます）

山　　行

鹿島槍東尾根　三題
平成27年5月　鹿島槍ヶ岳東尾根　川野幸彦　・・・・・・・　24
昭和13年 春　鹿島槍東尾根登攀　福田泰次　・・・・・・・　27
昭和11年5月　鹿島東尾　福田泰次　・・・・・・・　30

紀　　行

散々な旅　素晴らしき旅　雨宮宏光　・・・・・・・　32

論　　考

日本アルプスの発見　その実像と虚像　雨宮宏光　・・・・・・・　40

翻　　訳

もうひとつの登山　ソビエト・アルピニズムの文化と歴史
平井吉夫　・・・・・・・　49
訳者のあとがき「田口二郎さんからの宿題」　平井吉夫　・・・・・・・　61

会 員 短 信

総会・慰霊祭への出欠はがきから　・・・・・・・　62

報　　告

行事報告　秋の集会　・・・・・・・　70
定時総会　・・・・・・・　71
慰 霊 祭　・・・・・・・　72

ホームページから

掲示板書き込みダイジェスト　山行とつどい　・・・・・・・　73

甲南山岳部・山岳会の歩み

90 年通史概説　越田和男　・・・・・・・　86

山嶽寮第 70 号　付録DVD目録　・・・・・・・　100

ー追　悼ー

思い出の記　大関のこと

牧野　宏（昭36経）

何十年振りかで古びたアルバムの、色褪せた写真を眺めていると、あの独特のハスキーヴォイスが蘇ります。

彼は高校で同級の、先に逝去した柏木（カシブー）と二人で連れ立って、岩登りのトレーニングをしていたことが印象深く残っています。《甲南バットレス》でのアクシデントは、カシブーの追悼文のとおりです（山嶽寮67号）。

1959年彼が2年の夏、剱二股合宿のあと引き続き大関、森本と内蔵助平へ行きました。其の折、剱沢のへそに達する激流の渡渉が私にはどうしても出来ず、代わって大関に渡って貰い、リーダーの責を果たせないまま、立山東面、竜王フエースを偵察し薬師岳まで行きました。有峰へ降りる途中、3人を見て「汚ねえ山猿が下りてきた」と、私達よりもっと衣服が汚れた山の道路工事の人達にからかわれた事を鮮やかに覚えています。

翌60年夏もこのメンバーに飯田、二谷が参加し立山東面に、大関リーダーのもと岩登り合宿をしました。

1962年に卒業した大関は㈱昭和産業に就職し札幌勤務になりました。

私は一年先に東京で仕事をして居て、札幌の彼の住まいを訪問しました。二人とも食品関係の仕事がら共通の話題が多く、大いに盛り上がりました。

取れたて、新鮮な海の幸と、大関のよりをかけた腕。これが美味であろうことは食する前から想像が出来ました。海鮮ラーメンの味は逸品、今までで一番旨かったと記憶しています。

社会人になってからも学生時代と変わらない親交が続きました。

30年ほど昔、欧州出張の商談で買い付けた商品を持って『ドンさん、これ美味しいから店で使ってみてください』と《ラビオリ》を勧められ、当店《酒房・灘》の売れ筋商品となりました。

この時は三宮の私の事務所を訪問してくれてかなり長時間、気づけば外は夜の帷のころまで語り継いでいました。そのまま酒盛りの席に二人して足を運んだことは言うまでもありません。彼の相変わらずの話題の豊富なことに驚き、また巧みな話術で何度も大爆笑させてくれました。実に楽しいひとときでした。元気な頃の抱腹絶倒の思い出が次々湧き上ってきますが、残念ながら紙幅に限りがあります。

一昨年（2013年）入院治療を卒業して自宅療養を決心された頃から、月1～2回、携帯メールでエ

ールを送りました。

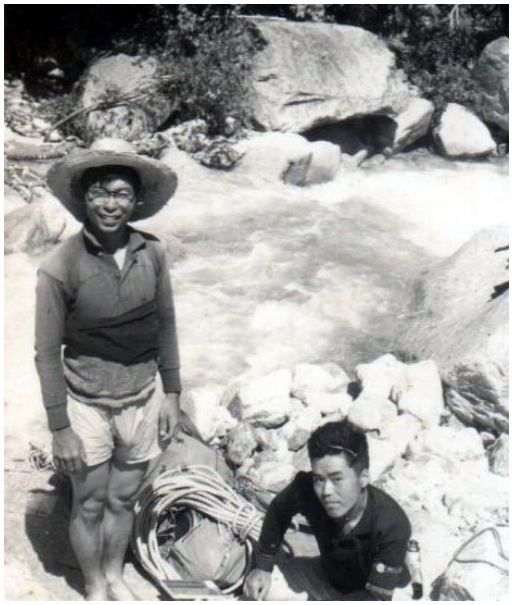
ある日メールより、私が撮影した写真をと思いつき、被写体が女性の写真を葉書にプリントし見舞いとしました。彼と私の名誉の為に書きますが、女性だけではなく神戸の風景写真も合間には送っていました。療養中にもかかわらず律儀なことに、携帯メールにも葉書にもきちんと返信がありました。『ドンさんも私と同じ女性好き。もう少し生きる努力をしてみます。友達は良いものです』と書き記されていました。逝く半年前には『身辺整理も済みました』と書かれた返信の葉書が届きました。終末期には判読不能の書面になっていましたが。

私と同年齢ですが、学年が下というだけで「さん」づけを崩さず、礼儀を弁えたナイスガイでした。

恋女房と大好きなお孫さん達が見送ってくれることを望み、その通り葬送されて彼は満足していると思います。

彼は多くの人の胸の中に、いつまでも輝き続けるでしょう。

2015（平成27）年4月



大関の想い出

越田和男（昭36年理）

抗ガン剤治療で何回も入退院を繰り返したあと、去年の7月、彼が亡くなるひと月前に海老名の自宅に見舞った。もう起き上がることもできず、「コッシン、もう終わりにしますからね。身辺整理もバッチリやりました」と、か細い声で云っていたけれど、強い大関のこと、まだまだ快復の余地はあると心底思ったし、そうも告げた。それから一月、南アフリカを旅行中に、携帯電話が鳴り、平井吉夫が彼の死を告げた。15年前に彼も参加して南米最南端のパタゴニアに楽しく遊んだことなど、次から次へと想い出した。

昭和31年の高校山岳部以来の付き合いだったから、60年近く、あちこちへ良く一緒に出掛けた。お喋り（失礼）にして論客、かたや私の方は口下手の無口。こんな組み合わせだから喧嘩もせずに長持ちしたのだろう。

大学山岳部のころ、秋の穂高のジャンダルムでは変てこな壁に取っついて進退谷まって退却したこと、春の杓子岳では凍った斜面で前を行く彼がスリップして、もんどりうって転げ落ちてくるのを体当たりしてでも止めるべきところを、為すすべもなく傍観して、幸い数十メートル下で怪我もせずに止まってくれてホッとしたことなどが思い出される。北海道育ちの大関はスキーも上手かったし、雪の上では滅法強かった。

ザイル、ピッケル、アイゼンなどを使う山登りは比較的早くに卒業したけれど、山歩きやスキー、そして山旅や山麓滞在を何より好んだ。山頂を極めるよりも、山中に身を置くこと自体を好む心境になったのは、私よりもずっと早かったようだ。頂上近くまで登りつめたあたりで、あっさりリタイヤして「皆さん行ってらっしゃい！私はここで待ってますからね」というとテコでも動かなかった。山梨の本社ヶ丸に平井、飯田と登った時、塩崎の別荘から伯耆大山に登った時、伊那の雨宮山荘に泊まって、平井一正先生もご一緒されて伊那富士（戸倉山）に登った時などが鮮明に思い出される。数年遅れで私も彼の心境に達したのだが、頂上まぢかの景観抜群の場所で、一人ぽつねんと小一時間仲間の下山を静かに待つというスタイルはなかなか捨てがたいものだ。頂上ばかりが山じゃない。こんな楽しみ方を彼に教えられた。

大関といえばシェフ。彼との山岳ドライヴでは、煮炊きの道具はもちろん、椅子にテーブルを必ず積み込み、渓流沿いあるいは尾根筋、雨の日は適当な四阿屋にランチスポットを求め、ゆっくりと時間をかけて優雅に彼の料理を楽しんだ。ひとの山荘に行くときなど、料理はもちろん、買い物、食器の準備、後片付けなど一切彼にお任せして、マメな彼に甘え放題。別荘の管理そのものさえプロの如く采配を振るったが、さすがに年を取ってからは、武田のユーさんあたりに助手がほしいとぼやいた一幕もあったと聞く。

毎年4月の第一土曜日に海老名の大関邸の庭で盛大な花見の宴を開いてくれた。これは、1999年の2月にパタゴニアに行ったその反省会をその年の4月にやったのが始まりで、その時のリーダー田村俊介さん（大阪外大OB）や国見ゆみ子さん（日本山岳会）などを交え、毎年毎年メンバーは膨れ上がり、甲南の旧制OBの伊藤文三さん、福井グリンさん、茂木光隆さん、伊藤五介さん、日本山岳会図書委員の南井英弘さん（関学OB）、大橋

晋さん（国学院OB）など10数名が常連となって賑わった。遠く関西から平井一正先生、武田雄三、田中孜、安井正、柏敏明など千客万来。大関は数日前から食材の調達、料理も前日から。鉄板焼きや網焼きなどの定番では収まらず、刺身、カルパッチョ、山菜の天麩羅、おでん、筍めしなど、研究熱心な彼の作品がところ狭しとテーブルに並んだ。エプロン姿の大関の「さあ、ドンドン食べて飲んで下さーい！」がもう聞けないのは何と寂しいことか。とっぷり日暮れてなおも焚火を囲んで際限なく談笑が続いたりしてご家族に迷惑をおかけしたことも再三だった。

格調の高い追悼文は書けないが、大関のことを書くと限がない。まだしゃべり足りない彼が、コッシンもういい加減にして早よこっちへ来てよ、と呼んでいるようだが、まだあかん、大関の後追いは数年後や、の心境。当分は仰山ある写真でも眺めて忍ぶことにする。

2015年4月記

大関和夫略歴:

昭和13年生　北海道から転校して甲南高校、甲南大学山岳部に。

昭和37年経済学部卒業　（株）昭和産業に就職（札幌、盛岡勤務も経て）定年まで勤務。

日本山岳会会員（昭和56年入会、会員番号8951）

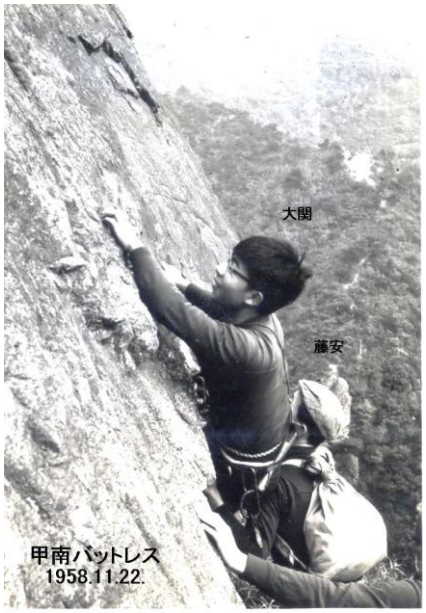
平成26年8月死去　享年75歳

山関係執筆:

① 記録速報 「立山雄山東面第3尾根左方フランケ」 岳人150号（1960）

② 「杓子岳および白馬鑓ヶ岳―杓子岳東壁を中心として主として東面を」 岳人155号（1961）

② 白馬三山のバリエーション・ルート」『現代登山全集　4　白馬・不帰・鹿島槍』東京創元社〈1961〉 など



大関さんが逝ってしまった

飯田　進（昭38経）

大関さんが逝ってしまった。頑丈そうで、一番長生きするだろうと思っていたのに。

呑気で気まぐれな人だから、あっちに何か面白いこと見つけたので、ふっと逝ってしまったのかもしれない。帰れないとも知らずに。

大関さんはスキーが上手かった。多分子供のころからやっていたのだろう、いわゆる下駄代わりに、というので。スキー学校にいって習ったような、四角四面な滑りでなく、力みのない、ダイモンサン（山口省太郎さん）の言われる、無制動回転のような滑らかな滑りであった。

それと、料理。現役時代はそうでもなかった。バットレスの下の堰堤で、部室の前での練習打ち上げコンパなど、むしろ同級生の倉さん（倉藤孝次）の方がよくやっていた。もっとも倉さんの実家は食堂やっている関係で、本人の腕前も本物だったが。勿論このころから料理には興味を持っていたのだろうけれど。それが発揮されだしたのは、昭和産業という会社に入った、ということもあったのでは。

腕前は玄人はだし。退職してにわかに習った、手習い料理ではなかった。

山に一緒に行くと、たいていはその恩恵に浴した。もうこれからは下りだけ、というところまでくると、見晴らしのいいところを探して、昼飯となる。もちろんそのように行程を立ててのことではあるが。昼飯にはワインが出る、これは我々の担当。そこへ大関さんの手料理が並べられる。にんにく一かけ、ウインナーに生シイタケ。にんにくをスライスして小さなフライパンで炒め、ウインナーと椎茸を入れて塩コショウで味付け。簡単にして美味。ワインに最適。またある時はもつ鍋。出来合いのもつ鍋に、椎茸、油揚げ、豚小間を入れて味噌で味付け。手軽な材料で簡単料理。この料理の腕とスキーの腕前が同時に発揮されるのが、高遠合宿。

信州伊那谷の北、桜で有名な高遠城址、その城跡を見下ろす高台に瀟洒な別荘がある。ガチャさん（田辺潤さん）の別荘である。ここへ毎年、二月の上旬、スキー好きのKACの連中10人ほどが集まって、スキーに酒に興じるのである。

スキーを終えて帰り、高遠城址の下にある、桜の湯で汗を流し、ガチャさんの別荘へ。

暖房のきいた広間で冷たいビール。やがて大関さん手作りの料理が出てくる。ここでは肩で担ぎ上げることもないので、豪勢な料理である。お造り、馬刺し、天麩羅、寄せ鍋エトセトラ。喉を潤し、腹は満腹。これみな大関さん一人の献立である。我々はなにもしない。せいぜい皿を並べるくらいである。そしてなににもまして驚かされるのは、10人が朝晩二日間、満足して食せるだけの食料を、用意し、料理し、皆が大いに満足して、そして合宿が終わったとき、もう食材は、なにも残っていない、ということである。

この腕前。一日でもいい、10人分の飲み食いをぴったり用意できる人が、KACの皆さんのなかにおられるでしょうか。まさに大関さんならではの得意技である。その楽しみがもうなくなってしまった。

あぁ帰ってきてよ。

合掌

ー 随　想 ー

この一葉に寄せて

平成25年の夏のことです。大学から部室の明け渡しを求められ整理に出向いた際、回収した資料の中に学生時代の写真がありました。懐かしい写真とそれに寄せる思いは同じ時代を過ごした皆さんの共感を得るのではないか。そこで何名かの皆さんに、写真一葉とそれに寄せる思いを、とお願いいたしました。快くご寄稿くださいました皆様ありがとうございます。

ご寄稿の方々をそれぞれの時代の写真でご紹介いたします。

（　写真下の表題は文字数の都合で本文と異なることがあります・
お寄せいただいた写真は部室回収以外のものも含まれます
鷲尾さん・福田さんの昭和15年コンビは編集にて　）

レリーフと香月さん	鹿島の北壁	思い出の山ー五竜岳	カナダ　ロブソン峰
麗しの女子部員?!!	雨ニモマケズ	KKHEⅡ　1979	前穂北尾根
弥陀ヶ原	知床岳にて	山でコンパの翌朝	一回生　春山合宿
雷鳥平	キリマンジャロ　ほか	テントが焼けました	TOMOMITSU T.H.K KOBE JAPAN トモミツのマーク

レリーフと香月さん

鷲尾　顕（旧15文）

香月慶太さんは1989年、創立以来59年の長きに亘つた会長を退かれ、名誉会長となり、私がその跡を引き継いだ。名誉会長となられても山岳会への愛着は何等変ることなく、会合には積極的に参加され、現役部員の減少には心を痛めておられた。1952年芦屋ロックガーデン、ブラック岩に設置した追悼レリーフに1991年、山岳部創立60周年記念事業として物故者慰霊の氏名銘板が作製され、レリーフに埋込む慰霊祭が物故者遺族を招いて1992年5月に行なわれたことは周知の通りである。この記念行事に香月さんは足の衰えのため参加出来ず芦屋川駅北側広場にて、無念の想いで一行を見送られた。然し、追悼レリーフを訪れ、亡き友に会いたいとの強い思い入れを持たれ、1993年7月、村上與利一、大森雅宏両君と現役の献身的協力によりお多福山山麓芦屋カントリー倶楽部の近く迄車で行き、転倒防止のためアンザイレンしブラックへは約2時間程かゝつて到着。香月さんは暫し黙祷を捧げ、「かねて気がゝりになつていた心のしこりが取れた」と述べられた晴々しい表情が鮮やかに瞼に浮かぶ。

旧制甲南高校歌曲集は香月さんが編集発行人となり、旧制甲南時代の歌曲、校歌、応援歌、各部部歌を集録し、1967 年刊行された。香月さんは歌曲集に『甲南時代の懐しい歌は無二の若返り剤であり、枯れることのない活力の源である。』と述べられている。青春の情熱溢れる香月さんによる歌曲集の巻頭言の一部を掲載する。

『六甲の麓、二楽荘下の学園、甲南高校
　　そは我が母校、吾等が心の故郷である
星霜移り人去って学び舎にとどめる俤も
　　今やはかなし
されど若き感激をこめて作られた
　　青春の譜は永遠に消えることなし』

（山嶽寮58号より再録しました　編集）

鹿島の北壁

福田泰次　（旧15理）

氷雪の北アルプス

山岳美の極致は氷雪に装われた岩山にある。「北ア」の連峰は遠く近く四囲の平野から又高原から、重畳たる前衛を抜くこと高く屹立しているのが仰がれる。然しその天を摩する山嶺に足跡を印すことは素より容易な業ではない。そこは寒気と氷雪の領域であり剰えその道程には吹雪や雪崩の脅威と危険とが待ち伏せている。だが人は、選ばれた登攀者は敢てそうした剣難に飛び込み垂直なる氷壁に足場を刻み、あるいは掩いかかる岩場を剰り越え登高に専念する。「聖なる頂」への接近には確固不抜の意志と不撓不屈の闘志とが必要とされ、加うるに優れた体力周到なる準備細心の注意が要求されるのである。

鹿島の北壁

人跡稀なる鹿島大川沢の水源地たる「カクネ里」の奥にそびえ立つ大氷壁、それを我々は鹿島の北壁と呼んでいた。「カクネ里」は昔平家の落人が身をかくしたと云う神秘谷である。そしてこの「カクネ里」より高差1000米の大氷壁を攀じ鹿島の頂に立つ事は当時の山岳界に於る問題の焦点であった。そしてこの美しき真白き雪の壁は幾人かの山を憧れる若人の生命を奪い去ったのだ。我々は敢てこの頂に挑戦せんとする。そしてその闘いへの武器は数名より成る隊員の力強き団結力なのだ。そして我々は遂に昭和13年3月27日午前11時このあこがれの山頂に力強くBerg　Heilを叫んだのである。

福田泰次氏のアルバムより引用しました。原文は句読点なしのカタカナ・旧字の表記であったため、句読点を補い現代表記にしました。アルバムの画像は本誌付録のディスクに収載しています。　（編集）

思い出の山　ー　五竜岳　昭和39年（1964年）　　南里章二（昭45理 47院）

もう50年も前のことだ。私が甲南高校1年生（16歳、以下すべて年齢は当時のもの）の時、山岳部のリーダーとなり初めての本格的な春山合宿に雪と岩の五竜岳をめざした。

写真は天候に恵まれ、頂上アタックに成功したあと遠見尾根のベースキャンプ前で撮った記念写真である。前列左から佐野正則（16歳、アタックメンバー、阪急電鉄を退社後世界中の山旅に出かけた）、山本俊作（15歳、消息不明）、坂田茂樹（15歳、大学時代は合気道の主将、卒業後は所有の大型ヨットでのクルーズを楽しむ）、後列左から平井康佑（16歳、芸術家肌の人物、卒業後は服飾店社長、大阪アメリカ村の理事。4年前に逝去）、大村謙治（16歳、現役の木材輸入会社社長、シンガポール、インドネシアに長期駐在）、木下先生（40歳、山岳部顧問、学者肌の日本史の先生、10年前に逝去）、高橋先生（31歳、山岳部顧問。当時は京都山岳会に属され、ハードな山行を繰り返しておられた。先生の存在が私たちの全ての合宿を無事成功に導いた。現在脳梗塞を患われ入院中）、そして私。もう一人撮影のため、写真に写っていない山本千秋（15歳、アタックメンバー、卒業後は八ヶ岳山麓でカトリック神父となり、後にロンドンで数学博士号をとり、現在経営コンサルタント）がいる。

今まで山岳会にお顔を見せていただけなかった、佐野、大村、坂田、山本千秋氏たち（毎年、正月には我が家にお集まりいただいている）には、90周年記念式典に参加を呼びかけようと思っている。

（早川　平井　村田　井上）

カナダロッキィー山脈 ロブソン峰

松本好博（昭52法）

いまから40年前の夏、山岳部創立50周年記念行事として、学生による海外登山を計画しました。目標山域はカナダロッキィー山脈に定め、井上隊長（ともさん）平井（現山岳会長）早川、村田、松本（まん太）の5名のパーティーも決定しました。

メンバーの内、海外渡航経験者は、その年の2年ほど前に単身ネパールを訪れた平井ただ1名のみで、英語交渉力は未知数でありましたが、全員の熱意と勇気で一丸となり50周年記念登山を無事終えることが出来ました。計画段階から多くの方々から頂きましたご指導、ご協力も忘れることはできません。

ロッキィー山脈の情報収集に日本山岳会へ伺った折にお会いした吉沢一郎氏から頂いた叱咤激励は、若きアドベンチャー達の心を揺さぶるものでした。

現地では、点在する美しいキャンプ場や山小屋を経由しながら山行を続けました。移動の途中、原住民の孤児院に招かれたり、キャンプ場でアメリカや日本の若者との交流など、より高き・より困難を目指した山行とは一味違ったもので、目から鱗が落ちたような日々でした。

カナダ到着後間もなく物資調達とレンタカーの試運転で向かったバンクバー市街地で、インデアンと間違われ人種差別を体感した平井（現山岳会長）や、入山中に麓のパーキングで車上荒らしの被害に逢ったりと、周到な準備をしてきた我々ではありましたが、アクシデント・ハプニングの連続の毎日でした。しかし、それら全てを消化し、糧として前進のエネルギーに変えました。

主目標であったロブソン峰では、壮大なオーロラに包まれたようなBCからキャンプを伸ばしアタックキャンプを設営しましたが、その後悪天候が続き、いつまで粘れるか、、、。 登頂断念・撤収の考えがよぎりました。食糧を切り詰め、アタックメンバーを減らし、最終アタック日が後1日に迫った夜私たちは満天の星空を見上げることができました。そして、翌朝、井上隊長、早川、村田の3名が登頂に成功しました。

諦めない・チャンスは必ず来る。
ロブソン峰は、夢多き若者達に大きな感動と自信を与えてくれました。

あの夏から40年の年月が経ちました。これからも、夢を諦めない気持ちを持ち続けたいと思います。

永遠のアドベンチャー・ドリーマーの岳友の皆さんへの感謝の気持ちと共に、、、。

ベルグ・ハイル

Ps：森さん（金さん）暇が出来たら、またラダックとブータンの計画をしましょう。
チャンスは来ると思います。

（松下　ポチ　イモコ　ゴン　渋谷）

麗しの女子部員？!!　あれこれ　髙橋けい子（西川）（昭50文）

18歳の娘達の呼び名

入部した娘達に先輩がつけて下さった呼び名、ヒナコ、Q、ポチ、イモコ、ペコ、ペチャそして私ゴン。

ゴンこと私が2年になり、Q、ポチが入部したことにより4年生の指導のもと合宿にも参加できるように。3年になりイモコ入部。上の写真は、普段はよく笑うのに山に入ると途端笑顔が消える彼女が笑ってる!! 数少ない写真である。

レーションにマーブルケーキを

Qの提案で、何百食作ったか!! いつも山行に反対の私の親も快く台所を開放し、賑やかに作業する若い娘達にニコニコ顔!! このギャップ…。親になってわかりました。

一番恐かったこと

2年の蝶ケ岳、春山女子合宿の最終日。下山時スリップ。「ピッケルをもっと強く!!」「ザックはずせー」という先輩の叫び声!! いつの間にか先輩が止めて下さっていた。上高地の小屋にその夜泊まり、用意して下さったお風呂の有難さ、食事の温もり、ただオイオイ泣くばかり。皆様本当にありがとうございました。止まらずに滑って行ったザックはその年の6月雪解けのころ出てきました。

花の甲南摂津祭に

毎月の部費はマネージャーのヒナコとQの手腕できちんと集金されたが活動資金が足りない。資金稼ぎのためキラキラ輝くこの学園祭に我が部も2度ほど出店。OBさんたちから、タダで集めたポスターや雑貨の大安売り。2年目は立ち食いソバ屋でバイト中の松本氏を店長にうどん店を。どちらもお客は甲南生よりも近所のおばちゃん達の方が多かったような…。ア、でも、どちらも完売!! 楽しい思い出であります。

女子部員を温かく見守り育てて下さったOBさん、先輩、同輩、そして後輩、深く感謝申し上げます。

雨ニモマケズ・・・　　大柳香代子（吉松）　（昭51法）

1年生のクラブ勧誘時、山岳部など縁もゆかりもない私でしたが、「尾瀬に行きましょう！」という井上先輩のお誘いに夢を描いてしまい、6月には大鍋をキスリングにぶらさげての尾瀬行となりました。「帰ったら絶対にやめる！」と思いながら初めての10kg以上の重さにゼーゼー、足元だけを見ながら木道を歩き花の一つも記憶にない始末でした。

なぜかやめずに気がつけば2年生、1973年、女子の夏合宿は「折立～太郎平～黒部五郎～伊藤新道～湯俣」の黄金縦走ルート。しかしずっと雨具を着たまま、景色も見えずぬかるみに足をとられ、もくもくと歩く忍耐山行で、目に入るのはお互いの真っ赤な雨具だけ。1年生の女子には気の毒な夏山でした。「もう歩けません（泣）」「帰りたいです」と彼女の口からは弱気発言の繰り返しで、なだめ励ましながら、太郎平から北ノ俣岳～黒部五郎岳カールを下りました。

最後の伊藤新道の下りはやっとの晴れ間。硫黄岳の荒れた山肌に目をうばわれつつ荒廃ぎみの道をこわごわ歩きましたが、さすがに危なげな吊り橋は全員ドキドキ、しかしこれを渡らない限り下山はできません。若干1名、泣きが入り大変でしたが、無事に渡り終え湯俣へたどり着くことができて、ひと安心となりました。

今は廃道となった伊藤新道ですが、硫黄岳の迫力の岩肌、せまる景色に魅了された印象深い道です。

さてあの山行をご一緒してくださったOBの山本先輩は、チェックのバミューダパンツをはき、一人だけ「おしゃれ夏山縦走」を目指しておられましたが、連日の雨のおかげで夢は挫折したかもしれません。

山岳部での経験は私にとって初めてづくしでしたが、縦走も岩登りも雪山も…すべての山行、そして時をともに過ごした仲間、先輩たちが、私の人生に大きな彩りを与えてくれました。楽しかった思い出に感謝です。

1年生　いも子（西村綾子）
2年生　ぽち（大柳香代子）
3年生　ゴン（髙橋けい子）
OB　山本真博
　　山本さんの友人

1973年7月　女子夏山合宿にて

KKHEⅡ 1979　　納富清司（昭56営）

色んな思いが詰まった1枚の写真です。2年前の遠征でものの見事に失敗し、帰国してからの各OBさんへの報告でもボロクソに言われ悔しくて悔しくて絶対登ってやるゾの思いで結成された2回目の未登峰挑戦でした。未登が由に、又、6千m前後、どこが頂上かも確たる情報もありませんでしたが、足跡がついていないって不安と魅力は、快感でした。2回目と言う事で前回より準備もスムーズに出来てデリーに飛びました。

多少の手続き上のトラブルは有りましたがまあお国柄なのでさほどの事もなく、スリナガール、キャラバン、BC設営と順調に進みました。BCからCⅠ、CⅡ、CⅢの荷上げ工作は2年前にも経験していましたが、そのスケールの大きさ、美しさは今でも目に浮かびます。日本の山の感覚で「1時間くらいで行けるやろ」と思っていても倍くらいかかったり、所どころクレバスが口をあけていたり（落ちたら絶対助からんな）一歩、一歩が緊張の連続でした。

CⅢから見た空の碧さといったらあれ以来私は見ていません。CⅢからのルート工作が私の山岳部での集大成だったと思います。急な雪壁をアイゼンとピッケルで刻んで行きました。写真はこの時の1枚です。CⅢに帰って来てから雪盲になり残念ながら頂上アタックに参加できませんでしたが、チームとして全員が頑張り、私もその一人として貢献出来たのではと自負しています。

その後40年近く経た今でも、一番充実していた時期の中でも最上の何週間だったと思い出させてくれる、この写真です。

前穂北尾根

大森雅宏（昭53文）

一昨年、部室の整理で見つけた写真です。

昭和51年の春、前穂北尾根、たぶん5・6のコル。この合宿は屏風・四峰・右岩稜の継続登攀をメインに前穂の頂上を目指しました。

左から村岸1・大庭1・川口1・吉松4・西村4の皆さん(数字は学年)。カメラはたぶん豆田1。この日あたりは、成功した渋谷4・納富2の屏風パーティーが登って来て、四峰に取付く松下4・大森2組は3・4のコルに向かって動いていたはずです。ベースは晴天沈殿、和やかな写真です。

さて翌日、松下さんと私はコルの雪洞からルンゼを下り、北条新村に。天気の良い日でしたが、雪の付き方がイヤな壁でした。いろいろあって大森3mほどスリップ、伸ばしたピッチで松下さんもいろいろあって30mほど墜落。大森右手骨折。継続登攀の計画断念。撤収。

1年生の諸君はこのせいで前穂の頂上を踏めませんでした。春山が1回分きちんと経験できなくて申し訳のないことをしました。また、「そんな危ない山岳部は辞めなさい」と、あの時仰らなかった1年生のご父兄にも思いを巡らせます。

下手ではないと思っていた私の岩登りは、実は上手くないレベルでした。運は良くない方だと思っていましたが、実はそうばかりでないことも判りました。

四峰以後、しばらく松下さんとはザイルを組んだ記憶がありません。それから3年半経ってインドの北部。成り行きで、あるいは隊長の配意で、また松下さんとザイルを結ぶことになりました。

結果ですか。今度はスリップも墜落もなし。1ビバークのおまけはありましたが、メデタシでした。無事にC3に帰着してから、「あれ以来ですね」「ホンマやな」と言葉を交わした覚えがあります。

1977年3月　弥陀ヶ原　　鳥井陽子（村岸）（昭54文）

6月に山嶽寮の原稿の依頼と共に、当時の合宿の写真が送られてきて驚きました。

同封されていた写真の中に、私が2回生の時の春山合宿のものがあります。

（1977年3月7日　弥陀ヶ原から剣、雄山）

若い！懐かしいですね。かれこれ40年前のもので、私の隣には笑顔の薮内君もいます。このような写真がまだ部室に残っていたとは。一緒に写っているほとんどの皆さんとは、卒業以来お会いしていません。亡くなった薮内君のことは、残念ですが、ほかの皆さんはお元気でしょうか？

いつもどこかでバテて、合宿中「しんどい！しんどい！しんどい！」と寝言を言ったこともある私が、この山スキー合宿ではバテずに行動できた記憶があります。

下山時にスキー板が折れて苦労していた人もいましたが、私はベースキャンプの室堂から美女平まで気持ちよく滑っていました。また、天候に恵まれたおかげで、真っ黒に日焼けして唇がはれあがっていました。

3回生の5月合宿の時も日焼けで唇が化膿してひどい目にあった覚えがあります。

さて、しばらく山歩きとは遠ざかっていましたが、去年あたりから再開しました。低い山をのんびり、ゆっくり、友達と歩いています。

でも、剣岳には3回生の夏山合宿以来行っていないので、一度行ってみたいなーなんて思っている今日このごろです。

知床岳にて　　川野幸彦（昭56理）

今井の病状が悪いことは、承知していました。

しかし、こんなに早く逝くとは思いもしませんでした。

亡くなる三日前の電話が最後でした。

「とてもしんどい」と言っていました。

秋の９０周年の総会にも参加予定でした。

まだ、元気に生きているような気がします。

この写真は大学１年の３月の知床半島縦走時のものです。

このときはスキーを使いました。

スキーの下手な今井はバテバテでした。

こんな彼を見たのはこれが最初で最後でした。

合掌

山でコンパの翌朝　　山本恵昭　（昭56理）

ある春の日、岡本バットレス下の砂防ダムで行われたコンパ。準備された酒は、ビールやウイスキーをそこそこの量と人数分の日本酒一升瓶。テントを設営するが、１張りはグランドシートなし。つまり吐きテントである。

盛大な焚火を囲み、ＯＢの方々も迎えて和やかな雰囲気で宴会スタート。まずはビールで始まり、適当にいろいろな酒や肴が回ってきて、それぞれのペースで飲みながら楽しく談笑が進む。それなりに酔いがまわって気持ちよくなり、座っていた石の後ろに仰向けに寝転がった。「夜空に舞い上がる火の粉が綺麗だ」と思ってのんびり眺めていると、そのときである。誰かが一升瓶を口に差し込んできた。息が出来ず、苦しい。まさに酒に溺れそうになった。

このあたりから地獄絵図の始まりである。何かを喚いている者、四つん這いでひたすら吐き続けている者、砂防ダムの砂の窪みで蟻地獄のようにひたすらずり落ちている者、最後、動きがなくなった者は「吐きテントへ放り込め」と声がかかり、グランドシートのないテントで朝まで自分のヘドと添い寝となる。

私もいつの間にか、吐きテントの一員に。朝起きると、髪の毛パリパリ。体を起こした瞬間、また吐き気を催した。

前列右から、青木、中沢さん、薮内さん（昭和60年鹿島槍が岳で遭難）。２列目右から、西岡、川野、納富さん、要さん、今井（平成27年病没）、そして私。皆さえない顔をしているのも無理はない。写真にいないメンバーは、まだテントの中か。足元にロープがあるので、バットレスを登る予定だったのかもしれないが、実行できたかどうかは記憶にない。

若さだけを頼りに、個性的なおもろいメンバーと無茶をしたかけがえのない時間だった。このうちの二人とはもう会えないかと思うと、寂しい。

一回生 春山合宿　七倉尾根～白馬

八木 健（昭58経）

その前の秋冬合宿に参加していなかった私にとって初めての雪山縦走。行く迄の不安と期待はかなり大きなものとして心の中に在りました。そんな合宿前の平生会でOBの方が「そらお前等、春の後立縦走って言ったら散歩みたいなもんや」と言う言葉を少し信じた私が愚かでした。

稜線に出る迄の急登に喘ぎ、稜線に出れば、時には息が吐き出せない位の黒部側からの強風に悩まされ、前を行く上級生に付いて行くのが精一杯でした。我々の前に日大パーティーが入っていて、針ノ木岳で追い着いた後は前後して進む。確か日大パーティーの中に女性部員がいて社交的な川野さんがしきりに声をかけられていたような。

鹿島槍の吊尾根にテントを張ったとき、すぐ下に大糸線沿いの町の灯りが見え里心がついた事。不帰のキレットでは佛教大パーティーも加わり、三校合同でザイルを出し合う。天気も良く揃って賑やかに昼のレーションを食べた記憶が残っています。折り畳んだ5万分の1の地図を毎日見ながら、唯々長かった合宿であったという思いと、自分自身の中で区切りがついた合宿であったと思っています。

合宿終了後リーダーの今井さんと二回生の大勝さんは再入山され、親不知迄の縦走を行い念願の太平洋から日本海までの縦走を達成される。丁度この原稿を書いている7月30日、川野さんから、今井さんが亡くなった、との知らせを戴く。

入学式が済み新入生勧誘の店（机）へ話を聞きに行った時、座っていたのが、春山合宿を終え、真黒に日焼けした今井さんでした。入部を考えていると言う話をした私を、甲南市場の中の喫茶店らしき所へ連れて行き、いきなりいろいろな山の話をしてくれたのも今井さんでした。心からご冥福をお祈り申し上げます。

雷　鳥　平

西名俊英（昭61理）

卒業してほぼ30年になります。

写真を探しましたが手持ちの写真がほとんどなく、それは多分当時「写真は本物と全然違うものしか映っていない」と感じていたためと思います。逆に今は心に残っている風景が本物とは違ってしまっているかも知れません。

ここに見つけたのは私が1回生の11月合宿雪訓後、雷鳥平BCでの1枚です。雪山でプラスチックブーツを履き始めたのがこの頃であったと思い出しました。このシーズンは春山合宿で黒部横断を目論んで、冬山合宿に早月尾根～剣岳を計画。11合宿にはその早月を東さん、大内さんが偵察し、八木さん、前川さん、松山、西名が設営した雷鳥平BCで合流しました。その後、奥大日～早乙女岳をトレース。人津谷は積雪がまだなく、道なきブッシュを特大キスリングで下ったのは一苦労でした。

まだ1～4回生が揃っていた時代です。放課後のトレーニングで渦森台や住吉川河口へ、昼休みは保久良さんへとランニング（筋トレで懸垂した神社の鉄棒はまだあるでしょうか？）。毎週の土日山行（登攀20本やアイゼンワーク）、合宿前の40、50kg台の歩荷と訓練ばかりよくやったものだと思う。

さて、この積雪期の結果は冬山合宿の早月尾根は獅子頭まで、春山は突坂尾根から後立縦走の計画となり、白馬岳までは辿り着いたが縦走まではできずに下山となりました。毎日のテントラッセル、特に猫又山付近では吹溜りにテントを設営してしまったのか朝起きたらテントが半分雪で埋まっていた。テントを一日掛かりで掘り起したら、そこが雪洞になっていた。その雪洞でもう一夜を凌ぎ、翌朝は身長分くらいの竪穴を上に向かって掘り進んで雪洞を這い出したように憶えている。自分たちの実力より自然の厳しさが1枚も2枚も上でした。

キリマンジャロ・ケニア山　　阿部康彦（平6法）

充実の山生活にも終わりが見え始めた4年生直前、山人生の集大成となる連絡が西濱先輩からあった。関西学生山岳連盟で8月にヒマラヤ遠征隊を出し、私もメンバーに入っているとの事。遠征素人の混成隊で、全て自前の計画。 就職活動やら色々懸案はあったが、信頼する先輩の言葉に二つ返事で承知した。その後、ヒマラヤは時期が悪いと判り、高度順応のためアフリカに行き先変更。部は藤井、鷹取、竹内、松成、梁瀬、大野、松井と部員が揃い、夏合宿にもついて行かなくてよくなったので安心して準備ができた。保険は吉川先輩に依頼、資金はバイト、両親、OB諸氏から寄付を頂戴し何とか確保。現地と山の情報が乏しい中、WV部OBの川崎氏に師事し地質の異なる諸岩壁を登りどんな登攀でも対応できるように技術を磨きに磨いた。

殆ど見切り発車でやってきたケニア空港は、寒く薄汚れていたが、未知への挑戦が気持ちを高揚させた。その後、約1か月半、英語もろくに話せない隊員が治安の悪いアフリカで様々なトラブルに巻き込まれた事は、想像に難くないと思う。何とかキリマンジャロ・ケニア山登頂を貫行出来たのは、山岳部で培われた心技体、ご支援下さった方々の期待に応えねばという想いだった。

さて隊はアフリカで解散し、先輩と二人、ヒマラヤへ。中西先輩からの日本発カトマンズ郵便局留めの荷物が回収できず、後一日で官公庁の長期休暇により登山断念の危機。アフリカ仕込みのバイタリティで局員に詰め寄り集積所で装備を発掘できたのは奇跡だった。何とかアンナプルナへ出発できたものの、ハイキヤンプで高山病に襲われ嘔吐と頭痛に耐えながら一人テントで先輩の登頂～下山を待つ結果となった。私が高所登山を諦めた瞬間であった。山と部に育てられた4年間は、自分の生き方に最も影響を与えた輝かしい時代であった。中でもこの約3か月の山行は、他に類を見ない経験だったと思う。

すずらん小屋　　阿部康彦（平6法）

中高年登山や山ガール、スポーツクライミングの隆盛。一般市民が斯様なスポーツを手軽に行える時代となった。この礎の一端を築いたのは甲南山岳会の諸先輩方に違いない。

写真は、25年前、大学1年の私が参加したすずらん小屋で、多くの先輩方から、話を伺った。振り返れば当山岳会も設立90年に達した訳であるが、日本アルピニズム黎明期の登山家である大先輩方の話を聞く機会はもう殆ど無いと思う。若干事実と異なる内容もあるかもしれず恐縮であるが、私の記憶に残る話を記す。今後、正しく記憶されている先輩方に修正、加筆して頂き、甲南山岳会エピソード集を出版して頂けたらと思う次第である。

すずらん小屋では、家出して行方知れずの福田先輩が、山行にいったら山小屋で笑って出迎えてくれた話、現役の入山中に登山道から年配になった福田先輩が転げ落ちてきたところに遭遇した話、福田先輩のエピソードはとても面白く皆に愛されるお人柄が伝わってきた。後述の記念碑の際にも、芦屋駅でロックガーデンの緑化運動の募金をしていたボーイスカウトに対し、本来禿山が自然なのだから不自然な緑化に反対する意見を言われたそうで、芦屋ロックガーデンを愛し保全したいという想いが伝わるエピソードである。

その他、別の先輩から上高地から入山中に川に部員が転落し凍えかけた所を温泉に投げ入れて一命を取りとめた話、徴兵先では上官に軽く見られたが、重いキスリングを他の兵隊より余裕で担いでいる所を認められ、可愛がられた話などが記憶に残っている。

香月先輩からは、甲南学生時代に朝礼で全校生徒の前でハイキング同好会の設立を宣言され、多くの参加者が居り、ここから甲南山岳会が始まったと設立時の話を伺った。大正時代からの部がある事に驚き、創始者からのお話は感慨深いものがあった。また芦屋のロックガーデンに物故会員碑が銅板増設となり、歩荷として参加した時、香月先輩がOB諸氏のフォローを受けながらも「大丈夫」と言いながらレリーフまで歩かれて、感激されていたのを覚えている。レリーフ前で休憩時には紅茶

談義を頂いた。

大学理事長であった小川先輩からは、アルプスの岩場を登るに、木の棒をロープの代わりに悪場を乗り切った話や胸ポケットに入れていたハーケンが落ちてしまった話など装備や技術、ルートが整備しつくされた現在の登山とは、かなり違うパイオニアワーク精神と自由と冒険の要素の大きな山行紀に聞き入った。また聴講生の徳末先輩が、部室に寄られ、部室の古テーブルを見て「まだ使ってんの！僕の時からあったよと」と言われた。捨てようかと思っていた、汚い机が、半世紀以上前からある歴史的骨董品と知って、ご神体のような有り難い存在となった。

あれから25年経ち山岳部も休部状態である。時代の流れは恐ろしい物で、登山用語も次第にドイツ語から英語に代わり、ザイルという言葉はもはや死語らしい。時代の流れに栄枯盛衰を繰り返したこの歴史ある山岳部に再びエピソードを引き継ぐ部員が入り、新たな歴史を刻んでほしいと思いつつ、岩に噛り付いている日々である。

∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽ ∽

トモミツ縫工のマーク

山岳部時代に使ったトモミツ製品。テント、ツェルト、キスリング、ヤッケ、オーバーズボン、オーバーシューズ、オーバー手袋など。どれも丈夫。破損しても気持ちよく修理してもらえた。工房も甲南本通り裏で近かった。

震災の後にトモミツ縫工を閉じた友光幸二氏を囲む会が平成 10 年、関大で開かれた。「『ええもん作ったらナ、お客さんは喜ぶネン』と常々聞かされました」（職人さん）、「タッシュに一斗缶が入るキスリングみたいな『ええもん』作ってくれはったおかげで、私ら泣きました」（某大学 OB）、の掛け合いに参加者一同拍手。

機能や性能を追って、物の形は変わってゆく。今、自転車と聞いてダルマ型のそれを思い浮かべる人はいない。飛行機と聞いてライト兄弟のフライヤー号は出てこない。テントのイメージもウインパーや家型から自立式の吊り下げ型に変わった。トモミツのオッチャンが作った吊りテン、「アクションテント」（ボンボンテント）はダンロップスポーツの販売網に乗ってあっという間に小型テントのイメージを変えてしまった。

トモミツのオッチャンのアイディアの多くは失礼ながら「？」がついたけれど、ことあのテントに関しては「！」だった。

（写真は部室に残っていたウインパーのトモミツマーク。
写真と思い出で構成するこのコーナーの空きスペースを利用しました　編集）

テントが焼けました

松成　健（平8文）

この写真は大学1年生の夏合宿の一コマです。3年生の阿部さんとテントの補修をしている写真です。

定着が終了し、縦走の最中にテントが焼けました。このテントはダンロップ6人用テントで、このテントは、竹内君と私が入部し、アクティブ部員が増え、今までのエスパーステントが手狭であった為、購入したようでした。この夏合宿が初めての長期使用だったかと記憶しております。つまり、先輩である、阿部さん、藤井さん、鷹取さんにとっては、初めてのきれいなテントでしたので、非常に大切に扱われておりました。

何故、テントが焼けたかというと、1年生の竹内君と私が朝ご飯を作っている最中、2人とも寝ぼけていて、ホエーブスから、炎が異常に上がっていても何もしなかった為、テント内で大きく燃え上がりました。

その時の事を今でも、人間性が出たと言われて、非難されております。私は出口近くだったので、真っ先にテントから逃げ出しました。鷹取さんは、消そうとされてましたが、寝ぼけていて、タオルを被せようとしておりましたが、炎が大きく、タオルが燃え、火傷されたかと思います。竹内君もやはり寝ぼけていて、顔に火傷を負いました。異常に気が付いた藤井さんは、消せ！、消せ！と叫んで、息をホエーブスに吹きかけ、結果、ますます、炎を大きくさせました。阿部さんは、普段はやさしい方ですが、朝だけは別人のように機嫌が悪い方で、寝起きが非常に悪く、皆が慌てていても、寝ておりましたが、さすがに異常に気が付かれ、ホエーブスをテントの外に投げ出しました。

その際、出入り口近くのフライの一部が消失しました。消失した箇所は、ザイル袋を切り裂き、補修することとなり、この写真のように裁縫道具で補修することとなりました。
テント場では、個性的なフライの為に他の山岳部の方から、どうしたの？と声を掛けられ、火事になった事を一々説明しながらの縦走となりました。

社会人になり、縦走する時間も体力も無くなった現在では良い思い出です。

ー 山　行 ー

鹿島槍東尾根 三題　その 1

平成27年5月　鹿島槍ヶ岳東尾根

川野幸彦（昭56理）

〈日時〉

2015年5月1日～4日

〈メンバー〉

大森雅宏（昭和53年文）
山本恵昭（昭和56年理）
川野幸彦（昭和56年理）

〈はじめに〉

私の1学年上の薮内さんの鹿島槍ヶ岳での遭難から30年が過ぎた。今年の5月は一人で遠見尾根から五竜岳に登ろうと思っていたが、同期の山本から鹿島槍行きの誘いがあり、大森さんも同行するというので即決した。薮内さんの追悼も兼ね東尾根から頂上を目指すことになった。鹿島槍は10年ぶりである。前回は一人で冷池小屋に泊まり、爺ヶ岳南尾根から鹿島槍の南峰を往復した。雪が多くて緊張した思い出がある。

東尾根では、薮内さんが遭難したときに、川崎柴笛クラブの6人も遭難していた。はっきりとは覚えていないが、第一岩峰での雪崩が原因のようであった（後に知ったがこの中のお一人が私と同じ高校出身であるとも聞いた）。

東尾根は1931年5月に甲南高校の田口一郎さん・西村雄二さんが、大冷沢から二ノ沢を詰め北峰に1ビバークで登っていた。これが雪の付いた東尾根の最初の記録だそうだ。まだ記録の少ない頃に、現在とは比べ物にならないくらいの貧弱な装備。天気予報も全くあてにならない時代によく登ったものだと感心した。いかほどのプレッシャーがあったのか。この84年後に偉大な先輩の後を追い、後輩のおじさん隊が登ることになった。三人で合計172歳である。テクニックには自信があるが、体力は・・・。トレーニングは一応は行ったが。バリエーションルートは、同じメンバーでの5年前の剣岳小窓尾根以来である。

〈行動〉

5／1（金）　大阪⇒大谷原

22:30にJR神戸駅北口で待ち合わせ。山本のクルマで大谷原へ向かう。

5／2（土）快晴

大谷原6:40⇒二ノ沢の頭TS13:00

6時ごろに大谷原に到着した。駐車場には30台ほどのクルマがあった。大半が赤岩尾根に向かうようだ。大谷原から林道を15分ほど行くと、大きな堰堤があり、赤布がたくさん付いていた。ここが東尾根の取り付きである。ここから急な斜面を赤布に導かれながら登ると尾根に出た。ここまで踏み跡がはっきりせず喘ぎながら登った。また、ブッシュもきつかった。休憩していると元気のいい6人パーティに追い付かれた。尾根には雪が残りトレースもしっかりしていた。階段である。一ノ沢の頭は、右から雪田を伝って巻いた。少し急で嫌な登りであった。

久しぶりの雪のトラバースにビビった。このあとは二ノ沢の頭までは猛烈なブッシュの痩せ尾根となり、主に右側を登った。今にも崩れそうな雪庇の境を進むのだが、崩れそうで嫌であった。また、猛

烈なブッシュ漕ぎも加わり非常に体力を消耗した。落ちたら終わりである。天気も良く暑いので半袖で登っていたら、腕は擦り傷だらけになった。

荒沢奥壁を見ながらの登行

やっとのことで二ノ沢の頭に到着。バテバテだ。早速、テントを張りくつろいだ。テントは我々以外に3張。久しぶりの大森さんと山本との山でのプチ宴会で、焼酎900mlとウイスキー400mlを飲みフラフラになった。狭いテント場での酔っぱらいは危険である。落ちたらただでは済まない。夕食のベトナム料理の『フォー』は結構美味しかった。昨年買った高度計付の時計が途中で電池切れとなった。高度が徐々に上がるのを確認するのが楽しみであったが残念であった。ささやかな楽しみがなくなった。時計盤は、訳の分からない表示をしていた。そして、今日の嫌らしい痩せ尾根やブッシュ漕ぎで、明日の核心部の通過が不安になった。東尾根は想像よりも厳しそうであった。

5／3（日） 晴れ⇒曇り

TS6:00⇒冷池16:00

4:30に起床。のんびりと準備をする。周りのパーティは次々に出て行った。TSからは先行パーティのトレースをたどった。アイゼンがよく利き快適である。しかし昨日の疲労が残り、ピッチは上がらない。

第一岩峰直下までは急な雪田から雪稜を登った。落ちたら終わりである。ノーザイルなので緊張した。第一岩峰はトレースに従い、左のルンゼから巻いた。本来、第一岩峰へは、ピークへ続く雪の付いたルンゼを直登するのだが、今年は雪が全くなくて、ブッシュ混じりの脆そうな岩場が出ていて難しそうに見えた。左のルンゼを登る。このルンゼは結構急である。それにステップの間隔が広くて疲れた。最初に登った人は、どんなに長い足をしているのか。足長おじさんか？不思議に思った。1時間ほどで核心部の第二岩峰基部に到着。山本トップで登り出す。私はセカンドだったが、チムニーは荷を背負ってではどうしても越えられず、山本に荷揚げをしてもらった。チョックストーンが挟まりかぶっている。腕力がいる。石がなければ全く問題のないところである。空身でも全身を使い必死で登った。それにしても山本の登攀技術には脱帽である。大森さんも、なり振り構わずに登ったとのこと。流石に核心部である。これを抜けると痩せた雪稜が北峰まで続いていた。

北峰ピークで

北峰ピークで黙祷。大声で薮内さんの名前を呼んだ。休憩後、南峰へ向かった。今年は雪が全くなくて、完全に夏道が出ていた。北峰には信州大

の山岳部の6人パーティがいた。五竜から来たとのこと。八峰キレットも雪は全くなかったらしい。今年はやはり雪が少ない。4月の長雨で解けたのか。バテバテで冷池に到着。今日は昨日よりも更にフラフラだ。大森さんが冷池山荘へ30年前のお礼に出かけた。ついでに買ってきたウイスキーで今夜もプチ宴会。疲れも加わり直ぐに酔った。天気は下り坂である。早々に寝る。爆睡。

5／4（月） 曇り時々小雨

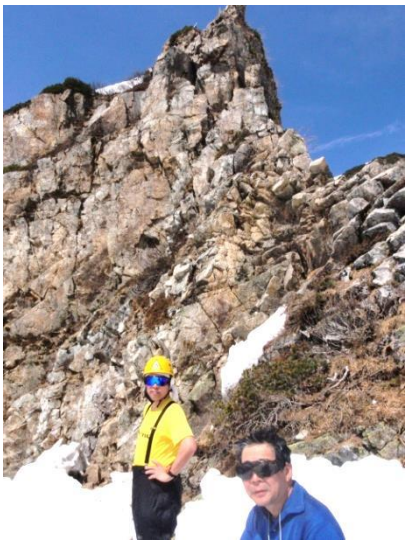
TS⇒大谷原

4:30に起床。起床時には小雨が降っていたが、出発時には上がった。午前中は持ちそうである。疲れが溜まりピッチが上がらない。途中でおばあちゃん二人に簡単に抜かれた。赤岩尾根も上部は夏道が出ていた。途中から西俣沢を下った。初めは、しばらく慎重にツボ足で下ったが、途中から尻セードでスピードアップ。西俣出合まで1時間ほどで大幅に時間短縮した。30年前の5月も同様であった。ただ、あの時よりも西俣沢の傾斜は緩く感じた。また、デブリが多いような気がした。出合からは山菜を採りながらポケポケ歩きで大谷原までは約1時間。大町温泉郷で風呂に入り、夕方には大阪に戻った。明日からは10日前に生まれた孫の子守りである。疲れた！

〈後記〉

しんどくて、怖い山行であった。久しぶりに緊張の連続であった。東尾根は思っていたよりもハードであった。山本に助けられた。また、5年前の小窓尾根より難しく感じた。歳のせいだろうか。今後このような山行は出来ないかもしれない。しかし、気心の知れた仲間との山行は楽しく、山での酒も美味しかった。来年はどこに登ろうかな。

第一岩峰下のトラバース



第二岩峰基部

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

第一岩峰・第一ジャンダルム

文中の第一岩峰・第二岩峰は麓から数えて初めの岩峰が第一、次に出てくるのが第二となっています。次ページのフクデンさんの頃はピークに近いほうから第一ジャンダルム・第二ジャンダルムの順。今と昔は順番が逆です。

このページの第二岩峰と次ページの第一ジャンダルムは同じ場所です。80年近く経っていますが、写真を比べてみてください。

鹿島槍東尾根 三題　その２

昭和13年春　鹿島槍東尾根登攀

昭和13年3月30日～4月3日　同行　赤松　伊藤(文)
福田泰次（旧15理）個人蔵アルバムより

遠見尾根合宿終了後、東尾根より鹿島槍の登攀を目指して赤松 伊藤の3人にて鹿島の部落に入る。

3月30日　松本より鹿島村に入り鹿島村にては狩野氏宅に泊めてもらう。

3月31日　鹿島村－西股小屋　西股小屋は北股西股の出合下の台地に最近造られた小屋である。勿論番人不在にて炊事全般皆んな自分達の手で行った。

4月1日　午前4時25分小屋を飛び出す。スーッスーッと染着いた雪の上をスキーを滑らして北股へと入る。ランプの光が森林帯に気味悪く走る。沢は氷河の如く凸凹している。北俣の奥は200メートルの高差をぐんと現して北槍が立っている。5時30分三の沢出会いに達す。早速スキーをアイゼンに穿き替えスキーデポとする。

三の沢を登るに従い背面の爺岳がモルゲンロートに映て全く美しい。雪は全く良くしまりアイゼンに最適のコンディションである。7時00分東尾根に達す。其処には第二ジャンが素晴らしく尖塔状に突っ立っているではないか。東尾根第一番目の難関第二ジャンダルム、これを如何にして乗り切るや。ともかく正面に入り込んでいるルンゼに取りつく事にする。伊藤・福田・赤松のオーダーでアンザイレンして上り初む。ルンゼは丁度アイゼンのツァッケの入る程度で適当にしまっている。1ピッチにて快適なテラスに達す。一休みの後、急峻なる雪面を登りワンステップ毎にアイゼンをカッチカッチに打ち込まねばならぬのでくるぶしが全くいたくなる。北股側をまきながら進む。アラ沢側は猛烈に雪庇が出てストンと落ち込んでいる。10時00分第二ジャンの頂に達す。20メートルばかり下ったところに問題の第一ジャンダルムが東尾根をさえぎっているではないか。

第一ジャンダルム（写真）

いよいよ東尾根最大の難関とも云うべき第一ジャンダルムの登攀だ。我々はコルで約30分ゆっくりとルート観察に費やす。田口一郎先輩が5月に登られたルンゼが軽そうだがそれを登るには少し

沢を下らねばならぬので、やはり田口二郎先輩が4月に登られた一番右側の荒沢側のリッジにルートを取ることにする。10時半攻撃開始。先づ伊藤トップとなり登り初む。A点より取付く。雪稜は荒沢側の雪庇に随分心配した。B点のコルに一度3人集まる。それより伊藤更に進む。C点よりD点にトラバースせんとするも何しろ岩の上に氷が薄くついている。之を一々割らねばならぬ。又その上に出てきた岩が逆層でつるつる滑って仲々手が出ない。バーティカルな壁だし一歩でも安定を失えば大変な事になる。C点に引返して赤松と交代する。伊藤はC点にて雪面にピッケルを打込みビレーする。小生はB点にて肩を利用してがっちりビレーする。赤松はこの2人のビレーに全てを託して慎重に壁を左にトラバースして行った。アイゼンのつま先だけのゲイトウで、ともかく彼はトラバースを終えD点に達す。D点より少さなクラック状の所に取付く。オーバーハング状で非常に悪いワンピッチだ。若し此処で一歩あやまれば、伊藤及小生に対し赤松のスリップは非常な衝撃的荷重として働く。果してそれが支え得るや否や、ともかく赤松は思い切ってこのオーバーハングの悪場を乗越す。この壁を乗越し雪稜に出た所は断然感じが良い。全員がこの第一ジャンの頂に達したのは丁度12時であった。それより約1時間平坦な雪稜を登攀、午後1時20分遂に頂に達す。3人の手は期せずして集まり互いに固い握手がかわされた。これで我々の長い間の望が叶えられたのだ。

北股上部が日陰になるのを待ち下山の途につき沢に入る。傾斜が比較的ゆるくなったのでスイテイングリセードを試みる。滑る事滑る事。登りにはあんなに苦労した200メートルの高度が僅か1時間で下ってしまい2時30分三の沢スキーデポに達す。それよりスキーにはきかえフィルムクラストの快適なスキーを楽しみ午後3時西股小屋帰着。

第一ジャンダルム（スケッチ）

夜は快適コンパだ。東尾根登攀を祝してソーセージをジージーとストーヴで焼きながら茶を飲むのだ。パイカンが開けられる。我々だけのヒュッテレーベンの夜は更けてゆく。何時までも何時までも真暗な鹿島の谷に抱かれて山の話は尽きない。楽しかりし6年間の山行のこと、将来の進み方、我々山に行く者には山に行く者の悩みがある。「星の光のもるる岩屋、自然を己が揺らんとしてさまよう我等がいこいのしとね」。ああ山の夜は更ける。

4月2日　西股小屋ー鹿島部落　再び訪れることがないであろう鹿島の村がやけになつかしくなり狩野氏宅に一泊することにする。

4月3日　鹿島部落ー大町ー松本

伊藤　／　福田

赤松　／ 伊藤

いずれも鹿島の東尾根に関する、この稿と次の稿は福田さんのアルバムに取材しました。アルバムにはその時々の写真がコースタイム・心情などを交えて、尋常科・高等科・東北帝大の各時代とロックガーデン・北千島・総集編の別にきちんと整理されています。福田さんの没後ご遺族が甲南大学に寄贈されていたものを、拝借して画像化しました。ほぼ全部のページを本号付録のディスクに収録しています。

なお、画像化は雨宮・越田会員のアイディアで、安井会員が大学との交渉にあたられました。こちらも併せてご紹介いたします。

また、持ち出しにご理解をいただきました大学当局とご担当者にも感謝いたします。

ディスクを開いてアルバムをご覧いただくとお分かりになりますが、戦前のこと、旧漢字とカタカナの歴史的表記で句読点がありません。手書きの文字からは、時代の空気とフクデンさん（福田さんのことです・以下フクデンさんと多用します）の情熱が伝わります。本稿では、歴史的仮名遣いは読めませんという若い会員のために、現代表記にして適宜句読点を補いました。

（編集）

鹿島槍東尾根 三題　その３

昭和11年5月 鹿島東尾根

パーティ 福田　伊藤(文)

福田泰次（旧15理）個人蔵アルバムより

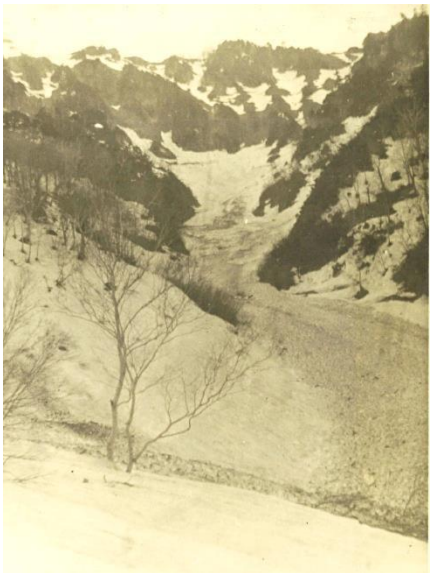
５月の東尾根登攀を目指して伊藤と２人で鹿島に入りたれど天候にはばまれ遂に目的を達し得ず。

5 月 5 日(晴) 大町(7:00)－鹿島村(7:50)－大川冷沢出合(8:30)－一ノ沢出合(9:40)－冷小屋(10:00～12:00)－12:30 まで北俣を登り雪崩のため小屋に下る(1:00)－(3:00)まで昼食－(4:00～5:00)まで三ノ沢偵察　冷小屋泊り

大冷沢・大川出合より鹿島槍を望む

5月6日(曇り後雨) 冷小屋(4:00)－三ノ沢出合(5:00)－三ノ沢を登り天候悪化の為引返し(7:0)0－三ノ沢出合(7:40～8:30)－小屋(9:00－11:00)－造林小屋(1:40)－鹿島村(2:40)

雪崩の危険を考え素晴しく早く小屋を出て、日の出までに尾根筋に達せんとせり。7時ころまで三ノ沢を登りつめ後200m位で東尾根に出る所まで達したが、天候悪化し加うるに雨さえ降り来たったので帰路の雪崩の危険性を考え、思い切って引返す。残念也。再挙を期す事切なり。



二ノ沢出合　猛烈な雪崩が認めらる

三ノ沢登攀中爺々岳を望む

尋常科の学校行事を欠席して、福田さんと伊藤文三さんが登りに行かれた鹿島槍、アルバムのメモから原稿にしました。経緯については山嶽寮第61号の「記録のない山行」に文三さんが書き残しておられます。フクデンさんのアルバムは本号付録ディスクに収録しています。

以下に文三さんの原稿（部分）を引用します。（編集）

さて、フクデン蒸発事件一年後の尋常科4年（今の高校1年）の昭和11年5月、修学旅行なるものがあった。何泊かで四国九州に行くという。それだけの日数と金があれば北アルプスに行けると、どちらが言い出したか、修学旅行をさぼってフクデンと二人で山行を決意。フクデンはお婆さんが死にかけているからと不参加届け（お婆さんが死にかけていると言ってよく学校をさぼったので、担任教師がお婆さんはまだ死なないのかねと言ったとか、言わなかったとか）。私は親が知り合いの県立病院のドクターに電話で診断書を依頼、そういうことなら用意しておくから自宅に取りに来いと。そこで神戸の上筒井のお宅に夜伺う。病名は腸カタルにでもしておきましょうかということで、静養を要すという県立病院の診断書もらって不参加届け（いやはや、ある意味では古きよき時代だった）。

山行の服装で甲南関係者に出会うとまずいと、二人別行動で大阪駅近くにあった好日山荘で落ち合い、着替えて名古屋乗換えで松本ー大町へ。

目的は三の沢より東尾根を経ての鹿島槍登攀。昭和8年4月、田口二郎、近藤 実、伊藤新一のパーティが初登したルートを、5月だから北俣本谷は雪なく、三の沢も雪の状態が安定しているだろうから我々でも登れるだろうと、記録を良く読んだフクデンが判断し、ホイホイと私がついていったというわけ。

大町から鹿島村の狩野さん宅まで歩いて行ったのか、車で行ったのか、何時頃着いたかの記憶なく、ともかく狩野さんのところで一泊。翌早朝出発。大川出合い造林小屋の前を通ったのは何時頃だったか、前年田口、近藤両氏に見つけ出され連れ戻された時の話しをフクデン喋ったと思うがどうも思い出さない。

三の沢出合いはかなり雪が積もっており、アンザイレンして尾根筋までコンティニアスで登る。第一岩峰、第二岩峰ともにビレイして登った記憶なく、どうも時間稼ぎもあり本谷側に逃げたのではないかと思う。北峰に立ち握手なんて記憶なく、右股をいっきにグリセードで下る。

現在の記憶は、ここまで。いやはや、いいかげんなもの。

甲南の正規の記録に無いこの山行、記録をよく整理し山行の記憶力抜群のフクデンと、あの世で思い出話をしようと思うこの頃であります。

山嶽寮第61号「記録のない山行」より

ー 紀　行 ー

散々な旅　素晴らしき旅

雨宮宏光（昭33経）

(1) ミンタカ峠からカラクリ湖　新疆・タシュクルガンでの不法出国

2000年8月、我々は念願のミンタカ峠に達した。我々とは甲南山岳会の米山、雨宮、飯田、池内（現役）の四名である。ミンタカ峠は中国とパキスタン国境に位置しており長く未解放地域だったが、1999年に開放地域となり、イスラマバード在住の督永忠子氏らが訪れたのが一番乗り、我々が二番乗りだった。

日本で督永さんから提供された写真の資料から、ミンタカ峠周辺の山の登頂を計画していたが、この山、落石が激しく登頂を断念。改めて督永さんの写真を検討し、イルシャッド峠（ワハーン回廊とパキスタンの境界）の西に位置するキルギス峠に前進テントを設営し、ヒンズークシ山脈の無名峰（推定標高5400m）に登頂した。なおキルギス峠は甲南隊がつけた名称で地図にその記載はない。

山も登った。当初目標の山断念で解雇を覚悟していたポータも雇用が継続されてよかった。下山後、ジアラットの川原でガイドとポータが車座に坐り、各自の賃金計算に約1時間かかったが、文句を言うポーターは一人もおらず、支払いが終わるとポーター全員が、我々に抱きついて「ありがとう」と言ってくれた。ポータの一人は特に印象に残っている。ファザル・ラン・マンという米国の俳優、メル・ギブソンに似たハンサムな男。以前ラジオに出演していた元歌手でキャラバンの夜、両手を空に向かって広げ歌っていた。テントから首を出し彼の歌を聞かせてもらったが、焚火の煙と彼の美声が星空に吸い込まれ、歌の意味不明ながら胸打つ旋律であった。

ジアラットで賃金を受け取ったあと、迎えにきていた息子の手を握り2人で嬉しそうに家に向かう元歌手親子の後姿は、実にほほえましかった。

ススストに戻り日数に余裕があるので、カラクリ湖、ムスターグ・アタ（7546m）・コングール峰（7719m）見物の旅は、最後に不法出国となった最悪の旅。まずススストで雇用した車に乗ったら、まったく知らぬ御仁が2人乗っている。1人は運転手の友人とかでよくある運転手の余禄収入の男。一切挨拶なく道中無言。もう1人はパキスタンの役人と称する黒い書類カバンを持った若い男。

「公用だからお願いします」という挨拶である。労働とは無縁な白い手指はどうやら役人？らしい。甲南4名で貸しきりのはずの車に7人乗車。クンジェラブ峠（中・パ国境）越えドライブは満員で出発となった。同乗していた無言の男はタシュクルガンで下車、ありがとうの一言もない。

自称役人氏は俳優・東山紀之に似たいい男「タシュクルガンのホテルとカラクリ湖への車もお世話します」といい、その通り実行した。

彼が最初に案内してくれたホテル受付の小姐は、編み物の手はよく動いているが、「いまは休憩時間で受付は駄目」と、信じられぬ対応。労働条件を徹底的に守ると、あんな愛想のない顔に

なるのか。ここで自称役人氏（ナジーム・26歳）は、次のホテルまでの車を手配し、タジク人がオーナという別のホテルを世話してくれた。なかなかやる。

ナジームは夜の食事場所はことレストランまで教えてくれ、一緒に食事と言った覚えはないのに店に現れた。

マカロニ・ウエスタン映画セットのような町並みにある店は、安っぽいペンキ塗りの建物。店内は赤や緑のスポット照明が客席を照らし「ことによると」と、期待を持たせた怪しげなレストランだったが実際はなにもなく、ナジームの食事代は我々もちだった。

カラクリ湖に行ったとき雇用した車の運転手は、長年観光客からいかにしてボッタクルか、だけを考えているとあんな人相になるのか。発車の前に運転席から後部座席の我々に手をだして「何か」と聞くと「カネ」。運賃後払いがここでは通用しないらしい。

カラクリ湖の湖畔には洒落た休憩所があるが有料らしい。こんな所でカネを払う気になれず湖畔を散歩していたら、腕章も名札も付けていない普段着の姐ちゃんが現れて「ここは有料」と「15元」。多分集金した金は彼女のイン・マイ・ポケットに違いないが、文句を言うのも面倒くさく、ポケットにあった日本の100円玉二枚で200円渡したら黙って受け取った。

ムスターグ・アタとコングール峰は、ばっちり見えた。これで200円は安い。ムスターグ・アタはスキー滑降に絶好の山で、多くの登山者がスキーで登頂している。嘘だと思うなら南井英弘さんのムスターグ・アタ登頂記を見てください。（関西学院大学・山岳会ホームページ参照）

ナジームが案内してくれた高級レストランで飲んだ正体不明のアルコールは、もともと胃腸の弱い飯田を直撃し彼は完全にダウン。パキスタンに戻る日の朝、動けぬから「ススト への出発をのばしてくれ」と言う。ススト で待っているガイド（ナウシャッド・カーン）にこれ以上心配かけられぬと、飯田をなだめホテルを出る。歩いているのは我々だけだ。早朝の並木の涼しい道を飯田はゆっくり、ゆっくりと歩く。

実は下痢漏れ対策でホテルのバスタオルを失敬して尻にあてがっているので、さっさと歩けないのです。その時ホテルの若い男が自転車で追いかけてきて、訳のわからぬ言葉で話しかけてきた。身振り、手振りを察するに「備品のバスタオルがなくなっている」と、いっているらしい。ここで10ドルを彼に渡すと一礼して黙って引きかえした。米ドルは強い。

ホテルから歩いて15分ほどで国際バス乗り場に着く。飯田はそうそうにトイレに行ったが直ぐ引き返してきた。「あれでは用を足せない」これ以上は汚いので筆を控える。

パキスタン行き国際バス切符発売所で隊長・米山は、発売窓口の先頭に立ち今や遅しと切符発売を待っていたら、突然に切符発売。パキと中国が窓口に殺到。あれえ！！　一番先頭にいた米山は、はじき飛ばされて列の中ほどに後退させられている。それでもなお窓口に突進してキップを買い、隊員に配って10分ほどしたらパキスタン行のバスが来た。

行列などという習慣はない。また殺到。座席確保に必死で乗り込んだら立っている人などいない。なんのことはないキップは定員数しか発売していなかったのだ。人間の乗車はここまで、ここから荷物の積み込みが始まる。この様子を仔細に書くとページが尽きるので、見聞した一部だけを書きます。

まず運転手と助手と荷主が大声出して、いちいち運賃交渉するから、定時出発（あるらしい？）まで2時間以上かかった。バスの両横の道に置かれている荷物の総量はバスより大きい。全部積み込むのは無理だろう。荷主とバスの助手との運賃交渉は凄まじい怒鳴り合い。交渉がまとまると、助手はまず金を受け取りバスの屋根に登って荷を積む。降りて交渉、また積む。屋根が一杯になったら車内の通路に積込む。バスは通路も屋根も荷物でびっしり。やっとバスが動き出入国管理の建物についた。ここでバスから降りて出国手続きをするのだが、ここで失敗した。

出国のとき団体さんの後ろにならんでいた我々は、係官の先へ行けとの手振りにつられて出国手続きをせずに、バスに乗ってしまったのです。

こんなことってあるのか。担当役人は添乗ガイドが出した旅券の数と、引率されている団体客の人数チェックを怠り、甲南隊も団体客として扱ってしまったのだ。（われわれにも非がある。出国スタンプ押印を請求すべきだった）

バスが1時間も走ったとき、検問所があり長いこと停車させられたまま。

いったい何をしているのか。ふと旅券を見ると出国スタンプが無い。さあ、大変だ。これは密出国である。

不法出国の甲南隊は「バスから降りろ」と命じられ下車する。検問所で米山と中国将校の話し合いが始まった。交渉術に長けた米山が中国将校に外交手当てを謹呈して問題解決かと期待したが、二人の話し合いはバスの窓から他の乗客に丸見えで、この交渉は不可能。

約一時間立たされたまま。ここからは米山の話。彼が自分の息子より若い将校に平身低頭、謝罪したら「今回は日中親善で大目に見る」といわれたとか。我々も子供みたいな兵隊に最敬礼し改めて出国スタンプを捺してもらう。交渉ごとになれた米山も冷や汗をかいただろう。長い時間他の乗客を待たせて迷惑をかけたので、目を伏せてバスに乗り込んだとき、一番前の座席にいたカップルのフランス人が「ナイス　ミート　ユウー」と笑って迎えてくれた。検問所の威張りくさった若造たちに比べてなんという寛容さか。

この二人、ギターを抱えた若い長髪の男と、かなり年上の女とのペアーで、長い旅の途中に見えた。メルシー　ムッシュ　マドモアゼル。

疲れが出て眠ってしまった。やっとスストに着いた。ガイドのナウ・シャッドがほっとしたような顔で迎えてくれた。彼はタシュクルガンからのバスが着くたびに我々を迎えにきていたのだ。

このハプニングのショックで飯田の下痢が止まってよかった。

散々な旅に懲りず、まだ日数があるからと、スストからチラスに。カラコルム・ハイウエイが開通する前の古きシルク・ロードをたどることにした。途中バブサール峠（4250m）を越え、ナランまで30キロほどの道は猛烈な悪路、走るというよりは車輪を転(ころ)がして約9時間。途中にあった橋にはびっくりした。橋桁は両岸を繋いでいるのだが、そこに敷設されているはずの道板は車2台分の長さ、10メートルくらいしかない。

あとは橋桁だけと工事未完成の姿、下の水流が丸見えだ。あったはずの道板はおそらくどこかの家の壁板になっているのだろう。これでは橋を通過できない。ここで思考停止になるのが日本人。

パキの運転手はまず車1台分の長さを進み、車の後ろにある道板を進行方向に移設して前進路を確保し、そろりと前進。この作業を繰り返して見事に橋を渡りきった。

我々は車に乗ったままパキスタン人のしたたかな、現場対応力を見物していたのです。

途中の村は鉄砲を持った村人が多く、あまり安全な場所ではないらしい。

夕方、緑の林間に建つナランのホテルに着いた時は、ほっとした。道中食堂らしき店がなくビスケット数枚だけの昼食で腹ペコ。早速に夕食を注文した。

薄暗い食堂は甲南隊の4人だけ。待つこと1時間、豆のスープとチャパティだけの粗末な食事が出てきた。ガイドが気を使って厨房に行ったが客がほとんど来ないホテルでこれしかないとの事。カラコルム・ハイウエイの開通で古きシルク・ロードの旅人往来は途絶え、泊まったこのホテルで見た従業員は一人だけ。コック、ウエイター、受付、支配人を一人で兼任している超合理的経営のホテルだった。

ミンタカ峠、キルギス峠、クンジェラブ峠、バブサール峠と欲張った峠の旅は山に登るより疲れた。最後に一言。クンジェラブ峠から先（新疆）は嫌いだ。

タダ乗り、タダ食いの役人氏には、なぜか「ありがとう」と言ってしまう。散々な旅で彼が一番親切だったから。

(2) 2003年・可可西里（ココシリ）とサーズ騒動受難の旅

昔読んだプルジェワルスキーやS・ヘディンの探検記に書かれた、崑崙山脈・南支脈の可可西里山脈は、この2人の探検家以後訪れた人がなく、1994年日中合同学術探検隊が調査した記録が、唯一の資料である（『遥かなり秘境可可西里』松本征夫編）。過去2回、チベット横断6000キロを行った次はラサから北上し青海省の西寧まで縦断する。最大の目的は途中にある秘境可可西里への憧憬であり、出発前の現地旅行社とのやりとりでは、ココシリの卓之湖付近まで「道あります」に、期待をもっての出発となりました。

2003年4月。サーズ騒ぎのうちに関西空港から成都に。関西空港はガラガラ。全員マスク着用と気持ちが悪い。後で知ったがこの日のフライト以後、関西～成都便は廃便。また、中国への渡航自粛でわれわれ（米山・雨宮）が最後の客だったらしい。

成都からラサ。空港には今回のガイド辺　次（Pempa Tsering・34歳）と運転手、落　桑（lop sang・41歳）が迎えにきている。辺　次は歌が上手いなかなかのハンサムで日本語はダメだが英語なら大丈夫。14歳まで僧呂だったという。行く前から念を押していた車をチェック。4500cc豊田・砂漠王の名前にふさわしく過去2回のチベット横断のときの車よりかなり上等だ。「ラサ周辺を10年しか走ってない」とガイドは自慢していた。事前にやかましく請求していた酸素ボンベはいつものことながら、ビニール袋に酸素が詰まっている無いよりマシ程度の代物でした。

ラサ空港着後高所順応をかねて、カムパ峠（4749m）とヤムドク湖を往復する。成都（平均標高500m）からカムパ峠と一日で獲得高度4250mは、二年前にも実験済みで、これはなかなか効果があります。

4月28日	（曇り）	ラサ　納木湖―当雄	230キロ　所要8時間40分
4月29日	（曇り　雪）	当雄―雁石坪	380キロ　所要9時間30分
4月30日	（曇り　雪）	雁石坪―五道梁	270キロ　所要4時間10分

五道梁の直前で北にココシリ山脈が見える。公路から離れて西方向、平坦な湿地の高原はどこまでも走れそうだが、困ったことに道がすべてレベルアップしていて、高原に車が降りられそうに無い。事前の情報では小道ありますといっていたガイドもかなり自信喪失の感じ。五道梁の招待所（宿）に入り早速地元で情報集め。ガイドの話では車1台で行くのは自殺行為で2台準備して、ぬかるみに入ったら助け合っていくべし、と言われたとか。

青海省から少数の砂金採りと塩採りが毎年やってくるが、どのように行っているのかは不明等、バッド・ニュースという。ラサ出発のときから感じていたが彼は危険なココシリなど本当は行く気なく、バッド・ニュースを伝える顔が気のせいか明るい。

五道梁を出発して30分ほど、公路の西側の川に立派な橋があり、その向こうにタイヤ跡が砂地に刻まれている。この道を行けばココシリの高原に進めるが、到るところに水たまりがある湿地帯で今回の目的を完全にあきらめる。遠望したココシリ山脈のあの付近に今回目的の卓乃湖があるのだろう。だが一台の車では到底いけそうにない。以後鉄道工事現場見学みたいな眺めばかりで、崑崙山脈・南支脈をぶちぬいたトンネル3ケ所を見た。

チベット高原鉄道は80％程度完成しており、試運転の列車も走っていた。ラサからゴルムド間1160キロメートルの途中人の住む場所は5ケ所くらい。人家が全くない荒涼たるチベット高原に作られたプラットホームがあったが、こんなところに駅を作っていったい誰が乗降するのだろう。

この鉄道はラサへの観光客と、チベットで暴動が勃発したとき軍隊を輸送するために作られたのか。標高5000メートル近い高原を走る鉄道だから、乗車中に高山病で死ぬ人がでるかもしれない。

帰国後日本で映画『ココシリ』（原題：可可西里）を観た。2004年に制作された陸川（ルー・チュアン）監督の中国映画。チベット高原北部の「ココシリ」（フフシル）に棲息するチルー（チベット　カモシカ）の密猟者を取り締まるため、有志によって行われているパトロール活動を描いたドキュメンタリー。

ココシリの砂上に散らばるチベット・カモシカの骨の残骸。密猟者の群れと取り締まる隊員との生命をかけた話し合い。砂地獄に埋もれていく密猟者など見応えあるシーンの連続で、上映時間はあっという間に過ぎた。

この映画の中でコンテナの後ドアーを開いたままにし、屋根からカーテンをたらして入口にした、即席造りの酒場が映っていた。これはまさに五道梁の招待所の近くを散歩していたときに見た酒場、ソノモノだ。

標高4500m、富士山より高い場所にある酒場。あの時コンテナにもたれて赤いミニスカートの女が、煙草を喫っていた。煙草を投げ捨てた女は入口のカーテンをめくり、コンテナ（酒場）の中に入った。

暗い細い道にぽつんと街灯がひとつコンテナを照らし、コンテナ内部の明かりがカーテンを通して影絵のように、酒場の人影を映しだしていた。
地の果てのようなこの場所に商売のため遠くからやってきたに違いないミニスカートの女。
ココシリの冷たい風がカーテンを揺らし、かげ絵には女ともう一つの人影がゆらいでいた。
映画でこの酒場の情景はドライなタッチで描写されていて，酒色の雰囲気を感じさせない。厳しい自然に繰り広げられる男たちのドラマを印象づけるため、ありがちな通俗描写を避けた監督の演出だろう。

五道梁から西寧まで途中検問所が数カ所あり、白衣の衛生員にサーズの消毒液を何回も噴射された。髪の毛がびしょびしょに濡れ顔に消毒液が流れ落ちてくる。うしろに撮影している連中がいる。中国のサーズ対策を宣伝するパフォーマンスの被写体にされているのだ。
青海湖で予約していたホテルは閉まっており、日程に充分な余裕があるので緑濃いアムネ・マチンの山麓を過ぎ、黄河源流記念碑を探しに行ったが見つからない。無人の荒野を3時間以上走り、途中見たのはオオカミみたいな大型のチベット犬だけ。突如湖が現れた。湖に沿って2キロメートルほど走ったが湖はまだ続いている。一休みと湖畔で湯を沸かしカップラーメンを喰ってたら、雹が降ってきて風が吹き、湖面に波が立った。その時突然に、こんなところで車が故障したら「一巻の終わりだ」と思ったとたん怖くなり、引き返すことにした。
その夜泊まった瑪多という街は、風に吹かれて転がるペットボトルやスナック菓子の袋が散乱する雑踏の街だったが、寒々としたチベット高原から解放された気分でほっとした。
西寧のホテルでは病院で血液検査とレントゲン写真でサーズに罹病していない証明を取ってこないと宿泊お断りに、病院に行く。うす暗い病院の廊下はコンクリートむき出しの汚れた建物。ここにいるだけで病気になりそうだ。大勢の人が並んで検査を待っている。並んで待つこと約30分、やっと順番がきた。
ここの血液検査はひどい。太い注射針で採血するのだが、注射針の交換は一切なし。注射針に付着した病気の伝染はサーズより怖い。病院の検査から解放されホテルに到着したら、フロントの前に出張保健所が机を並べて病院の証明書をチェックしてやっとチェック・イン。テレビのスイッチを入れたら「サーズ宣戦布告」の文字。まるで戦争だ。もう日本に帰ろうと翌日西寧空港でガイドとサヨナラし、北京空港に。
なに、これ！　人がまったくいない。サーズ騒動で空港は閉鎖か？　このとき成田臨時便ありのアナウンス。ありがたい、これで帰国できると無人の階段を二階まで駆け上がり、出発カウンターで新しく切符を購入し（乗機日・1回変更可能の切符は無効とかで）帰国した。
機内は乗客16人の超閑散。翌日会社に行ったらサーズ懸念で10日間の出勤禁止と散々だった。思わぬ休暇で新聞、テレビをじっくり見たが、成田臨時便は邦人救出のため政府が用意した日航特別便と知った。深謝する。
ところで日本でサーズに罹病した人などいたのか。私と米山はメディアが大騒ぎした風評の被害者だ。
思い出せば9・11のニューヨーク・テロのニュースをギルギットで知ったとき、米国の軍事使用優

先で明日からイスラマバード空港の民間使用は禁止のデマを信じ、夜を徹してイスラマバードまで走り、成田行きのパキスタン航空・臨時便に乗ったときは、出発前に購入していた切符は通用した（乗機日・1回変更可能の切符）。

甲南隊五人のパスポートを預かっていた日パ・トラベルの若社長は、飛行機の乗り場まで甲南隊を見送ってくれ、出国スタンプを捺したパスポートを渡してくれた。一人で五人の出国手続きを済ませていたのです。イスラマバード空港とはいえ飛行機の乗り場は国外である。なぜそんなことが出来るのかと彼に聞いたら、首からぶら下げたカードを見せ「オレは偉い、顔が利くのだ」と胸を張った。帰国便変更可能のチケットが北京（日航）は駄目、イスラマバード（パキスタン航空）が有効だったのは、若社長の顔か。

（3）パタゴニア　～　1999年

越田がパタゴニアに行くと聞いて参加を希望したら「雨さん、定員オーバで締め切り」とつれない返事。よし、俺も行くぞと毎日新聞でパタゴニア・ツアー説明会の広告を見て、当日説明会場に。

大阪駅近くの毎日会館の説明会会場は収容200人程度の立派な会場。

午後2時からの説明会場に20分前に到着した。定時に担当者が現れスライドを映して説明が始まったが、聞いているのは俺だけだ。最低参加者五人でツアー催行とあったが、これではツアー中止かと担当者に質問したら「そうなります」。 時間を無駄にした。ネットで海外旅行社のパタゴニア・ツアーを検索したらある、ある。尤もこんなツアーに参加するだけの言語能力がなく、パタゴニアは諦めていたら、その年末に越田がくれた「雨さん、欠員が出た。パタゴニア行きますか」の電話に即オーケー。

電話で音楽が聞こえていた。彼は酒を飲みながら素敵な音楽を聞きながら電話をくれたのだ。ドタキャンの誰かさん「ありがとう」。

チリ南端でペンギンの群れと灰色のマゼラン海峡の前に立ち、強風のためテントが設営できず、テントをかぶって寝た湖畔のキャンプサイト（名前失念）から登り2時間ほど歩いて、フィッツロイの奇峰岩峰を目の前に眺め、麓のレストランで、うまいステーキをいやになるほど食ったあの旅は、素晴らしかった。アルゼンチンに入って大平原の一軒家で昼飯に食べた「アサード」という羊の焼肉は最高。家主が羊を焼いている現場を見せてくれた。羊の皮を剥ぎ四足を思い切り引っ張って串刺しにし、焚き火でじっくりと焼き上げる。焼きあがった羊は畳一枚ほどの大きさの板に貼り付けられている。その板に、たらたらと脂肪が流れ落ち、余分の脂肪が抜けていく。ナイフを持った家主は、貼り付けたままの羊の肉を切り取り、客に提供する。焼き上がりに要する時間は4時間くらいと聞いた。

つまりアサードを賞味するには、事前の予約が必要なのです。

帰国便は飛行機会社のストライキで予期せぬアンカッレジ経由となり、往復機内食11回。大袈裟だが南極（チリ南端）と、北極（アンカレッジ）をまたいだ大旅行であった。

この旅には信じられぬ話がある。

現地で食べた雲丹が気に入った越田が、同行のガイドに100ドル渡して同じ品物を自宅に送ってくれと頼んだのはいいが、帰国していくら待っても雲丹が来ない。なんと7年後に越田の家に怪しげな荷物が着いたというのだ。彼の奥さんは気持ちが悪いと荷物を開けようとしない。越田が包みを開くと缶詰の雲丹が出てきた。判読しにくい手紙が添えられており、次のような内容だったそうです。

我々を案内したチリ側のガイド（ジェローム）はフランス人で、中学校で英語を教えていた。夏休みを利用してガイドをした外国人としての不法就労がバレ、我々と別れてすぐ国外退去になった。フランスに帰国して実家の裁判沙汰に巻き込まれ、その解決に5年。さらにチリを再訪して長期滞在許可をとるのにサンチャゴで長いことかかりパタゴニアに戻れず、預かっていた100ドル分の雲丹を送れなかった……。

彼は越田の住所のメモをずっと保管していたのです。

7年間もほっておいて送ってくるとは。普通では考えられない。でも約束を実行した律儀なガイドの行為は美談です。お詫びを込めた荷物の中身は、雲丹のカン詰（12缶）、蟹のカン詰（10缶）、シーフード・パテのカン詰（2缶）、カラファテのジャム瓶詰（8個）、チョコレート一箱、マテ茶、木彫りのペンギン、その他いろいろ。カラファテとプンタアレナス（チリ南端の町）の特産品がぎっしりつまっていたそうです。

越田に話を聞いてパタゴニアのアルバムを引っ張りだした。カラファテのジャムを食べた人は「パタゴニアを再訪する」という言い伝えがある。小柄なガイド・ジェロームの写真を見る。彼はカラファテのジャムにメッセージを込めたのか。ジェロームは、今どこでどうしているのだろう。

おわりに

冷たく乾いた岩と雪のカラコルム。
風土がもたらす荒涼のチベット。
肥沃な土壌に恵まれたアンデス。

各地の旅で感じたのは、貧困のカラコルム、荒涼のチベット、豊穣のアンデス。苦い体験は、新疆での不法出国。サーズ受難の中国（チベット）。ビンラディンのテロで散々な目にあったパキスタン。それにひきかえパタゴニアの旅の素晴らしかったこと。

本や写真だけの世界だったフィッツロイが、いまこうして目の前にある。

紺碧の空に屹立する岩峰、陶然とその山容に見とれていた、あのとき。

パタゴニアはどうしても行ってみたかった所だったのです。

この旅を企画してくれた田村俊介さん、誘ってくれた越田和男君。「ありがとう」ございました。

ー 論　考 ー

日本アルプスの発見　その実像と虚像

～甲南山岳部　誕生の源流を探って～

雨宮宏光 （昭33経）

はじめに

表題の稿は、明治、大正時代に日本アルプスで探検登山をした居留外国人と日本人の登山を『イナカ』、『ペデスツリアン』という二つの誌を資料として作成し、甲南山岳会通信61号に載せていたのですが、事実誤認の記事がありそれを訂正し、英国人が刊行した英文誌『イナカ』を原著に忠実に訳したとき、時刻表のような記事となっていたのを読み物風の文章に書き直しました。同時期、日本人が刊行した『ペデスツリアン』については、事実誤認の箇所だけを訂正し、資料調べの時に知ったエピソードをコラムとして加筆しました。

サブタイトル・甲南山岳部　誕生の源流を探って、を付記した訳は次章に書いています。

甲南山岳部の誕生を啓発した　居留外国人の登山

甲南山岳部90周年記念の集会に際し、山岳部が生まれる20年以上前から活発な登山活動をしていた、コーベ・マウンテン・ゴートクラブとその機関紙イナカ、神戸草鞋会とその会報ペデスツリアンに目を通しました。この二つの登山団体の活動に加えて神戸の地が背山にロック・ガーデンを控え、近代登山の発祥に最適の環境を持った地であり、そこに甲南山岳部誕生の土壌が醸成されていたと知りました。

既刊の甲南山岳会75周年記念誌にも田口二郎さんが、『甲南の山登り』と題したエッセイで「系譜的には、甲南の山登りは、藤木さんのRCCをその根源にもつと考えてよさそうである。尤も阪神、正確には神戸には、**～外人が始めた根強いハイキングの伝統～**があり、甲南の山登りの発生も深いところでそれにつながっていた。また甲南山岳人に共通したもの、それは何と云っても六甲連山の山麓に青春を過ごしたと云う一点にあるのではないか」とも言われています。

今も六甲山に残るドーント岩、シーダ・カテージ「杉之茶屋」、ドーント・リッジの名称由来に思いを馳せるとき、知られざる外国人登山家、H・E・ドーントが編纂した機関紙イナカ、六甲山の山麓に生まれた神戸草鞋会の会報ペデスツリアン、この二つの誌には明治・大正時代の登山記が記載されており、昭和の初め登山案内書など少なかった時代に、甲南山岳人たちはこの二つの誌から日本アルプスの概要を知り、これが甲南山岳部の誕生を啓発したと思います。

2人の英国人　W・ウエストンと知られざる登山家　H・E・ドーント

明治中期から日本アルプスの探険と登山に足跡を残した著名なW・ウエストンを称え、例年6月上高地で開催されるウエストン祭。その陰に明治末期から大正にかけて日本アルプスに踏み入り、日本人にその登山情報を伝達した、同じ英国人H・E・ドーント他の外国人のいたことは、あまり知

られていません。
次章では1910年、神戸居留外国人が結成した登山クラブ「KMGC」の会員が、日本アルプスに刻んだ足跡を日本人に伝達したことが、日本アルプスの開発に貢献したのに対して、ウエストンの『日本アルプス登山と探険』が、不幸にも日本の近代登山を啓発する書とはなりえなかった経緯を書きます。

W・ウエストン・運悪き小島烏水との出会い

明治21年（1888年）来日し大正4年（1915年）の最後の離日迄の間に、ウエストンは日本と英国を三回往来したが、帰英の都度英国山岳会他で日本での登山と探検に就いて逐一発表し、明治30年（1896年）ロンドンのジョン・マレー社より日本滞在中の四年間の登山をまとめた『日本アルプス登山と探険』を刊行した。
ウエストン以外にも1877年、W・ガウランドが槍ケ岳に、1878年、E・M・サトウが針の木、立山に、R・W・アトキンソンが八ケ岳、白山に登っているが、これらの日本アルプスの先駆者達は、ウエストンほど熱心にその登山を英国で発表していないし、日本人にもその登山情報の伝達に熱心ではなかった。

《コラム》　日本最初の近代登山

《1874年、W・ガウランド、E・M・サトウ、R・W・アトキンソンの3人が、ピッケル、ナーゲルを使用した登山を六甲山で行っている》

《コラム》　日本アルプスの命名者

《1881年、イギリスの日本学者チェンバレンが編集した『日本についてのハンドブック』の中で、"Japanese Alps"という言葉が初めて登場。この本で信州の山岳地帯の記述を担当したのがW・ガウランドで、彼が「日本アルプス」という名称の命名者である》

次にウエストンの登山について書くなら、彼の二回目の日本滞在中の登山が南アルプスに集中しているのは、北アルプスはすでに多くの外国人が登っており、英国山岳会に報告する価値に乏しいと彼が考えた、とするのはかんぐりすぎだろうか。
また彼の日本アルプス紹介が些か誇大に英国山岳会に伝達されているのは、ウエストンの著書『日本アルプス登山と探険』『極東の遊歩場』は、日本人への登山情報伝達を意識して書かれた本でなく、その探険・登山の内に、英国山岳会への入会に対する願望達成が底辺にあったといえよう。
庄田元男はその著書『日本アルプスの発見』でこのことを「ウエストンの稚気」として婉曲に批判されている。
勿論このことがウエストンの明治における日本アルプス開拓の功績に影響するものではなく、異国の地にあって未知なる山々に登山し、そこに日本人への登山情報伝達を求めるなどは、日本

人の勝手な言い分だが、問題はこのウエストンの原著（1896年刊）が昭和8年（1933年）岡村精一によってはじめて翻訳されるまで、その登山情報が、ひとり小島烏水の囲いこみのうちに、翻案、意訳、抄訳、剽窃により虚像として伝達されたことである。

小島烏水に就いて瓜生卓造は日本山岳文学史の中で、痛烈な批判を書いている。例えば烏水の「槍ケ嶽探険記」の報告には、自らの存在を鮮明にする為に生死を賭けた登山（烏水自身の記述）にもかかわらず、烏水をウエストンに紹介した同行の岡野金次郎に一切触れていないとし、これでも怒りが収まらないのか、資産家の子弟であった岡野に抱いていた烏水の卑しい嫉妬が、探検記で岡野を黙殺したとしている。

また武田久吉（アーネスト・サトウの次男）は、『岳人・199号』で烏水が雑誌『大陽』十巻二号に掲載した「甲斐の白峰」と称する登山紀行は、ウエストンが明治37年（1904年）に書いた南アルプス白峰（現在の甲斐駒岳）の英文からの翻案・剽窃であったと発表した。これに対して烏水は「あれは小説だ」と武田の突っ張りに身をかわし、武田も武田だ、「あれは小説として読めば面白い」と糾弾の筆を緩め、山岳界重鎮二人の八百長的水入り相撲で、この問題はうやむやの内に土俵から消えた。

山の世界において自身の顕示に走った烏水の言動が、当時貴重なウエストンの登山情報を歪め、虚像として日本人に伝達されたのである。

ウエストンの『日本アルプス登山と探険』が、知らぬまに自己顕示の種本とされたことに、泉下のウエストンは顔をしかめているだろう。

日本アルプスの黎明期において活動した日本人が、西洋人の登山情報を直接に得たのは、以下に挙げるH・E・ドーントの功績であり、ウエストンの『日本アルプス登山と探険』が昭和8年に翻訳された時「この書は古典として黎明期の中部山岳地域を懐古する書としての評価は受けても、もはや近代登山を啓発する情報とはなり得なかったのである」

（前田　司・記　日本アルプスの発見より引用）

日本アルプスの実像を伝達したH・E・ドーントの略歴

H・E・Daunt　英国人
1894年　来日し神戸バキューム　オイル　カンパニー勤務。
1910年　コーベ　マウンテン　ゴート　クラブ「K・M・G・C」西洋人の山岳会を結成。
1915年　機関紙イナカ『Inaka』を創刊。以後1924年まで全18巻刊行。
1915年　英国の王位地理学会会員となる。
1920年　英国山岳会に入会。ウエストンの推薦による。
1924年　帰国。

《コラム》　蔵書がヒマラヤ熱を啓発

《H. E・ドーントは、離日に際し所持していた山関係の蔵書約200冊を当時神戸で亜米三商会

を経営していた西堀（西堀栄三郎の兄）を通じて、京都帝国大学図書館に売却する。時の図書館長・新村出（広辞苑著者）が図書館予算から費用を支出した。
この蔵書を核として、その後桑原が中心になって更に本を集め1927年1000冊に達したという。今西、西堀、桑原等がこれらの蔵書を読みAACKのヒマラヤ熱をかき立て、以後日本アルプスから海外の山へとその行動が広がったとすればH・E・ドーントは日本人の目を海外に向けさせた知られざる功労者である》

『イナカ』 コーベ・マウンテン・ゴート・クラブの機関紙

明治後期から大正期にかけて、神戸に居留した外国人達が展開した欧米スポーツの記録は、『イナカ』という機関紙に登山、ゴルフを中心に記録されている。その発刊主旨は、H・E・ドーントの言葉を借りると「俗界を離れた人跡まれな土地を放浪したときの素朴な記録を形あるものとして残す」とあり、このイナカには～六甲山の回顧録～という副題がつけられていて、1904年頃神戸で結成されたAncient Order Mountain Goats のメンバーが参加する登山、ゴルフ他、六甲山に関する古い記録が記載されている。

この会は1910年Kobe Mountain Goats Club 「K・M・G・C」と改称され、その頃から六甲山頂のドーントの別荘を拠点として、冬の六甲山の尾根や谷を歩きまわっている。

イナカはKMGCの機関紙で著作はH・E・ドーントとあり、ペンネーム、ベル・ゴートで執筆されている。イナカの挿入画に鈴を持ち放牧の羊を誘導する人物が描かれているが、前後の文節からこれは登山者を導くH・E・ドーントを模写していることがわかる。

イナカは、大正4年（1915年）～大正13年（1924年）の間に18巻刊行されたが、居留外国人と母国イギリスの関係者に販売することがねらいでこの理由は、W・ウエストンの『日本アルプス登山と探険』の発行主旨と似ている。

刊行部数は100部から200部と少く、又価格が5円から7円50銭と当時の日本人には高価であったこと、英文であったことから日本人が入手することは稀であった。

ドーントは明治34年（1901年）六甲山上に開設した日本最初のゴルフ場、神戸ゴルフクラブの創設時からのメンバーで、明治37年（1904年）以降6回クラブチャンピオンとなっている。

《コラム》　日本で唯一　イナカ18巻の完全セットは、信州大学・付属図書館に

《イナカ18巻は今村幸男氏が所蔵していたが、小谷隆一氏の蔵書となり平成14年、氏の出身校、旧制松本高校。現・信州大学・付属図書館に山岳関係コレクション、約8000冊とともに寄贈された。このコレクションは登山と山に関する貴重な国内外資料としては国内で最大である》

イナカから日本人との交流を見る

神戸で外国人の登山活動が長く継続したのは、ドーントが別荘を日本人にも開放するほか徹底した援助の姿勢、専門的技術、知識の提供と彼の人間的魅力があったからであり、1914年、神戸徒歩会の会員155名中外人56名が、1924年には440名中180名が外人賛助会員となっており、日

本人の5倍の会費を払っていたことからも、その援助の姿勢を知ることができる。

ドーントと接触した日本人のうち長野武之蒸、近藤茂吉（北ア・劔沢・近藤岩の発見者）、今村幸男の3人は、KMGCの正会員であり、居留の外国人達と日本アルプスで登山を共にしている。ドーントの年度別登山歴はイナカ第15巻・大正9年（1920年）に集大成されている。

（1921年、1922年の登山記録は、イナカ第16巻と第17巻より追補）

明治37年（1904年）～大正11年（1922年）にかけてのドーントの登山記録

1904年　阿蘇山
1905年　男体山　後別山　浅間山
1908年　桜島　霧島　伊吹山　白山　信州駒ケ岳　御嶽山
1910年　槍ケ岳　焼岳　穂高岳　乗鞍岳
1911年　夷駒ケ岳　恵那山　常念岳　霞ケ岳　甲州駒ケ岳　高野山　大峰山
1912年　女峰山　日光白根山　岩木山　大真名子山　雪倉岳　白馬岳　針の木峠　大蓮華山　石槌山　立山
1913年　大山（相模）太郎山
1914年　剣山(阿波)
1915年　赤石山　笠岳
1916年　平山　有明山　燕岳　大天井岳　北岳　愛宕山
1917年　塔の峰　金剛山　葛城山　八ケ岳　神山「箱根」 観音岳　薬師岳　地蔵岳　鳳凰岳　砂仏山
1918年　烏帽子岳　黒部五郎岳　三ツ岳　黒岳　赤岳「飛騨」 薬師岳「越中」 朴ケ岳
1919年　剣山　別山　有明山　富士のオリタテ　大汝山　鬼ケ岳　竜王　浄土山
1920年　鷲岳　蓮華岳「信州」 針の木岳
1921年　小餓鬼　大餓鬼　大原岳　南大天井　鷲羽岳　黒部爺々岳　南赤牛岳　双六岳
1922年　八ケ岳　爺ケ岳　布引岳　鹿島槍　針峰　大黒岳　五竜岳　牛首岳　唐松岳　不帰岳　杓子岳　鑓ケ岳「越中」

『プレイランド六甲山史』の六甲山の登山回数参加者一欄表には、参加率77.6％のドーントが第二位と記録されている。ドーントは最初の来神1894年から1924年の離日の間に3回、英国に帰国しており、その間を除いては活発に登山をしていた。

ウエストンのほうがほぼ10年早く登山を開始していて、ドーントがウエストンの情報の恩恵に預かった事は彼自身も述べているが、登山実績としてはドーントの方が多い。

『ペデスツリアン』 **～歩行者・徒歩旅行者の意～**

関西徒歩会会報で大正2年（1913年）から昭和10年（1935年）まで刊行された。

明治43年11月19日、塚本永尭氏他4名の発起によって神戸草鞋会が創立。それがkobe

Walking Societyとなり、神戸徒歩会と改称され、更に関西徒歩会と改称された。毎月の遠足会通知は英文ニユース、図入りの印刷文として会員に配布されている。

またクロニカル紙「注」では、発行当初から神戸居留外国人との積極的交流を意図した英文欄を設けているのが、当時としては特筆ものである。

登山活動を通じての居留外国人と日本人とのかかわりに就いては、1913年から1927年迄続いた英文欄に詳しく、この執筆者はB・エブラハムで、ドーント他外人の登山活動を紹介。再度山善助茶屋平屋一棟を借り受けシーダ・カテージ「杉之茶屋」と命名。ここにドーントがKMGCの機関誌イナカを寄贈したこと、早朝の裏山（布引　再度山）の軽い登山に日本人と行動をともにしていたこと、ロック・ガデーンの岩登り指導に、KMGCの会員バワース、H・シェールが参加した等に関する記述がある。

神戸徒歩会の会員であった藤木九三は、大正13年（1924年）RCCを創設したが、その創設に背山のロック・ガーデン開拓に寄与した、KMGCの貢献は大きい。

注　クロニカル

明治23年（1890年）神戸クロニカルとして創刊。

明治32年（1899年）に兵庫ニュースを合併し1901年からジャパン・クロニカルと改称。日刊紙で主として神戸在住の外国人が購読。

注　ウイークリイ・クロニカル

毎週木曜発行で英国本国にも読者多し。ウエストン、ドーント他の寄稿がある。

ペデスツリアンに記載された居留外国人の登山　日本人との合同登山

1913年　アーサ・ヤングの「日本アルプス御嶽登山記」。
1915年　ドーント　長野等の赤石山脈探険と笠ケ岳登山。
1916年　富士山登山記念・「富士みやげ」と題する和英両文冊子。
1917年　ドーント他の鳳凰三山報告。
1918年　ドーントの烏帽子岳報告　B・エブラハムの大峰紀行。
1919年　B・エブラハムの「ウインター・スポーツ」に関しての記述。
1920年　H・シェールの指導で神戸市背祖谷跋渉行を挙行。
1921年　B・エブラハムの燕、槍報告。
1922年　休刊（財政難から）大戦影響で外国人からの寄付金減少。
1923年　徒歩主義鼓舞宣伝のためペデスツリアン再刊。
1924年　藤木九三、米澤牛歩が中心となった「烏原谷妙号岩」対山の大ザラの大試登攀
にバワース他外国人15名が参加。**《RCC創設年度》**
同年6月、RCCの第1回トレーニングが雪彦山で挙行される。
H・シェールとバワースがそれ以後も岩登りのトレーニングに参加。
H・シェールとバワースが日本人との合同遠足会に、リーダとして参加する。

1925年　六甲大縦走にリーダとしてバワースが参加。
1926年　ペデスツリアンでの英文欄削除。戦争影響？

《コラム》　1925年　旧制甲南高等学校山岳部の創部

《1923年、山岳部の前身となった“遠足部”が尋常科2年生の香月慶太の提案で発足した。1925年遠足部を“山岳部”と改称し、伊藤愿、西村格也、香月啓太、檀淳らを中心に、 部員制を採用し、岩登り、アルプス登山、積雪期登山など近代登山への道に進む。アルピニズム宣言なる一文を部報に掲げて守旧派上級生を排した》

（出典・甲南山岳部90年通史概説・越田和男編）

ペデスツリアンに記載のドーントに関する記述

大正4年。

ドーント、長野武之蒸たちの赤石山脈探険と笠ケ岳登山は、本会会員が日本アルプ方面で活躍を始めた最初の登山として詳細を記述。P誌19　20　25号。

大正4年9月。

今村幸男の神戸来住歓迎と南アルプス踏破のドーント氏を招待した、日本山岳会、神戸徒歩会、両山岳会有志主催晩餐会を開催し盛会とある。

大正6年

長野武之丞、ドーント、ゴースデン達の鳳凰三山登山報告。

地蔵佛登頂の記述では「サモライン長さ160フィート及びマニラロープ三筋各60フィート使用・・・・・・。ドーント、ゴースデン、長野他ガイド、ポータ4名なり」と記載されている。

大正7年

ドーント・烏帽子岳報告（第45号英文欄）

特記事項として六甲山の登山道整備の費用は、居留外国人が、その大半を負担とある。

おわりに

機関紙イナカ、会報ペデスツリアンを見るときドーント他、会員の誰もがウエストンから日本アルプス登山の情報を得ていたが、その登山情報を日本人の山岳会・会報に直接に伝達し、あるいは日本人と行動を共にし、山仲間の登山道整備に貢献するなど、生きた情報伝達と具体的行動での貢献を勘案するとき、彼らこそ日本アルプスの実像を伝達した第一人者とせねばならない。

文献

“日本アルプス”の発見・日本近代登山史におけるウエストン
前田　司　京都大学人文科学研究所発行
日本アルプスの発見・両洋文化の交流　庄田元男著　茗渓堂

異人たちの日本アルプス　庄田元男著　日本山書の会
神戸背山登山の思い出　棚田真輔編　交友プランニング
霧の中のささやき　棚田真輔編　交友プランニング
ペデスツリアン　関西徒歩会編25周年記念号　アテネ書房
イナカ「ＫＭＧＣ」の機関紙　Ｈ・Ｅ・ドーント著
日本山岳文学史　瓜生卓三　東京新聞出版局
日本アルプスの登山と探険　ウエストン著　岡村精一訳　梓書房
日本アルプスの登山と探険　ウエストン著　青木枝朗訳　岩波文庫
日本登山史　山崎安治著　白水社
ドキュメント「日本アルプス登山」７０年史　安川茂雄著　小学館文庫
ウエストン書簡と先駆者たち　織内信彦著　日本山岳会編
居留外国人による　神戸スポーツ草創史　棚田真輔編　道和書院

補遺

《居留外国人による　神戸スポーツ草創史を編纂された棚田真輔氏は、イナカという誌のことを知っていたが、日本でその実物を見ることができず、ロンドンの図書館でイナカの全ページを撮影し、日本に持ち帰った》

INAKA（英文）は現在神戸市文書館で全巻複写したものが保存されている。

謝辞

『イナカ』は平井一正先生のご尽力で、前田　司氏の蔵書を閲覧させていただきました。
『ペデスツリアン』は、神戸山岳会会長・古賀英年氏の蔵書閲覧。
前田　司氏、古賀英年氏には、誌上を借りて厚くお礼申しあげます。

あとがき

100年前に創刊されたイナカを手にした時は少し興奮した。印刷は鮮明でしたが紙質が悪く貴重な借り物を破損しては大変だと頁をめくる度に無事を確かめほっとした。

ペデスツリアンの英語と口語と文語が入り混じった文章は、カレーライスに味噌汁をぶっかけたような文章でこの判読にてこずり、推敲を重ねましたが力およばず、作成した文章の多くを削除するうちに、記録の列挙（時刻表）となってしいました。申し訳ありません。

この二つの誌に旧制山岳部の先輩の名前があればと期待しましたが、見つけることはできませんでした。1925年刊のペデスツリアンには、六甲大縦走に多数参加とあります。山岳部発足時の先輩はこの世になく、いまや聞くすべもないが、多数の中に甲南の誰かがいたと勝手な想像をしています。

越田和男さんが甲南山岳会通信70号に寄稿した、甲南山岳部のアーカイブ（通史概説）を読ま

せていただいた時、先輩たちの高校生離れした岩壁登攀に胸が高鳴り、同時に寂しさを心に感じた。時の流れに甲南山岳部は埋没し、活動実態がない現実に思いが至ったからです。

中学に入学したとき七年制高校廃止の学制改革で、最後となった旧制甲南高校の先輩たちが，我々子供を相手に古い昭和の応援歌を教えてくれた。ヒゲを生やした先輩たちは、とんでもない大人に見え，まさに昭和最後の旧制高校生を見たことが、今も強烈に心に刻まれている。そのせいか平成も27年過ぎたのに、いまだ昭和のままの私には、緑の中にそこだけが白く際立つロック・ガーデンを遠望したとき、輝いていた昭和アルピニズムへのレクイエムが聞こえてくる。

あれから90年。部を創られた香月慶太、伊藤愿、西村格也、檀淳、他の先輩諸氏に、敬意と感謝を捧げ、あわせて甲南山岳部90年通史概説が山岳部の遺産とならぬよう、部の復活を祈願いたします。

2015年6月

甲南山岳会ホームページのご案内

甲南山岳会のホームページ、閲覧数はもう 21 万件を超えました

ホームページの「掲示板」は会員相互の連絡に重宝で、近況はじめ山行のことや飲み会のこと、部室にたむろしていた頃のように情報が耳に入ってきます。

「アルバム」では会員の山行の様子や街での姿が見て取れます。懐かしい写真も寄せられます。

「konan alpine club」「甲南大学山岳部」で検索して下さい。

ー 翻　訳 ー

もうひとつの登山

ソビエト・アルピニズムの文化と歴史

ドイツ・オーストリア・南チロル山岳会合同年会報「ＢＥＲＧ　２０１３」掲載

ロベルト・シュタイナー記　（平井吉夫訳）

Ｋ２西壁やジャヌー北壁のような「モンスター」に登る巨大遠征。審判員付の登山競技とメダル。厳格な規則、手製の装備、定例の儀式。ロシアの登山文化は西側のそれとは非常に異なる発展を遂げた。そしてロシアの登山家のめざましい業績も西側ではほとんど周知されていない。言語のバリアのせいなのか？　それとも頭の中の鉄のカーテンがいまだに眺望をさえぎっているのか？　なぜロシアの登山は今日にいたるも別様なのか、それを明らかにするにはソビエトの登山史を散策しなければならない。

寝室の奥はヴァレラの宝庫だ。満杯の書棚がたわんでいて、夜中に打ち殺されるのではないかと心配になる――かつて山で落石に爆撃されたときのように。小さな机にメダルがぶらさがっている。四十個から五十個も。そして 70 年代と 80 年代に撮られた写真。テントの前でギターをかかえるヴァレラ、ゴムの上履きで 9 級を登るヴァレラ、チームとともに山上のヴァレラ、最難ルートを登るヴァレラ、登山競技の審判員として双眼鏡をのぞくヴァレラ。シベリアの伝説的な岩登りの名人、ヴァレラ・バレシンはソ連の卓越した登山家の一人だった。十四年にわたって彼は競技会の賞をほとんど総なめにした。いまでもクラスノヤルスクから遠からぬストルブイで岩を登っている。七級にいたるまで、ほとんどザイルなしで、猫のように。ヴァレラ・バレシンが往時を語るのを聞いていると、すぐ気がつくのは、当時のソビエト連邦では多くのことが、登山においても、西側とはちがっていることだ。そのことをわれわれはあまり知らない。鉄のカーテンはとりはらわれたが、アルピニズムにおいてはいまだに存在する。

数年前から私は旧ソ連の登山家といっしょに岩を登り、ビバークし、登頂し、たっぷり会話した。そして自分自身は体験しなかった時代が、ソビエト・アルピニズムが、私には近しいものになった。とはいえいまはヴァレラの話を聞こう。

アルプスはカフカスよりも近い

帝政時代のアルピニズム

帝政時代の登山に格別変わったところはほとんどなさそうだ。アルピニズムはインテリゲンチャと科学者の一種の贅沢であり、恵まれた収入がなければできることではなかった。したがって帝政時代のアルピニストはもっぱら上流階級の出身者で、貴族、将校、高級官吏、大学教授などにかぎられていた。たとえば 1788 年にカムチャツカの最高峰、標高 4750 メートルの火山クリュチェフスカヤ・ソープカが探検家のダニール・ガウスによって登られた。なぜ苦労してこの山に登ったのかという質問に、彼は簡潔に答えた。「好奇心に駆られて」。1829 年には標

高 5621 メートルのエルブルズの東峰が登られ、1860 年にはシャリニフが現在のイランのデマヴェンドに登っている。

とはいえロシアのアルピニストが主に志向したのはアルプスだった。ロシア領内の山に行くのは費用のかかる遠征となり、なかなか近寄れず、カフカスにはインフラがまったく欠けていた。しかもそこへ行くのはかなり危険だった。帰順しない、あるいは反乱した山岳民族との政治的紛争が、山賊と同じく旅行を困難にした。国内よりもむしろダヴォスやツェツマットに関心が向けられたのも不思議ではない。アルプスはロシアの貴族にとってカフカスよりも近かった。こうして早くも 1802 年にはロシア人のモン・ブラン登山があった。やがてソ連の政治家になる人物たちも亡命したスイスで山を知った。たとえばクルイレンコは 30 年代にパミール遠征を組織し、ポグレベツキーは 1931 年に標高 7010 メートルのハン・テングリの登頂に成功したという。亡命地のスイスで山歩きをしたレーニン自身も、十月革命を登山にたとえた論文『高所登山について』（1922 年）で登山のメタファーを使っている。最初のロシアの登山団体として 1900 年にロシア山岳会が発足した。科学、研究、調査が重要な位置を占めた。

しかしふつうのロシア人にとって山はなじみのないものだった。それはかれらの「メンタルマップ」に入っていなかった。典型的なロシアの風景と感じるのは田園と白樺林がひろがる中央ロシアの平原であり、遠く離れた、非ロシア人が住むカフカスや天山やパミールの山地ではなかった。

興隆のシンボル

1917 年以後の登山

1917 年の革命は国家と社会のラジカルな改造を告げた。アルピニズムにおいても断絶があった。それをエヴァ・マウラー（『スターリン峰への道　ソビエトのアルピニズム、　1928-1935』2010 年、Chronos Verlag 刊の著者）はこう表現している。「登山はスターリニズムにおいて、未発達の周辺スポーツ種目から、承認されるだけでなく、推奨される休暇形態、レジャー活動に昇格した」。まず注目されるのは、かつてはエリート階級のものだった保養地行きや避暑が、初めてすべての階層に可能となる。「ツーリズム（観光旅行）」の概念が 20 年代から増大する役割を演じる。そこには、現在のドイツの用法とちがって、数々のレクリエーションが含まれ、そのなかに登山もあった。外国からの訪問者が、後期のソ連においても、ときおり困惑するのは、「観光の遠足」に参加したのに、40 キロのリュックサックを担いで 200 キロメートルにわたる困難な山稜を歩かされ、氷壁登りや岩壁の懸垂下降をさせられるときだ。

「ツーリズム」の目的として重視されるのはボディコントロールと衛生だった。登山をすることはアルコール中毒、粗暴行為、不正常な性衝動の予防になる。業績志向や競技は 20 年代にはまだ強く拒否されていた。それは「資本主義的」とされ、つまるところアルピニズムは「スポーツ」ではなかったのだ。したがって西側の登山にたいする評価は否定的だった。エヴァ・マウラーは著書に、当時の政治活動家のこんな言葉を引用している。「ブルジョア・アルピニズムの本質は娯楽の追求、記録の追求であり、寄生的生活の荒涼たる退屈からの逃避の手段であることを、断固として暴露せよ」

「社会主義を世界にひろげよう！」というスローガンとともに、アルピニズムもますます政治的・愛国的な影響の下にとりこまれた。「国有文化」の一部としての登山は兵役と国防のための鍛錬とされた。登山団体のパレードに軍の影響が目立ってくる。登山は「勇気の学校」とされ、登山家はソビエト国境を「監視」しなければならない。数多くの山が政治的な名を冠せられた。スターリン峰、カール・マルクス峰、エンゲルス峰、ジューコフ峰、モロトフ峰、カリーニン峰等々。

登山家にも探索と調査によってソ連を助ける任務をあてがわれた。すなわち主稜が隣国との厄介な国境に延びている山脈の地図の作製に寄与すること。登山家は精確な日記をつけ、山行後はできるだけ詳細で科学的な報告を書かなければならない。これは現在でも実践されており、インターネットで www.mountain.ru を検索すると、ルートにかんしてきわめて詳細な記述がある。等高線断面図、精確な地図、写真にはカメラの標準規格、被写体の方位とミリ単位の指示まで付いている。

大衆登山

ツーリズムのための最大の組織ＯＰＴＥ（プロレタリア・ツーリズム・研究旅行協会）は、まもなく 50 万人の会員を擁することになったが、活動的な登山家はそのうちの数千人にすぎなかった。ＯＰＴＥはツーリストの交流を調整し、その傘下に新たに設置された登山センターもあった。この組織を離れて、つまり個人的に山に登るのは非常に難しく、まさしく厳禁された。個人的なツーリストはヴァガボンド（放浪者）と呼ばれ、非ソビエト的とされた。かれらは外国のために働く「スパイ」の嫌疑をかけられ、集団化を拒む「人民の敵」あつかいされた。そこには統制できない者、トラブルメーカーにたいする危惧がうかがわれる。独自に山に入る者は、処罰とはいかないまでも、厳しい叱責をくらった。これはソロ登山者にもあてはまる。西欧ではブールやボナッティのようにメディアの注目を浴びる単独行が、ソ連では前述の理由からほとんど存在しなかった。これはソ連の崩壊後も変わらなかった。ロシア人のソロ登山家ワレラ・ババノフがソロのキャリアを開始したのは 1990 年代末だが、そのとき彼はすでにシャモニーに住んでいた。

ソビエト市民の「メンタルマップ」にいまや意識的にソビエト社会主義共和国連邦の辺境が導入された。新聞、ラジオ、教科書にトルクメニスタンの砂漠、ロシアの北極圏、パミールや天山の高山にかんする報告があらわれる。

ソ連の比喩的表現に登山家が使われた。マウラーはそれを、「新しい社会主義国家の若々しい活力のメタファー」と述べている。それは、英雄的に登場した社会主義の幸福な道をますます偉大な成功の高みへと歩む、ソ連の興隆を象徴した。ばかげているが、この背景からすると論理的なスキャンダルが、有名な登山家で彫刻家のエフゲーニー・アバラーコフにふりかかった。彼は依頼を受けて「アルピニスト」の彫像を製作したが、銅像の登山家は「下って」いた。ソ連の有名な彫刻家ヴェラ・ムヒナが擁護したにもかかわらず、この像は公開されなかった（現在はアバラーコフの墓を飾っている。）

こうなれば登山家が直接間接に業績のプレッシャーにさらされたのも理解できる。「なにがな

んでも頂上へ」が 1930 年代のスローガンになったと、エフゲーニー・アバラーコフは述べたことがある。登頂できずに撤退したら、それをどう正当化するかという心配が、多くのチームを苦しめた、と。

山岳スポーツのプロレタリア化は、ソ連になってもアルピニズムがインテリゲンチャのスポーツであることを意に介さなかった。たいていの登山者は学生か大学出で、労働者はほんの数パーセントにすぎなかったのに。

初期のソ連でも、メスナーが言うところの「コース登山」は繁盛していた。とくにエルブルズでは大衆アルピニズムが、モン・ブランのように、頂点に達している。この山は技術的に容易で、たくさんの登山センターが近くにあり、プリユート 11 のような山小屋を使えた。ＯＰＴＥの登山セクションはできるだけ多くの参加者を頂上に登らせたがった──たとえ劣悪な装備でも。初期のソ連ではまさしくスタハノフ運動が山にも持ちこまれたのだ。あらゆる領域で業績を、なにがなんでも。

エヴァ・マウラーは当時の登山者たちの証言をいくつか記している。「病気を無視して無理やりザイルに繋がれ、ときには殴られ、頂上に引っぱり上げられる。高いパーセンテージを追いもとめて」「道じゅうが反吐でおおわれた」「参加者が頂上でなかば失神状態で這いまわるようすを、リーダーは笑いながら話している」

抑圧

1937/38 年の「大粛清」は数百万の無辜の人々を死に追いやった。アルピニストもスターリン治下の抑圧に無事ではすまなかった。人間が、登山者であるがために追及され、逮捕され、拷問され、殺された国家は、ソ連のほかにはないだろう。ほんの些細な嫌疑でも、何年も強制収容所にぶちこまれたり、銃殺されたりするに充分だった。外国人との接触であれ、外国製品の所持であれ、「容疑者」との接触であれ。獄中の拷問で名前がしぼりだされ、際限のない逮捕の波が国じゅうを席捲した。数百万の人々が何年も獄中で過ごし、あるいは死んだ。想像を絶する残酷で悲劇的な時代だった。

登山家ゲオルギー・ハルランピエフの運命はこれらの人々の運命を典型的に示している。彼は 1938 年 3 月 16 日に逮捕された。起訴状にはこうあった。ソ連国境地帯のスパイ（国境のあるカフカスとパミールで山に登ったから）、敵のための写真調査（登山者がだれでもするように山の写真を撮ったから）、敵との接触をはじめ外国の登山家との交友をいう）、スパイ機器の所持（彼はペーター・サラデインからロレンツの写真機“ジーメンス”を寄贈された）、反革命的・ファシスト的結社に所属（その指導者はセメノフスキーであるとされた）。「山」と「アルピニズム」という標語は共産主義にたいするテロ攻撃の暗号とされた。1938 年 5 月 28 日にゲオルギー・ハルランピエフはＮＫＷＤの獄吏によってモスクワから程遠からぬブトヴォで「人民の敵」として射殺された。

かなりの数の登山家が粛清の犠牲になった。ゴルブノフ、セメノフスキー、ダディモフ、ローゼンツヴァイク、カウフマン、ガネツキー、ゲルングロス、バルハシュなどが。政府の要職にあってみずから粛清を推進したクルイレンコも。ヴィタリ・アバラーコフも多年牢獄で過ご

した。

ハルランピエフの母親が 1956 年に軍事法廷の検察官に宛てた手紙はあの時代の苦悩を物語っている。「拝啓、検察官殿。私の息子がどこにいるのか、謹んでお尋ねいたします。1938 年以来、私は息子の消息をまったく聞いておりません。私は７０ 歳になり、息子がどこにいるのかわかれば、死んでもかまいません。息子は音楽大学を修了しましたが、1938 年 5 月に 10 年の刑期で収容所に送られました。何の咎で？　息子は私といっしょに下記の住所に住んでおりました。……私はあなたの慈悲を信じております。18 年間泣き続けてきた老いたる母を助けてくださると。敬具。」

1936 年にＯＰＴＥは解散された。非国家組織はスターリン体制には贅沢すぎた。ＶＳＡ（全連邦登山者セクション）がそれに取って代わった。そこではすべてのアルピニズムが中央で統制された。旅行許可、助成金、記録文書、承認、等々。ＶＳＡはアルピニズムの五カ年計画さえ打ちだした。その計画によれば、1950 年までにK2 とナンガパルバートをソビエトの登山家によって征服するという。現実はべつの様相を呈した。抑圧の犠牲者については黙殺された。

カフカスの戦争

ロシア侵攻中にドイツ軍の山岳兵がエルブルズに登り、1942 年 8 月 23 日に国旗を頂上に掲げた。この登高は有名な登山家ハンス・エルトルによって映画撮影された。ヒトラーはそれを見て癇癪を起こした。「気の狂った登山家ども。なんたるばかげた野心、ばかげた頂上に登りたがるとは」。ドイツ人のほうが山にたいする準備と装備が格段に進んでいることが、ソビエトの登山家に明らかになる。そこでドイツの登山教本が大急ぎで翻訳され、軍事教練のために使われた。「極秘」のスタンプが滑稽だった。「だれにたいして秘密にするんだ？　敵にたいして？だけどこれは敵からもらったものじゃないか！」ようやく 1943 年 2 月 17 日にソビエト軍は頂上の旗を取り替えた。

終戦後のソ連は疲れきっていた。アルピニズムも復興は遅かった。1949 年に半分の登山センターが再開した。目立つのは女性の参加が増えたことで、ところによっては 50%を占めた。

戦後は若く熱烈なアルピニストという理想像も後退し、年配の経験を積んだ登山家が称揚された。理想の人物はヴィタリ・アバラコフ。1953 年にスターリンが死ぬと、アルピニズムにおける政治的風土にも雪解けがはじまる。もう国家は普遍的存在ではなくなった。批判や議論がかなり可能になる。国家的なものの衰退と私的なものの勃興は当時の写真にも見てとれる。いまや私的な、日常的なシーンが写真のモチーフになった。服装にかんする規制も緩む。上半身裸の男や「軽装」の女の写真。しかし西側のような登山の個人化は依然として具体化せず、メスナー流のエゴトリップはソ連では考えられないことだった。西側の登山にたいしても、戦後も依然として批判的だった。報道はしだいに客観的になったにしても。たとえばアンナプルナ初登頂にかんする報道では、ラシュナルとエルゾーグが障害を負って帰還したことが強調された。エヴァ・マウラーが述べているように、西側の山岳スポーツ雑誌にも批判があった。たくさんの広告のせいでそれらは「カタログ」と揶揄された。とはいえ後期のソ連では山は政治から解放された空間になっていった。政治論議や党への忠誠は鳴りをひそめた。

登山訓練

ソビエトの登山に特徴的なものに、中央国家機関（ＶＺＳ、ＶＺＳＰＳ）による登山の統制だけでなく、等級、標章、競技をともなう訓練段階の明確な構造をもつ規格もある。

登山はふつう、すべての大都市に存在する登山セクションを通して行われた。多くの活発な会員を擁する有名セクションはウクライナ、ドン河畔のロストフ、ペテルスブルグ、モスクワ、クラスノヤルスク、サラトフなどにある。モスクワのMGUのようなエリート大学にもクライミングクラブがあった。登山者の大部分はロシア人で、カザフ人やキルギス人はほとんどいない。例外はグルジア人で、優れた登山家、クライマーを輩出している。女性は時とともに登山センター・ツーリストの少なからぬ部分を占めるようになった。しかしながら女性はインストラクターのあいだでも、初登攀においても、同等の位置に達していない。ヴァレンティナ・チェレドワやエルヴィラ・シャタエワのような第一人者がいるにもかかわらず。

登山者は国家が組織したセクション主催のコースに申し込むことができた。これは夏季キャンプで、インストラクターが登山者の訓練に当たった。セクションがかなりの費用を負担し、登山用具を提供し、旅行許可証を交付した。つまり、ごく簡単に、安いコストで、山に登ることができた。国家を通さずに山に登りたければ、全費用を負担しなければならず、非合法に国境地帯に踏みこんだりすると、厄介な問題をかかえこむおそれがあった。また、登山センターを通して山に入っても、そのあとは登山センター指導部の指示に反して自前の山行をこころみる者もいた。これはなかなかうまくいかなかった。たとえば救援隊が出動するような事態になったとき、その費用を負担させられたり、罰としてインストラクターのライセンスを剥奪されたりした。というわけで、国家組織外の山行はめったになかった。

登山センターでの最初のコースの内容は、ゲンレンデ歩き、ザイルの結び方、氷河や雪渓歩きなどだった。理論コースも習得する。そのあと 1A程度の軽度の山行がはじまる。登頂あるいはルート登りを達成するたびに、登山者の氏名、ルート、日付を記したメモを残置する。すでにメモがそこにあれば、それを持って下山する。この簡単は方法で、だれかが頂上に達したことを証明できた。山行のたびに、各登山者が持っている「クニシュカ・アルピニスタ」という名の公式のツアーブックに、インストラクターが完遂した旨を記入した。山行から登山センターあるいは山小屋へ帰還すると、チームは軍隊式に整列し、指導部から祝辞を受けた。

最初の訓練期間の目標は、一定数の山行を完了するともらえる「アルピニストＣＣＣＰ」の標章だった。登山競技会、いわゆるアルピニアーデに初めて参加した登山者は、騎士叙任式の刀礼まがいの儀式をもって祝われ、そのあとさまざまな愉快な祝祭行事が行なわれた。いくつかのセクションでは参加者は障害物コースを完走しなければならず、イラクサのアーチのなかを走らされたり、ハーネスで吊されてザイルの綱渡りをさせられたりした。仮装、ダンス、歌も祝祭に付きものだった。あるセクションではたまたま牛の糞を踏んだ「聖なる山靴」にキスさせられたこともある。この祝祭は「ポスヴェシャニエ・アルピニスティ」と呼ばれ、全登山者の忘れられない思い出になった。

総じて登山センターでのバカンスは参加者にとって懐かしくロマンチックな思い出になった。

それは自由、冒険、友情の世界だった。夜はキャンプファイヤーを囲んで唱い、踊り、物語を語った。一日じゅう山に登り、みんなで調理、薪割り、洗濯などの日常仕事を片づけた。お互いが家族、友人と感じ、何十年も続く友情が育まれた。登山センターの時期は写真アルバムの中に大切に保存された。多くの男女の登山者がのちの配偶者と登山センターで知り合った。そこでは町よりも未来の夫や妻を見つけやすかった。同じ趣味と同じ社会階層――たいていは大学卒業者――が男女を結びつけた。

登山センターを通して山の歌の文化も発達した。ソ連では歌と詩は西側よりもはるかに価値が高かった。全ソ連で有名な俳優でシンガーソングライターのウラディミール・ヴィソツキーは本来の意味での登山家ではなかったが、登山にかんするたくさんの歌を書いている。たとえば「わたしの女ロッククライマー」とか「ここはおまえたちのための平地じゃない」とか。40年後の今日でも彼の歌は登山者のスタンダードレパートリーに入っている。同じく詩も大きな役割を演じ、登山者が自分のウエブサイトで詩を公開するのは、今日でも珍しいことではない。たとえば2012年のロシアのＫ２冬季遠征が詩に詠われたように。

「アルピニストＣＣＣＰ」よりも昇格したければ、より困難なルートの登攀を重ねて、第３、第２、そして第１ランクに達することができた。その上は「スポーツマスター候補」で、さらに全国規模の登山競技会を制覇したり、しかるべき数の困難ルートを登って「ポイント」を集めたりすると、「スポーツマスター」になれる。このランクになると声望のみならず、多くの可能性が開かれた。

「スポーツマスター」より上は「国際級スポーツマスター」、「ＣＣＣＰトレーナー」、「功労ＣＣＣＰトレーナー」だった。このヒエラルヒーはそっくりそのまま今日まで維持されている。

きちんと区分けされた訓練の大きな長所は、教育が行きとどき、やみくもに困難なルートにとりつくのは許されず、経験を積んだ登山家の指導のもとに実力を付けなければならないことだった。そのため事故は比較的少なかった。

登山センター外でのトレーニングの可能性はきわめて乏しく、ドイツとはまったく比較にならない。というのは、たいていの大都市はいちばん近い山でも何千キロも遠くにあるからだ。たとえばモスクワでは古城の廃墟を攀じ登った。ウラル、クリミア、クラスノヤルスクにはクライミングガーデンがあった。創意豊かなクライマーたちは木材でトレーニングバーを建て、片手懸垂の練習をした。水漏れする給水塔が冬にはアイスクライミングの練習に使われた。

後期のソ連ほど多くの優れた高所登山家が輩出した国はほかにないだろう。エヴェレストでの遭難のあと西側でも知られるようになったアナトリー・ブクレーエフは大勢のなかの一人にすぎない。当時トレーナーだったエルヴァンド・イリンスキーは、何十人もの志願者から誰をヒマラヤ遠征隊員に選べばよいのかわからなかった、と述べたことがある。実力は伯仲していた。ソビエトの登山家は自分の高い能力を、ヒマラヤ登山ができるという少ない可能性のためにデモンストレーションした。軍隊式に組織され、綿密に計画され、国費で行なわれた遠征は、1982年のエヴェレスト南西壁など、国際ランクのルートを志向した。1989年のカンチュ遠征では51の頂上を踏んでいる。では、なぜソ連にはかくも多くの優秀な高所登山家がいたのか？

人生を登山に捧げたい者は、夏にインストラクターとして登山センターで働いた。それは 3 ヵ月にわたり、独自の登山のための時間は充分にあった。30 年前から存在する法律によって、そのための休暇を認められ、通常業務を免除された──なんの異議もなく。公式の遠征や競技会のためにも雇主は休暇を認めなければならなかった。こうして登山家たちは無料で（むしろなにがしかの稼ぎもあった）年に 3 ヵ月から 6 ヵ月を山で過ごすことができた。この期間以外にもコンディションのトレーニングがあった。遠征隊員の選考は非常に厳しかった。参加者は気密室に入れられ、短時間に 8000 から 10000 メートルの気圧にさらされる。失神した者は除外された。大遠征の費用は国家が負担した。ソ連領内には 7000 メートル峰が五座あり、ポベーダ峰のように部分的に非常に難しい山もあるので、トレーニングにはたいへん好都合だった。アルピニストのモットー、「登山が仕事の邪魔になるなら、仕事をやめろ」

しかしサッカー選手、極地飛行家、カーレーサー、成層圏気球パイロット、とりわけ宇宙飛行士の知名度に比べれば、ソ連の登山家のそれはゼロに等しかった。高所の征服にはソ連の成功の中心的要素が欠けていたから。ロケットや宇宙カプセル、飛行機や極地航海船などがソビエト技術の精華とされた。

冒険的な装備

宇宙飛行と軍需産業におけるソ連の成功は、消費物資が欠乏する現実の経済と裏腹になっていた。商品の品質が悪くて量も乏しい店の前の長い行列は日常的な風景だった。初期のソ連のみならず、後期でも。このパラドックスは「教会鼠のように貧しくて、われらは宇宙に飛びだした」という、当時はやったジョークに反映されている。登山用品の生産も貧弱で、とりわけ品質が悪かった。これは国営生産・販売システムのせいだった。登山用品は買いにくいか、そもそも売っていなかった。西側の意味での山岳スポーツ業界は存在しなかった。

登山者はこの苦しい状況を創意工夫と発明の才で補った。これは年配のロシアの登山家のあいだでは今日でも見られることだ。たとえば私の知人ミハイル・テリョーヒンがポベーダ峰を登ったときに着ていた機能的な羽毛服は、みずから縫ったものだった。そのため彼は羽布団（これは市販されていた）を買ってきて、縫い目をほどき、密閉した浴室で浴槽に羽毛をぶちまけ、選別し、改造した電気掃除機で吸い上げ、アノラックと寝袋用の手縫いのカバーに噴射した。この衣服は重く、濡れると厄介だが、防寒の役には立った。その下に毛糸のセーターを着る。フリースはなかった。それは特殊な例かという質問に、テリョーヒンはこう答えた。「1980 年代にはみんなそうしていたよ。工場生産の登山用品を手に入れられるのは、お偉方のインストラクターだけだった」。初心者のためのハーネスは古い自動車のシートベルトを利用して、ふといより糸で縫いつけてつくった。シュリンゲ用のザイルはパラシュートをつくる工場で手に入れた。登攀用のザイルは存在したけれども、金もコネもない初心者は釣り具店で漁労用の綱を買ってきた。これらの代用ザイルは衝撃荷重を緩和する機能がないので、工夫を重ねた手製のショックアブソーバで補完した。リュックサックも手製が多かったのは、市販のものは重いだけでなく、高所登山には小さすぎるからだ。山靴は革製がふつうだった。広く普及したのは鋲

を打った「トリコニー」で、これは西側では20世紀の初めに使われたものだ。「ワレンキ」と呼ばれるロシアのフェルトのブーツも使われた。底が柔らかくてアイゼンを付けにくいにもかかわらず。私自身、ハン・テングリに登ったとき、6750メートル地点でフェルトのブーツが氷から突きだしているのを目にした。幸い死んだ登山者の足はその中になかったが。

初心者の多くは鉱山労働者や建設作業員のヘルメット、オートバイ用ヘルメットをかぶった。経験を積んだ登山者はチェコ製のクライミング用ヘルメットを欲しがった。軽いチタンの留め金も需要があった。多くの登山者がアエロフロートの座席からこっそり切り取ったという。金属工場ではアルピニストが夜に、ときには昼間でも、使い馴れた機械でこっそり山の装備をこしらえたり、この「内職」を金属労働者に委托したりした。ヘリコプターや飛行機の工場で働く友人がいる登山家は幸運だった。そこにはチタンやアルミニウムの「屑」がいっぱい落ちていて、それで登山用具を加工することができた。こうして国営企業の費用で、国営企業の資材から、カラビナ、ユマール、アイゼン、アイススクリュー、スカイフック、ハーケン、ハンマー、フレンズ、ポータレッジなどが仕上がった。金属を正規に購入するのはむずかしいので、しばしば秘かに調達され、多くの金属コンビナートが意に反してソビエト・アルピニズムの「スポンサー」になった。きわめて効果的な素材も多いので、一部は現在でも山で使われている。エル・キャップのＡ５ルートでも、Ｋ２西壁でも、アルプスでも。たとえばグランド・ジョラス北壁の「ディレクト・ドゥ・ラミティエ」で私はソビエトのクサビを目にした。どうやらStandplatzbau（ハーケンとカラビナとシュリンゲで構築する足場。インターネットで検索すると画像も出てきます。訳者）のために使われたらしい。金属のリベットとプレスがなく、針金をねじっただけなのには驚いたが、ちゃんと役目を果たしていた。とくに真価を発揮しているのは大きな、4 人用のポータレッジで、ねじで留め合わせて壁の一画に吊り上げる。モダーンな登攀用具が出現するずっと以前に、ロシア人はこれらの「装備」で垂直の氷壁を乗り越えていた。

安価なチタンのアイススクリューは「ヒット輸出品」になった。ニコライ・サハロフがドイツのエルプザントシュタインに登りにいったとき、一袋のそういうアイススクリューをザクセン地方のクライマーたちに売って、外国旅行の費用をまかなった。90年代の末になってもシャモニーではメゾン・ドゥ・ラ・モンターニュの前でロシアのチタン・アイススクリューを売る「行商人」が見られた。70年代と80年代に国際登山者センターが設けられたときは、そこで西側の登山家との活発は交易が行なわれた。20本のアイススクリューで１足の中古のコフラックの山靴、数個のチタン・カラビナでアイゼン一対、等々。

そもそも登山センターが登山用品のためのブラックマーケットの集積場になっていた。なにか売れるものがあれば、そこに持っていった。なにかを買えたら、それを持ち帰り、あるいは転売した。ある知人は一度に200足の靴を買ったことがあるという。彼はそれを家で友人知人に売りさばいた。

ソビエトの装備品の特殊性は現在でも見られる。たとえば「クルゴノギ」と呼ばれる一種のアブミはヨセミテでも愛用されている。これを使うと従来のアブミよりも届く範囲がぐんとひ

ろがる。いっぽうほとんど使われなくなったのは、省エネにはなるが危険な高所登山用の圧力鍋だ。

（コラム）

ガロッシュ――ＣＣＣＰのクライミングシューズ

上履きで競技に勝ったり、ビッグウォールを登ったりできるだろうか？　ソ連で暮らし、クライマーになった者は、ゴムの上履き（ガロッシュ）を避けて通ることはできなかった。19 世紀の初めにイギリスで発明されたこの靴は、まもなく帝政時代のロシアでも生産され、たちまちロシアの日常用品になった。庭や道路を歩くときの防水靴として。たとえば 1912 年には 2000 万足もつくられている。

20 世紀初めのいつごろからか、ガロッシュがシベリアの岩場「ストルブイ」に初めて出現した。ゴムの摩擦は岩登りに好適で、靴は安価だった。本来の目的とはまったく関係なく、この靴はたちまちクライマーのあいだに普及し、まもなくだれもがこれを履いて岩を登るようになった。とくに好まれたのは平板で幅の狭い「アジア型」で、2 ポイントほどサイズの小さいガロッシュを買って、サンドペーパーで調整した。履いた靴のまわりに紐を巻きつけて固定する。ガロッシュで競技会に出場するのはもとより、ウシバ、ベルーハなどソ連の高山の困難なルートもこれで登った。ストルブイでは、初めて岩塔を登る者に、ガロッシュで尻を 3 回たたく「刀礼」をほどこす儀式が習慣になったほどだ。

この靴の最大の難点は耐久性に欠けることだった。ある報告によれば、クリミアの粗い石灰岩の集中的なクライミングでは 1 足が 1 日しか保たなかったという。そのためクライマーは箱いっぱいガロッシュを貯めこんだ。第 2 の難点は底が軟らかくてカンテに立つのが難しいことだ。いっぽう、なにものにも勝っているのは値段、感触、摩擦だった。何年にもわたって全国の競技会を制覇したヴァレリ・ベレシンは語る。「西側のクライマーたちと会ったとき、私は、たぶんパトリック・エドリンガーからだったと思うが、クライミングシューズを贈ってもらった。しかしこれは硬くて、ごつごつしていて、どうしてもなじめなかった。ガロッシュのほうが登りやすかった」。アレクセイ・チェルトフもこう言った。「1986 年にステファン・グロヴァッツがわれわれに新しいクライミングシューズを見せてくれた。それまではガロッシュのほうが優勢だった」

外国に行くとガロッシュはいつも注目の的になった。笑いと驚きが交錯した。笑いは登山装備の水準のことで、驚きはすばやい登攀の技術のことで。冷戦時代にはこの靴がアメリカの新聞で「ソビエトの秘密兵器」と書かれたこともある。ガロッシュは記憶の中だけでなく、クラスノヤルスクの岩場「ストルブイ」でも見ることができる。ここでは現在でもガロッシュが使われている。

良き思い出

ヴァレラが 3、4 分で登りきった 20 メートルの壁を、私は苦心惨憺して 1 時間かかった。頂上に坐ってわれわれはシベリアのストルブイの岩場を見渡した。ソビエト連邦はいまやなく、ロシアがあるばかりだ。古い登山家はよく回想にふける。ソビエト連邦全般にかんする記憶は好悪が分裂しているにせよ、後期ソ連のアルピニズムにかんする記憶は明確だ。良き思い出。セクションでの一体感、しばしば数十年にわたる友情、いっしょに登った頂上や克服した危険等々。それは写真や情感こめて書き綴った日記にのみ生き続けているのではない。登山家はよく機能する、費用のかからないシステムに恵まれて、いつでも山に行くことができた。ロシアの登山家の傑出した成功――Ｋ２西壁であれ、ジャヌー北壁であれ――は、まさしくソビエト・アルピニズムの遺産であり、多様なロシア登山文化は今日まで存続している。アルピニズムは、ヴァレラが好んで口にする成句によれば、たんなるスポーツではなく、人生観なのだ。

ソビエト・アルピニズム――重要事項の概観

1931　何度かの試登の末、ウクライナ人のミハイル・ポグレベツキーが、ボリス・チューリン、南チロル人でソビエトに亡命したフランツ・ザウベラーと共に、標高 7010 メートルのハン・テングリを初登頂。

1933　若き超人的登山家エフゲーニー･アバラーコフが単独で標高 7495 メートルのスターリン峰（スターリンの死後、コムニズム峰と改名）を登頂。隊員一人が死亡し、他に負傷者が出る。科学調査のため重さ 20 キログラムの気象観測器を 7000 メートルまで担ぎ上げる。

1934　ヴィタリ・アバラーコフ率いるソビエトの登山隊による初めてのレーニン峰登頂。

1935　レニングラードの登山家デローネが今日まで使われている登山ルートの等級を導入する。それは１Ａから５Ｂまでで、ルートの困難度の綜合判定とされる。のちに６Ａまで拡張。

1935　この年から定期的なアルピニアーデ（登山競技会）。

1938　レオニード・グートマン率いる遠征隊がポベーダ峰（7439 メートル）を登ったという。この登山は今日まで疑問視されている。たぶん登ったのはずっと低い東峰ではなかろうか。この頂上に隊は「20 年コムソモルツェン峰」と命名した。

1952　イギリスのメディアから失敗したエヴェレスト遠征の報道が流布される。6 人の登頂チームが 8200 メートル地点で跡形もなく消えたという。この噂は何十年も続いたが、なんの証言も文書記録もなく、失踪者の名前もわからない。おそらく意図的に流された新聞のガセネタだろう。

1955　クリミアで初のロッククライミング競技会。同年、ポベーダ峰で大遭難。11 人のカザフ人チームのうち 10 人が死亡、生存者はたった一人。

1956　ヴィタリ・アバラーコフ率いる登山隊がポベーダ峰を初登頂。

1960　この年からベースキャンプ設営にヘリコプターを導入。1970 年にはパイロットがポベーダ峰で遠征隊のための物資を 7000 メートル地点に投下。

1962　ソビエト・イギリス合同遠征隊がハントとオフチニコフの指揮でコムニズム峰に登る。

1967　ソ連の登山連盟がＵＩＡＡの一部になる。ソ連領内の５座の 7000 メートル峰を全部登った者に「雪豹」の称号を授与。

1974　国際登山センターをレーニン峰の麓に開設。同年、有名な女性登山家エルヴィラ・シャタエヴァ率いる女性チームがホーエンシュトゥルムで遭難。8 人の女性登山者が死亡。

1974　この年から 1988 年までにハン・テングリのきわめて困難なルートが開かれる（ストゥデニン、ミスロフスキー、サハロフ）。ハン・テングリ南壁も開かれる。この初登攀は一週間近くかかり、壁の高さは 3000 メートル、登攀困難度はアイガー北壁に匹敵する。

1982　最初のソビエトのエヴェレスト遠征。11 人の登山家が 5 月 4 日と 5 日に南西壁の新ルートで頂上に達する。これは最難ルートのひとつ。

1982　エヴェレスト遠征隊の選考手続きに失敗したスミルノフが、チームとのフラストレーションから（意味不明－訳者）、ポベーダ峰の非常に危険で再登されていない「ダラールート」を登る。

1986　この年から 1988 年までに登山選手権大会の枠内で、ほとんど同時に、カラヴシン地域とアクース地域（ソ連領キルギス）で非常に困難なビッグウォールが開かれる。とりわけアサンとオデッサ峰（4810 メートル）で。スカイフックとポータレッジを使った技術クライミングが頂点に達する。

1989　史上最強の高所登山家チームによるソビエトのカンチェンジュンガ遠征。主峰を超えて 51 のピークを縦走。

1990　ソ連領カザフスタンの登山家ヴァレリー・クリスチャティがチームを率いてポベーダ峰からハン・テングリまでの縦走を完遂。このルートは今日まで最も困難な高所縦走だろう。73．6 キロメートル、平均高度 6400 メートルを、15 日間で。

筆者　ロベルト・シュタイナー
1976 年生まれ。登山家、著述家、教師。オーバーシュヴァーベンに居住し、好んでロシア人と山行。旧ソ連の山の困難ルートをトレースあるいは初登攀。著書『幸いあれ、夢に死ぬ者に』『ストーンマン』『一人でロシア人のなかに』（いずれも Panico Alpinverlag 刊）

訳者のあとがき　「田口さんからの宿題」

平井吉夫　(新高昭32)

最晩年の田口二郎さんから私は、登山史に関して五項目の遺言めいた宿題をもらったのですが、そのなかに「ロレンツ・サラディンの生涯」というのがありました。また、『東西登山史考』で書ききれなかったロシアにおける登山の発展について考えたいので、田村俊介さん(ロシアの山の専門家)といっしょに「一度うちに来てくれ」と言われ、二人で鎌倉の田口邸を訪ねたこともあります。このときも田口さんの口からサラディンの名前がしきりに出ました。

サラディンについて日本語で読める情報は、田村俊介さんが訳したエフゲーニー・アバラーコフの『知られざる山々　天山・パミール登攀記』と、『岳人事典』に諏訪多栄蔵さんが書いた短い記事しか私は知りません。その諏訪多さんの記事に、A・シュヴァルツェンバッハという女性がサラディンの伝記を書いたとあるので、ぜひとも読みたいと思っていたのですが、なにしろ1938年の刊行なので入手は困難でした。

それが21世紀になって復刊されたと聞き、さっそく取り寄せました。アンネマリー・シュヴァルツェンバッハ著『ロレンツ・サラディン　山の生涯』(2007年刊、2013年にポケットブック)。初版はサラディンの死の2年後に上梓されたので、後に明らかになったサラディンの事跡やソ連の登山界の実態などに、今の目で見れば多くの欠落があるのはやむをえません(著者は1942年に死去)。それを補うため復刻版ではドイツの登山家ロベルト・シュタイナーが本全体のほぼ3分の1におよぶ、非常に読み応えのある解説を書いています。それはすでに訳してありますが、ページ数の制約もあって誌面には掲載できないので、記念誌の付録のDVDに訳文を収録させていただきます。

ここに拙訳を載せていただいた「ソビエト・アルピニズムの文化と歴史」は、上記のシュタイナーがドイツ・オーストリア・南チロル山岳界の合同年会報「BERG　2013」に寄稿したものです。これと上記のサラディン伝の解説を併読すれば、鉄のカーテンゆえの情報不足であまり知られていなかったソ連・ロシアの登山史に明かりが灯るでしょう。

2013年1月4日、BSプレミアム「グレートサミッツ」という番組で、カザフスタン天山山脈の名峰ハンテングリ(7010m)登頂のドキュメンタリーを観ました。150キロ離れた登山基地(標高4200m)までヘリを利用して1時間弱で到着。現地で出迎えたガイド3人が日本人を頂上に案内しています。その昔サラディンたちが苦労したキャラバンの長い道はありません。時代の流れを感じます。

1936年、同じ山でサラディンは寒風を衝いて壮絶な下山を行い、凍傷の身をひきずり、長い氷河の道をぼろぼろになって歩き、最後は馬上で力尽き、敗血症で死んでいます。息を引きとるときのようすは、上記のアバラーコフ著『知られざる山々』の中の「ハンテングリ攻略」の章で詳細に述べられていますが、訳者の田村俊介さんによれば、涙なしには訳せなかったそうです。同じく山で死ぬにしても、華々しく喧伝されたマロリーやブールに比べ、忘れられた登山家ロレンツ・サラディンの最期は知る人もなく哀れです。

この二つの文献を甲南山岳会の皆様にご紹介することで宿題の一端を果たしたと、泉下の田口二郎さんが言ってくれると嬉しいのですが。

― 会員短信 ―

平成 26 年秋

平井一正（名誉会員）
皆様に宜しくお伝え下さい。

武田六郎（旧 13 理）
高齢のため、外出不可能でございます。皆様に宜しく(代)

赤松二郎（旧 14 理）
私も 95 才となり、身体中がたがたで世の中に出て行くことができませぬ。長い間、何かとお付き合いくださいましたこと、厚く御礼申し上げます。多くの写真だけが残りました。さようなら。

小川守正（旧 17 理）
特別になし。高齢のため(93 歳)欠席。

伊藤長次郎（旧 21 理）
ご案内有難く存じます。元気に過ごしておりますが、一人で外へは無理です。

丸山照夫（旧 25 文）
腰痛歩行困難。残念ながら出席できません。

北方龍一（新高 30）
相変わらず県の太陽光コンサルタントとして県下に出張しています。山にも又ゴルフにもご無沙汰で広野 GC も退会し、六甲山の神戸 GC のみ年会費を払っていますがプレーは全くしておりません。皆様に宜しくお伝え下さい。

平井吉夫（新高 32）
皆様にお会いできるのを、楽しみにしています。

竹原佑爾（新高 33）
元気にしております。

白川浩平（新高 H2）
今年の5月連休には小五の息子と四国の石鎚山へ登ってきました。山頂神社から真の山頂である天狗岳へは石鎚北壁の上の岩稜を 15 分程登りますが、少々怖い思いをしました。下りは超混雑している鎖場を横目に急な雪渓をキックステップでやり過ごし、親父の面目を保つことができました。昔、仕込んで頂いた雪練の賜物でありました。

小原耕治（大 31 経）
夫婦共に体調不良の為、この度の集会には参加できません。残念です。楽しい集会でありますように！　（平成 27 年 4 月逝去されました　編集）

砂川彰雄（大 32 経）
昨秋で高遠を撤収しましたので今年は暑い夏を千葉で過ごしました。今秋で 80 才を迎えますが気持ちはそんなオジンではありません。皆様に会えるのを楽しみに！

鈴木頼正（大 33 経）
毎年楽しみにしています。関東在住の方達と逢える唯一の会合です。しかし、年を重ねると、もう何年出席できるか、少々心配しています。

田辺　潤（大 34 経）
高遠へは折にふれて行っております。元気にはしておりますが、だんだん、物忘れがひどくなって来ました。高遠でとなりに砂川さんが居ないのが淋しいです。私は高遠へ移り住みたいのですが、家内がいやがりますので実現しません。

鳥居威男（大 35 経）
車で行くことが億劫になりました。体は病気もせず、相変わらず、毎早朝約1時間六甲山のふもとに向け散歩。体調はすこぶる順調です。藤安君と田中君とは偶に喫茶店で雑談しているこの頃です。

伊藤久三郎（大 36 経）
統合失調症で毎日、岸和田の病院通いしており

ます。皆様に宜しくお伝え下さい。

牧野　宏（大 36 経）

短水路ながら 1000 から 1500m泳いでいます。屋外では時々には、月の鏡を崩し心地よい遊泳。これは 11 月までですが。水も滴る〇〇男とかを目指しています。

田中　孜（大 36 経）

残念ですが、今年も他の行事と日にちが重複してしまいましたので、欠席いたします。皆様に宜しくお伝え下さい。

広瀬健三（大 36 経）

60 年前に渡伯した小学校の同期生がフルに面倒をみてくれると申して呉れたのと、甲南同期のUCC珈琲の上島会長が“それは行くべきや”との事だったので、去る 8 月 11 日から 8 月 29 日迄ブラジルへ行ってきました。友は現地人と結婚しているので彼の地の人々との交遊が特に楽しかったです。

越田和男（大 36 理）

持病あれど、何とか元気。夏の終わりに南アフリカに行く予定。横着してツアー参加です。

藤安賢一（大 36 経）

持病のパーキンソンにて、遠方へはとても行けるものではありません。よって、欠席いたします。皆様のご多幸とご健康をお祈り申し上げます。肉体が弱らない様、保久良神社まで毎日、日課で登っています。

飯田　進（大 38 経）

何～んもすることありません。元気にはしております。

二谷和成（大 38 経）

元気にしていますが、年々体力低下を実感しています。年寄り仲間と月に1～2回は近郊の低山を歩いています。ご盛会をお祈りします。

森本全彦（大 39 法）

集会のお誘い有難うございます。元気にやっております。2月には卒業後初めて乗鞍・位ヶ原山荘に。山へも行っています。大関さんが亡くなられて寂しくなりました。楽しい会でありますように！

武田雄三（大 39 経）

会員諸兄とお会い出来るのを、楽しみにしております。

福田信三（大 39 理）

いつもご案内ありがとうございます。いつも欠席ですみません。教会の墓地のお世話をしています。お墓にかかわる方々の行動や思いは悲喜交々で興味深いです。最近は墓石建立より共同墓地への希望が多いです。

鵜木　洋（大 40 文）

4月に転倒してから入院生活です。やせてしまって弱っていますが頑張って生きています。（娘より）

伊丹徳行（大 40 法）

4月に北海道稚内から鹿児島まで、昼の高速バスで旅行しました。北海道はまだまだ雪と氷の世界。ダウンジャケットが必要です。東北に入って桜が見られ、東京ではダウンは必要なく、鹿児島ではセーターの世界。日本は縦に長い国ということを実感しました。ボケ防止のため、来年はどこへ行こうか考えています。

井本　洋（大 40 理）

皆様に会えることを楽しみにしています。家庭内では粗大ゴミになってきました。体だけは健康です。ボケて来た？

井上　徹（大 41 営）

昨年の経験を基に、今年は大豊作でした！年 2 回は出かける海外へのクルーズで知りあった知人を招き盛大に「スイカパーティー」を行いました。今年、収穫したスイカ（西瓜）は大中小とりまぜ 32 個でした。来年は市場に卸そうか（？）と・・・

柏　敏明（大 41 経）

大関先輩が亡くなられて、寂しい限りです。関学の小西さんのヨットで 8 月 12 日から瀬戸内海、関門海峡、日本海沿岸を経て隠岐の島で数日過ごして、9 月 3 日に帰ってきました。隠岐の島は素晴らしい所で、西ノ島、焼火山（たくひ 452m）にも登ってきました。9月下旬から11月上旬まで次女のいるシンガポールへ行きますので、残念ながら秋の集会は参加できません。ご盛会をお祈りします。

浪川純吉（大 42 営）

野暮用で参加できません。

森岡宏光（大 43 理）

“10 年ぶりの S43 卒同期会を行う”8 月 5 日（火）～6 日（水）にかけてエクシブ琵琶湖ホテルで4名（國分、頼富、佐々木、森岡）にて卒47年、みんな健康で人生という高い山を登頂し、自信に満ちた顔で再会、次回2月も行う事を約束し、解散致しました。

赤田正和（大 44 理）

もっぱら社有林歩きですが 5 月にヒザの手術をして、ほぼ完治しましたが、杖が手放せません。羽田まで6月から10回程往復してますが杖の御蔭？で車椅子で出口まで行けます。（半月板損傷）井上整形外科（大阪市城東区）日帰り手術でお勧めです！

石原浩二（大 44 理）

昨年は、立山経由で、木曽福島に行く予定だったのですが、急な召集で、急遽、立山から引き返すことになり、ご迷惑をおかけしました。今は予定がわからないので、欠席とします。集会が近づき、出席出来るようであれば、連絡の上、出席させて頂きます。宜しくお願いいたします。

矢吹　操（大 45 理）

元気でいます。いつもご案内ありがとうございます。休みを取得することが難しいです。今年もフルの完走を目指しています。

南里章二（大 45 理）

毎回お世話になります。10 月 11、12 両日は文化センターの講座日と重なり、残念ながら参加できません。皆様に宜しくお伝え下さい。昨日、インドネシアのスマトラ、スラベシの一カ月の旅より帰国いたしました。マレーシアなどに比べるとインフラ、都市衛生などの点で遅れていますが人々がゆったりと暮らし、にこやかな笑顔が心に残りました。

井上知三（大 48 文）

元気にやっています。諸先輩から比べるとまだ若い方だと思いますが、体力・気力・やる気がだんだん無くなってきているように感じます。山岳会の作業にも以前に比べるとエンジンがナカナカかからず、つい期限まで・・・・・。来年は 90 周年とか？ することが増えるのかなあ？ 何かと気を使う年になりそうです。

平井幹男（大 50 文）

暑かった夏も少しづつ過ぎていく感があります。今年はどこにも登れず、秋にはと、毎日 2 時間ウォーキングをして体力の増強に努めている今日この頃です。秋の集会や冬のスキーで皆様とお会い出来る事を楽しみにしております。

中澤章治（大 50 文）

ご案内ありがとうございます。例年、この時期、例祭がありまして出席できません。ご盛会をお祈りします。

村田信一（大 50 法）

いつもありがとうございます。試験勉強中につき、欠席させていただきます。定年退職後も、会社から登山のお誘いを頂いたりしています。昨年はドロミテに行きましたが、今年は沈殿。ヨーロッパアルプスは、来年にでもと考えているところです。ご盛況をお祈りしています。

高橋けい子（大 50 文）

いつもお世話になっています。御獄山にはびっくりしました。皆様大丈夫でしたか？

大柳（吉松）香代子（大 51 法）
山はもっぱら facebook で楽しむばかりです。

松下哲夫（大 52 理）
思わぬ体の不調がありましたが体調を維持し、山歩きを楽しみたいと思います。

大森雅宏　（大 53 文）
相変わらず薬品業界の団体に勤務しております。神戸の事務所の時は窓越しに堡塁岩が見えました。今は大阪の勤務に。朝の通勤時にくっきり摩耶山が見えて、堡塁とバットレスが見えたら、「なんかいいことありそう」と根拠なく思ってしまいます。ご盛会をお祈りします

要　裕晶（大 55 営）
毎回お誘いいただきありがとうございます。今年も先約のため、欠席させていただきます。皆様のご健康と盛会を祈念しております。

住友健時（大 55 法）
何時もお世話になります。健時は当分戻る予定がありませんので残念ですが参加できません。元気に何とかやっておりますのでご休心ください。皆様に宜しくお伝え下さい。　　住友和子

今井啓介（大 56 経）
毎回お誘い有難うございます。在京2年目になりますが勤め先の本社が関西ですので、大学の後輩2名を部下として預かっています。若い後輩の話を聞きますと大学の様子も変わったようで一度訪ねたいものです。

（平成 27 年 7 月逝去されました　編集）

川野幸彦（大 56 理）
ご無沙汰しております。元気に過ごしております。先日、大森さんと同期の山本と沢登りに行きました。小滝が幾つかあり、楽しいひと時でした。ただ、今年で 56 才。結構しんどい年齢になりました。ハードな山行きは辛いです。盛会をお祈りしております。皆様に宜しくお伝え下さい。

山本恵昭（大 56 理）
この夏はあまり山に入れませんでした。秋に元気が良ければどこか紅葉が美しい所へ行きたいと思っています。

松山弘和（大 61 理）
1 月頃のスキー、お誘い願います。先日、9 月 21 日、22 日、23 日で白馬雪渓から唐松、八方に行きました。元気は最高で、後日、HPに投稿します。

西名俊英　（大 61 理）
いつも案内ありがとうございます。娘たちを毎年キャンプに連れて行っています。1 月に金時山へ、雪道もあり、ちょっとした登山になりました。今年は自然災害も多く御嶽山の噴火のニュースではTVの前に釘付けになりました。

松成　健（大 H8 文）
急激な体重増で腰痛に悩んでいます。87kgの体で山行きはしばらくご無沙汰です。仕事のほうは相変わらず、福島県で働いています。先日、いわきから北（富岡町～南相馬市）の道路が開通したので通行してみましたが警察や工事関係、原発関係の車両が多く、何とも言えない緊張感があり、貴重な体験をしました。

橋田豊彦（大 H12 経）
引越し致しました。
〒601-1254　京都市左京区八瀬野瀬町 267
八瀬鱒乃坊アーバンコンフォート 313
TEL075-724-4456

森本寛之（大 H19 理工）
タイ駐在の為、出席できません。ご盛会をお祈りします。

平成 27 年春

平井一正　（名誉会員）
元気にしております。当日は先約があり失礼します。諸兄姉にどうかよろしくお伝えください。

鈴木敬吾　（特別会員）
当日所用があり欠席させていただきます。

福井　實　（旧 17 理）
総会には是非とも出席したいと思っています。大関君の慰霊は残念乍ら体がもちませんので！！

小林　誠　（旧 17 理）
本人満93才比較的元気ですが歩行困難です。どうぞこれからはご放念下さいませ。

伊藤五介　（旧 24 文）
一応元気です。

丸山照夫　（旧 25 文）
高齢の為、足腰が弱り外出が難しくなっております。

平井吉夫　（新高 32）
二度目のガン手術でいささか弱っています。残念ながら欠席。記念会報の原稿も書けるかどうか。今の私の知力・体力ではどうなるか分かりません。でも何とか頑張ってごいっしょに登山をしたい。

竹原佑爾　（新高 33）
住所変更しました。
〒662-0063 西宮市 相生町 10-10

福田裕久　（新高 45）
年と共の体力低下が著しくなってきていることを実感しています。

白川浩平　（新高 H2）
高知の足摺岬の田舎生活も 8 年が続きました。5 月より税理士事務所を高知市内に移転し心機一転商売に勤しむつもりです。高知市内には、ボルダリングジムあるようなので久々に挑戦して、出た腹を引込めようと思います。

小原耕治　（大 31 経）
大関君の死去の報、彼の酒席での熱弁がもう聞けないと思うと一寸淋しいです。合掌
（平成 27 年 4 月逝去されました　編集）

砂川彰雄　（大 32 経）
まずまず元気に過ごしております。総会・慰霊祭共欠席で申し訳ありません。

木全　實　（大 32 経）
療養中です。

麻畠重彦　（大 33 経）
何時もご案内を頂き感謝いたします。間もなく卒寿 少しは時間も出来るかな？新しい人生の出発！ご教導を賜りますように頑張ろう！

鈴木頼正　（大 33 経）
90 周年記念事業開催に大変お世話になります。甲南山岳会の歴史を再度学校にも内外に PR できる絶好のチャンスだと思います。よろしくお願い致します。小生体力は落ちてきましたがゴルフプレー一日2回を目標に頑張っています。大関 和夫 様には宮之浦岳で大変お世話になり是非 4 月 26 日の慰霊祭には参加したいのですが残念です。

田辺　潤　（大３４経）
元気に暮らしております。大関が亡くなったのが悲しいですが、私もそう遠くはないでしょう。皆さんにお会いできることを楽しみにしております。

鳥居威男　（大 35 経）
最近膝の調子が悪く六甲山への歩きも中止、家でおとなしくしています。

藤安賢一　（大 36 経）

日々保久良参りを続けております。お蔭さまで元気にしていますが、階段があるとやっかいです。杖を頼りに踏み外さない様に慎重に登り降りしなければなりません。夜間も困り PM3時よりなら出席できます。

越田和男　（大 36 理）

もっぱら低山・里山・山の湯巡りです。

伊藤久三郎　（大 36 経）

総合失調症で毎日岸和田の病院通いをしています。故 大関 和夫 様のご冥福を祈ります。皆様によろしくお伝えください。

牧野　宏　（大 36 経）

春に40時間かけて「にっぽん丸」で小笠原諸島へ行きました。ハワイの海も及ばぬ透き通った美しい青い海、土地の言葉で無人ブルーと言うそうです。鯨のジャンプや信天翁(あほうどり)が大歓迎をしてくれました。再び40時間かけて本土に着岸、プールで泳ぐのも好きですが地平線しか見えない大海原も良いものです。大時化も堪能できますし。

飯田　進　（大 38 経）

小生のスキーシーズン終わりました。今シーズンは2泊3日の行程で5度試みましたが、まともに滑れたのは5日間だけでした。季節は20日程前倒しになって、悪天候が続くようです。来年こそ好天に恵まれたいものです。皆さんに宜しく。

二谷和成　（大 38 経）

元気にしております。近郊の低山歩きも月1回ぐらいになりました。

森本全彦　（大 39 法）

歳相応かそれ以上のボケが始まり毎日家内に助けられての生活です。身体の方はまだまだ元気な方なので、スキーは止めて、山登りだけは続けようかと。訃報を聞くたび、寂しくなっております。

武田雄三　（大 39 経）

お世話役の皆さんご苦労様です。90周年事業の検討も有る由、総会出席者が多いとよいのですが。

村上与利一　（大 39 営）

4/23 白内障の手術。よって2～3 日外出を控えています。

井本　洋　（大 40 理）

毎日時間を持て余しています。井本流時間を上手に使う方法「大人のやりなおし中学数学」で中学生の数学を復習しています。難しい苦労しています。富士山麓を一周しようと考えています。【今年中に】皆様によろしくお伝え下さい。

奥山正紀　（大 40 法）

何とか生活しています。

鵜木　洋　（大 40 文）

4月で入院して1年になります。山男の底力で生き延びています。　　【娘より】

竹中統一　（大 40 経）

お蔭さまで元気に冬はスキー、春から秋には登山を楽しんでおります。スキーは本年になってもホームの安比スキー場に3回、今週は明日よりテイネ・ニセコと北海道に遠征します。登山は昨年度、立山・天城山・九重山・浅間山 etc となんとか頑張っております。

井上　徹　（大 41 営）

いつもお世話様です。ホームページで皆様の活躍ぶりや活動を拝見し、驚いたり、感じたりしております。70を過ぎ伊豆半島の最高峰 万三郎岳【1,406m】に登るのが精一杯といったところです。皆様によろしくお伝え下さい。

柏　敏明　（大 41 経）

幹事様何時もお世話を頂き有難うございます。今年もフラノや栂池でスキーを楽しみましたが、サホロで転倒し、痛めた肩の後遺症に悩んでいます。14日から30日まで、娘の在住している

シンガポールに行きますので、残念ながら欠席いたします。ご盛会をお祈りいたします。

森岡宏光　（大 43 理）

幹事さんいつもご苦労様です。今年もS43年卒同期会4名にて、高松市 頼富家のいろりの間にてバーベキュー大会を開催致しました。皆さん70才の年令です。まだまだ元気で働いています。次回は9月頃箱根の旅館にて行う予定です。

國分廣昭　（大 44 経）

相変わらず元気で駐車場をやっています。よろしくお願い致します。

石原浩二　（大 44 理）

昨年6月 雄山以降、山には登っていません。

赤田正和　（大 44 理）

まだ現役しています。新幹線長野駅舎など国産林の振興に注力しています。プライベートでは右まきの活動忙しいです。「不二歌道会」「防衛を支える会」「日の丸行進の会」「宮城遥拝の会」「百人の会」「日本会儀」など今年は終戦70年、節目の年と考えています。よろしく。

南里章二　（大 45 理）

1月から2月にかけて約3週間、パタゴニアを旅して来ました。この時期は在職中、入試・卒業式その他で休めず、40年来の憧れでした。快晴に恵まれ、パイネ、フィッツ・ロイなど心ゆくまで眺望を楽しみました。5月末から6月にかけて、昨年度の続きでサンチャゴ巡礼路のフランス側の道を歩く予定です。ご一緒に如何ですか。故香月名誉会長の曾孫さんの樋口君(高 1)を慰霊祭にお誘いします。宜しくお願い致します。

矢吹　操　（大 45 理）

元気です。早く宮仕えを卒業したいです。

井上知三　（大 48 文）

昨年は2月に自転車事故で満足にスキーができませんでしたが、今シーズンは安井、塩崎両先輩にお付き合いしていただき、楽しく満足したスキーが出来ました。暖かくなったら低山・里山歩きをしようかと思っております。ちょっとひとり言、大森さんから 2002 年に事務を引き継いで早いもので 13 年、だんだんと気力・根気が無くなってきたようです。早く誰か交代してくれないかな・・・？でも中学時代に自然の楽しさを教えてくれた平井 会長の間はもう少し頑張ってみようかな・・・

平井幹男　（大 50 文）

今年はいよいよ 90 周年の年、総会はもちろん秋の90周年パーティーを盛り上げるためにもどんどん山岳会行事には参加する予定です。

村田信一　（大 50 経）

いつも有難うございます。孫の顔見たさに、息子夫婦の住宅取得の応援中です。名前まで考えているのに、孫が出来るのはいつのことやら・・・。ご盛会をお祈りいたしております。

高橋（西川）けいこ　（大 50 文）

いつもありがとうございます。いつも会員短信を楽しく拝読させて頂いております。自分は・・・というと平凡で、つまらんですワ。

中澤章浩　（大 51 文）

山も散歩もご無沙汰です。また再開できればと思っています。

大柳（吉松）香代子　（大 51 法）

高齢親の介護が続き外出困難度はグレードアップするばかりです。TV やネットで山登りを楽しんでいます。いつもご案内ありがとうございます。

松本好博　（大 52 法）

元気で頑張っています。90周年行事には参加できませんが100周年行事には参加を目標にします。いつも有難うございます。タシデレク！

要　裕晶　（大 55 営）

大阪へ異動になりました。どうぞよろしくお願い

致します。

住友健時　（大 55 法）

元気に暮らしております。申し訳ございませんが帰国できませんので欠席させて戴きます。皆様によろしくお伝えください。　　住友和子 母

山本恵昭　（大 56 理）

この冬はたっぷりと積雪があったようですが、あまり山やスキーに行くことができませんでした。5 月の連休には北アルプスの雪山を楽しみたいと思っています。

川野幸彦　（大 56 理）

皆様お元気ですか。私はなんとか元気で過ごしています。東京での単身生活も 3 年目です。そろそろしんどくなってきました。5 月のGWには、独りで遠見尾根から五竜岳へ登る予定です。のんびりと楽しんできます。皆様によろしくお伝えください。盛会を祈念しております。

今井啓介　（大 56 経）

昨年から浅草に居を移し、終の棲家とする事にしました。浅草神社の氏子ですから、三社祭にも参加します。

（平成 27 年 7 月　逝去されました　編集）

八木　健　（大 58 経）

両日とも都合付かず今回も欠席させて戴きます。ここにきて急に体力と集中力の衰えを感じるようになりました。皆様に宜しくお伝え下さい。

西名俊英　（大 60 理）

いつも案内をいただきありがとうございます。今年は雑事が重なり、落ち着く暇がありませんが、GWはいつもの丹沢へ家族4人でキャンプに出かけようと思っています。盛会をお祈りします。

森本寛之　（大 H19 理工）

現在タイ赴任中の為出席できません。盛会を期待いたします。　　父親より

∽　∽　∽　∽　∽　∽

本田依子　様

いつも御案内ありがとうございます。ゴルフはしているんですが、山歩きの元気はなかなか出ません。皆様の健康と御幸せをお祈りしています。

乾恵美子　様

昨年は、スイスアルプスとカナディアンロッキーでトレッキングを楽しんできました。ところが先日、階段をふみはずし足首を捻挫しましたので、当日までに治るよう願っています。よろしくお願い致します。

横山嘉壽子　様

慰霊祭のご案内ありがとうございました。早いもので今年の2月、主人の13回忌をすませました。毎年送っていただく「山嶽寮」では、主人から聞いた、お名前の方々のご活躍の様子を読ませていただいては、主人に報告しております。腰痛がありますので欠席致します。

樋口雅子　様

此の度は、ご案内を頂きありがとうございました。又、山嶽寮と写真も頂きまして本当にどうもありがとうございました。先月、祖父香月慶太の13回忌を行いました折に皆様からお声かけいただき、慰霊祭にも参加させていただいた事を報告いたしました。祖父もきっと感謝していると思います。本年度から次男も甲南中学校でお世話になりますがどうぞよろしくお願い申し上げます。

ー報　告ー

秋 の 集 会

日　時　平成26年10月11日（土）～ 12日（日）

場　所　木曽文化公園内宿泊施設「駒王」（長野県木曽郡日義村）

次　第　10月11日　受付　夕食･懇親会
　　10月12日　朝食　記念撮影　部歌斉唱【山の歌】

出　席　砂川彰雄 大32経　雨宮宏光 大33経　麻畠重彦 大33経　鈴木頼正 大33経
　　田辺　潤 大34経　越田和男 大36理　飯田　進 大38経　武田雄三 大39経
　　安井　正 大40経　伊丹徳行 大40法　塩崎将美 大41経　國分廣昭 大43経
　　山本眞博 大48理　井上知三 大48文　平井幹男 大50文　渋谷一正 大51営
　　松下哲夫 大52理　平井吉夫 新高32

平成 27 年度山岳会総会

日時　平成 27 年 4 月 25 日（土曜日）

場所　平生記念館

出席

福井　實	雨宮宏光	鈴木頼正
田辺　潤	田中　孜	牧野　宏
藤安賢一	二谷和成	武田雄三
安井　正	浪川純吉	國分廣昭
南里章二	赤田正和	井上知三
平井幹男	高橋けい子	松下哲夫
大森雅宏	要　裕晶	山本恵昭
谷　勇輝	川村静治	

次第

会長挨拶　平井幹男

90周年記念事業を成功させるために皆さんのご協力をお願いしたい。

1）事業報告等

慰霊祭　松下哲夫

平成26年4月20日、15名の参加にて実施。

秋の集会　井上知三（代）

平成26年10月に例通り駒王で実施。

山嶽寮　大森雅宏

69号発行の報告と原稿をお寄せ頂いた方々への謝意。

山岳部現状　南里章二

中高・大学部員は0名、大学の部室はスキー部と合同で。（いずれも休部中）

会計報告　山本恵昭

別掲のとおり報告。さんか出席者により承認。

2）議事及び報告

1.90周年事業準備

秋の集会にかえて山岳会90周年記念行事として10月10日（土曜日）大学構内で開催する。

1）2部制で行う

第1部はリレー放談

・時代を区切って会員が喋る

・南里会員の講演など

2)第2部は立食パーティー

パーティーの人数を確保するために各学間で連絡を取り参加を促す

会費は￥5,000-とし同伴者1名は無料

3)招待者は学長もしくは課外活動責任者など(検討中)

4）10/10は授業があるので現場で学生を無料で呼び込みビンゴゲームなどを開催し山岳部を宣伝してはという提案もあり

2.山嶽寮

90周年以降、隔年発行・DVD などのメディアによる発行なども視野に入れては、の意見

担当交代の申出

3.副会長

東京在住川野幸彦会員（S56理）

4.会費

長期間の会費未納者には各種案内のみ送付

慰霊祭

4月26日（日曜日）

　ここ数年、天候に恵まれなかった慰霊祭ですが今年は曇一つない晴天に恵まれ会員13名、ご遺族から乾恵美子様、家族参加で香月会長のお孫さん樋口雅子様ご家族、牧野さんの娘さん石川洋子様ご家族、越田さんの奥様光江様の参加がありました。

越田和男　田中　孜　牧野　宏　安井　正　浪川純吉
國分廣昭　南里章二　井上知三　平井幹男
渋谷一正　松下哲夫　山本恵昭　川村静治

山 行 と 集 い

平成26年4月～平成27年3月

大尖山・台湾　　越田和男　　4月7日

台湾の最南端ガランピ岬に行ってきました。

近くに、台湾の槍ヶ岳あるいはマッターホルン？とでも呼べそうな、格好の良い岩峰(大尖山 317m) があり、その昔甲南の先輩、故川崎厚二氏（昭和24年旧高卒・3代目甲南山岳会会長）が登られたことを思い出した。

帰国して、古い『山嶽寮』(31号1976年)をみると、「台北からー剣山（大尖山）に登るー」と題した川崎さんの投稿があった。商社勤務で台北駐在中に旧正月の休みを利用して、台湾の最南端を訪ね、この岩峰を見て登高意欲をそそられて、連れの台湾人の青年と2人でルートファインディングよろしく攀じ登ったとある。トレイニングなしザイルも持たずにいきなりの岩登りだったので高度恐怖症に悩まされたとのこと。なお、この山は現在登山禁止となっている。

私が、川崎さんにニューヨーク郊外ハドソン川の上流でハイキングに連れて行ってもらったのは、この10年ぐらい後のことだった。多忙な駐在員仕事の合間にも、寸暇を縫って山や自然に接してこられたのだなあと、つくづく思う次第です。

クルージング　　塩崎将美　　4月14日

4月14日　山仲間のヨットでクルージングしてます。昨日は西宮から洲本まで、今日は鳴門大橋をくぐり志度マリーナまで。春の海をノンビリ楽しんでます。

4月15日　今日は五剣山に登りました。緊張する2時間の歩き、景色の良いやまでした。今は小豆島に停泊してます。

4月18日　小豆島から日生、家島をまわり明石大橋をくぐり無事西宮に帰港しました。魚は美味いし海は穏やか、楽しい航海でした。

総会・懇親会・慰霊祭　　越田和男　　4月24日

先週末、標記に参加の際は住吉駅前での二次会、芦屋のうどん屋での打ち上げも含めて大変楽しく過ごさせてもらいました。執行部の各位に厚く御礼申し上げます。3時頃芦屋で解散して、7時前には横浜の自宅に帰りつきました。便利な世の中です。

帰宅後調べてみたら、ロックガーデンに前回行ったのは5年前でした。この5年の変化は自分の体力の衰えも顕著でしたが、ロックガーデンの変化にも驚かされました。灌木ますます生い茂り、せっかくの白い地肌が今やまったく見えず、従って見透しが利かず、案内されないと甲南レリーフに辿りつけない有様でした。レリーフ付近の地盤も緩んでおり、あと何

年もつか心配になりました。

帰路高座の滝で撮った写真を塩崎君にアルバムにのっけてもらうように頼みました。

敦賀半島　　山本恵昭　　4月28日

妻と敦賀半島、西方ヶ岳・サザエヶ岳に行ってきました。

26日朝、神戸発。昼頃敦賀のスーパーで食糧を買出し、下山予定の浦底の林道脇に駐車。1日3便しかないコミュニティバスで常宮へ戻る。14:00入山。急登を終えると銀命水。岩の間の湧水で今夜の水4リットルを汲んで担ぎ上げる。16:20西方ヶ岳山頂非難小屋へ到着。6人くらいは泊まれる小屋を貸しきり。小屋の近くに展望岩があり敦賀湾を隔てて、奥美濃や白山が望まれる。

27日展望岩からご来光。6:00出発。ブナの新緑が美しい。所々にある花崗岩の巨石がアクセントになり、展望を与えてくれる。サザエヶ岳を経て、どんどん下っていき、浦底の駐車場所へ8:30。 半島先端の立石灯台を訪ね、敦賀の気比の松原で昼食。15:00家に帰ってきました。

日帰りの人気コースのようですが、人混みを避けてあえて山頂非難小屋で1泊し、静かな山で日本海の景色を堪能してきました。残念ながら、カメラを忘れ写真は無しです。

再び海谷高地へ　　山本恵昭　　5月6日

カンさん、大森さんと3人で、昨年と同じく海谷高地へ行ってきました。計画では、渡渉して駒ケ岳へ登る予定でしたが、水量多く断念。昨年と同じく阿弥陀山へ登ってきました。

3日　7:00糸魚川の山峡パークを出発。昨年より夏道が多く出ているので歩きやすい。途中でカモシカに出会うが、縄張りを主張しているのか岩の上から鳴きながら、こっちを見ていて逃げない。右岸へ渡ってからは残雪の森を登って海谷高地へ10:00到着。

小さな流れを倒木をたどって渡り、焚火のできる川原近くをキャンプ地とする。釣りをするが、濁りが強くまったく当たりがない。おまけに倒木を渡るときにバランスを崩して川へドボン。2mほどの流れなのに、へそまでつかりずぶ濡れとなる。焚火で衣類を乾かし、酒飲みタイムと鍋料理。

4日　6:00ダム下のスノーブリッジを偵察に行くが、渡ってからの岩と雪の状態が悪く断念。上流へ遡り、昨年見つけておいた渡渉ポイントへ行くが、水量多く危険と判断。駒ヶ岳はあきらめて、昨年登った阿弥陀山へ行くことにする。阿弥陀谷登り口7:00。ひたすら登って尾根上へ9:20着。腰の調子が悪い大森さんを残して、尾根をたどり阿弥陀山10:00到着。しばし眺望を楽しみ、キャンプ地12:00。

またまた釣りに行き、武田さんに頂いた毛鉤でかろうじて岩魚1尾を確保。焚火で塩焼きにしておいしく賞味し、のんびり贅沢時間を楽しむ。太い流木を集め、夜遅くまで焚火三昧。

5日　夜半風が強く、天気の移り変わりの前兆。朝食を終えると雨が降り始めた。7:00出発。夏道をたどって、山峡パークへ9:00到着。本降りになる前に下山できた。

雨飾温泉へ行こうとするが、途中で通行止め。仕

方がないので、少し戻って塩の道温泉へ。一番風呂であったが、そのあと続々と人が来て思わぬ人気に驚きである。糸魚川で、カンさんにそばをおごっていただき、干物をお土産に、大津、神戸へ。

駒ヶ岳目指してせっかく渓流足袋も持っていったのですが、渡渉できず残念。また、紅葉の時期にでも行ってみたいと思います。釣りではまだまだ修行不足で、川岸の枝や流木に引っ掛けて仕掛けを失ってばかりで釣果は伸びず。でも、自然が豊かで焚火三昧、やはり海谷高地は魅力的なところでした。

草戸山 365m　　越田和男　　5月17日

今週は高尾山の東山稜で町田市の最高峰・草戸山に登ってきました。平日でも混んでいる高尾山口駅前から、高尾山に向かわずに、反対側の尾根道に入ると静寂そのもの。結構アップダウンのしんどい尾根筋だが新緑と咲き残りのツツジを楽しんで、津久井湖まで縦走した。

一行は田村俊介氏率いるパミール中央アジア研究会の老人仲間6名。特筆すべきは初参加の内田敏子さん（昭和6年生、83歳）。70歳代で8000m峰を登ったオバー様。街中で見ると普通のバーさんだが、山装束をするとぐっと若返っておられ、健脚そのもの。頂上での赤ワインも勿論のこと、下山後の餃子屋での打ち上げでは、生ビールの中ジョッキ2杯をペロリ。この9月にはネパールの6000m級の山を目指しておられるとのことだった。生まれつきの身体能力なのか、努力の賜物なのか、脱帽するのみ。

氷ノ山神大ヒュッテ　山本恵昭　　5月20日

17日18日と、氷ノ山の神戸大ヒュッテに行っていました。100周年事業の一環で、小屋補修用資材の荷揚げのお手伝い。久しぶりに20kg砂袋を担ぎました。現役が8名参加、女性部員でも20kg×2袋を何往復も担ぎ上げるのには驚きました。

今年のスズコは遅れているようで、まだあまり生えていません。沢山の人が藪に入っていましたが、どなたもあまり採れていませんでした。コシアブラの味噌汁と山椒ラーメンを楽しみました。

5月GW四国・石鎚山　　白川浩平　6月4日

H2新高卒の白川浩平と申します。初めての投稿失礼いたします。

高校生の時以来、山登りとは疎遠になっておりましたが、小学5年生の息子が富士山に登りたいと言い出し、今年の夏に計画しております。先月5月のゴールデンウイークには、トレーニングとして四国・石鎚山に登ってきました。

土小屋登山口から山頂直下の鎖場付近まで2時間程、鎖場を登って山頂の石鎚神社、そこから石鎚北壁の真上の岩尾根をたどって最高ピークの天狗岳を踏んできました。意外に残雪が多く、ちょっとした雪渓を横切ることも何度かあり、また石鎚北壁を見下ろしては高所恐怖症である自分を再確認してきました。

また、帰り道では下りの鎖場の大渋滞を横目に、すぐ脇の急な雪渓をキックステップで降りて大幅な時間短縮出来たのですが、この時は高校2年生の時に大学山岳部の合宿に参加して雪上訓練でシゴいて頂いた事に本当に感謝しました。

山道では、オシャレなウエアに身を包んだ若い女性グループや、山登りデートといった風の若いカップルを見かけ、一昔とは変わったものだなあとしみじみ思いました。

越田和男

父子の連休登山記楽しく拝読。次は夏の富士山だそうですが、出来るだけ混雑を回避した日程で、是非楽しんで下さい。またの寄稿をお待ちしています。

山本恵昭

子供と登山、いいですね。我が家も子供が小さいころは白馬岳や御岳、北岳といろいろ行きました。懐かしく読ませてもらいました。

奥飛騨　　塩﨑将美　　6月5日

残雪と新緑の奥飛騨で温泉と酒を楽しんで来ました。

スズコキャンプ　　井上 知三　　6月15日

今年も恒例のスズコキャンプに参加しました。今回は常連の塩崎さん・大森さんがおられませんでしたが、いつものように10時に氷ノ山大段ケ平に集合、準備を整え神大ヒュッテ付近を中心にスズコ採り・氷ノ山への山歩きとにめいめいが励みました。

夕刻より天滝の休憩所で皆でスズコの皮むきをし、山本シェフの手際のよい料理【天ぷら・鍋】美酒で宴会、夜の更けるのも忘れ楽しいひと時を過ごしました。

越田和男

山形の知り合いから教えてもらったのですが、採れたてのスズコを皮のまま火であぶり、皮を少々焦がしたところで皮をむき、醤油、塩、またはマヨネーズ（プラス山葵少々）で美味しく食べた経験があります。一度お試しあれ。ご存じかとも思いますが。

山本恵昭

スズコキャンプ、好天に恵まれてのんびりと採取。シーズン終盤ですが、結構太目のものが沢山収穫できました。昨年は虫入りが多かったのですが、今年はましな方。宴会はいつもの場所で、夜遅くまでにぎやかにたわいのない話を楽しみました。それにしても皆さんお元気ですね。ご参加の皆様、有難うございました。

暑くなってきました。次は沢登りでしょうか

六甲の裏山　丹生山系シビレ山　山本恵昭

7月6日

六甲の裏、北西方向に標高500m前後の丹生山系があります。梅雨の合間を使って、妻とシビレ山から丹生山に行ってきました。途中、出会ったのは単独行のおじいさん2人だけで、静かな山でした。

9:15呑吐ダム横駐車場に車を止め、太陽と緑の道の看板に従って森の中を行く。道ははっきりしているが、登るにつれて急登となる。あっちこっちにロープが張ってあり助かる。10:45シビレ山山頂465mはまったく展望もない。

丹生山515m山頂の丹生神社でラーメンとコーヒーで昼食11:35。黒い雲がだんだん降りてきたと思っていると雨が降り出した。急な道をひたすら下り、12:45サイクリングターミナルの横に下山。傘をさしてダム沿いのサイクリングロードをたどり、駐車場に13:25着。

シビレ山は何の特徴もない藪山なのですが、変な名前ですね。ダム湖をはさんだ南側にはシブレ山という山があります。シビレやシブレ、なんか特別な意味があるのでしょうか。

越田和男

山梨県にシビレ湖（四尾連湖）というのがあります。富士山の北麓、海抜880m、にある小規模なカルデラ湖で、きれいなところです。四つの尾を連ねた竜の住むところとの言い伝えがあるそうです。

山本恵昭

いろいろな名前の由来があるんですね。

ちなみにシビレ山の名前の由来をネットで調べてみると、「丹生山は丹生（水銀）が採れたそうで、山伏がそれを使って不老長寿の薬を調合していて水銀中毒で痺れた」「渡来人の言葉」とか書いてありました。シブレ山はどういう意味でしょうかね。

納涼沢登り　　山本恵昭　　8月3日

毎日暑い日が続きますが、そんなときは納涼沢登りというわけで、大森さんと川野との3人で県北三川山へ行ってきました。

8月1日　夜発、深夜1:00に麓の三川権現に到着。元売店の軒先を借りてワインで宴会。

2日　6:00発、佐津川左俣へ入る。台風の影響で時より雨が降る。フェーン現象のためか蒸し暑い。2時間ほどは平凡な谷が続くが、やがて8m滝が現れる。右岸のシカの足跡をたどり、最後はロープでビレイして滑りやすい草付の泥壁をトラバースして落ち口へたどり着く。

次はチョックストーンの3段滝。お尻を押したり手を引いたり、チームワークの見せ所（誰も見ていませんが）。3段目は避けようのないシャワークライムでずぶ濡れとなるが、気持ち良い。続く5m滝を左岸から巻くと、また平凡な谷になる。ブナやトチの森が美しい。しばらく行くと20m滝に出会う。右岸を難なく高巻くと、ほぼ終了。

沢をつめるという手もあるが、倒木が多く歩きにくいので、標高700m付近から右の尾根に登る。少し藪を漕いでいると、突然湿原が現れる。スギゴケの緑が美しいが、足を踏み入れると、底なし沼のよう。さらに進むと右の谷に砂防ダムが現れる。ラッキーなことにその工事用の林道跡をたどると藪漕ぎなしで、10:00に山頂近くの登山道に合流できた。シャクナゲコースの急な登山道をひたすら下ると、11:30駐車場へ到着。

ヒルが居なかったのは良かったのですが、帰宅して荷物の整理をしていると、妻が残った食糧の包みからダニを発見。あわてて荷物をチェックし、シャワーを浴びて服を洗濯。シカが沢山いたので、ダニも沢山居たのかもしれません。いろいろなウイルス性伝染病を媒介することで話題になっているので要注意です。そんなわけで、夕方の平生会にちょっと遅刻してしまいました。

白山西面ロングコース　　山本恵昭　9月17日

白山は周囲を長い尾根が取り囲み、豊かな森で包み込まれた山です。昨年は、白山北面のロングロース　中宮道から岩間道を楽しみました。今年は、西面のロングコース　別山市ノ瀬道から釈迦新道を、妻と歩いて来ました。

9月13日、登山口の市ノ瀬は朝から車と人で大混雑。ほとんどの人は別当出合までバスで行き室堂経由で山頂を往復するようで、次々とバスに乗っていく。

市ノ瀬駐車場を7:00出発。チブリ尾根の下部は、

立派なトチやブナ、ミズナラの大木が生えている。ひたすら登ると、10:45チブリ避難小屋へ到着。朝は晴れていたのに、いつの間にかガスに包まれて展望がない。さらに登ると主稜線に出て、別山分岐へ13:00。分岐に荷物を置き、30分ほどかけて別山山頂を往復する。主稜線ではしだいにガスも薄れ、白水湖や南竜ヶ山荘が見えてくる。最後にドンと下り、登り返すと南竜ヶ山荘キャンプ場に16:00到着。

小屋で買った缶チュウハイ￥300で乾杯。夕食後、いつの間にか寝ていたが、周囲の声に目が覚める。テントの外を覗くと満点の星空で、天の川や流れ星にみんな興奮気味。

9月14日、5:40発。上空に寒気が入り込み、木道や周囲の高山植物には霜が降りて真っ白になっている。山荘横からトンビ岩コースをたどり、室堂へ7:10。一気に人だらけとなる。御前峰に8:10到着。快晴の中、東西南北どちらを見ても山また山の連なりで、白山は懐が深いことを改めて認識する。大汝峰はトラバース道を行き、さらに下って登り返すと七倉山分岐10:20。4本の道が合流しているが、静かで良い雰囲気のところだ。

白山釈迦岳に向けて歩きやすい道をどんどん下り、湯の谷乗越に11:30。右に少し下ると水場があるようだが、疲れて行く気がしない。またガスが出て期待していた展望もなし。ひと登りすると、いつの間にか道は白山釈迦岳を巻いて、釈迦が岳前峰へ12:30。ここからジグザグとひたすら下り、嫌になる頃やっと林道に合流する14:30。あとは林道をたどりショートカット道を進むと、なんとか16:00市ノ瀬駐車場にたどりついた。

バス停の前の旅館の温泉￥600で汗を流し、後は一気に勝山まで車を走らせる。スーパーで惣菜を買い、九頭竜川の河川敷公園で夕食。ガソリンスタンドで教えてもらったトイレ付駐車場で仮眠し、15日早朝、自宅に帰った。

登山ブームのせいか、白山のメインコースは大混雑でした。しかし、さすがにしんどいロングコースは人気がなく、静かな山旅を楽しみました。

森の中で　　山本恵昭　　9月30日

9月27日土曜日に、またまたMI茸を求めて県北の山に行ってきました。

今年は熊の出没が多いとのことで、熊鈴をつけて藪漕ぎを始める。しかし、せっかく自然を楽しむために来ているのに、どうも背中でチリンチリンと風情がない。すぐにはずしてザックの中に放り込んでしまった。風の音、アカゲラのドラミング、鹿の気配、やはりこうでないと。

尾根まで上がると、遠くで鈴の音が聞こえる。一定のリズムではないので、ハイカーではないだろう。たぶん二人。動いたり、止まったり。これはMI茸狙いのライバルに間違いない。徐々に近づいてくるその音と姿を、森の中で自分の気配を消してじっと見守る。おじさん二人連れ、ミズナラの根元を行ったり来たりしながらこちらには全く気づかずに行ってしまった。キノコしか見てないのかね。まるで自分が野生動物になったようである。もしかしたら、私も自分が気づいていないところで、熊や鹿からこんな風に見られているのかもしれない。

いつもの森がなんか変だ。枝振りに勢いがない。見上げると、二抱えも三抱えもあるようなミズナラの大木が次々と立ち枯れている。近づいてよく見ると、幹の根元に黄色い粉が散らばっている。これは、数年前に京都で問題になったナラ枯れでは。カシノナガキクイムシが媒介するナラ菌により、ミズナラ等が集団的に枯損するナラ枯れ。京大演習林などではいろいろ防護対策を施して最近少し下火になったと聞いていたが、この原生林では手付かずのまま蔓延

してきているのか。このまま進むと、増えすぎた鹿の食害で幼木がほとんど育っていないこともあって、この森のミズナラは絶滅してしまうのか。それとも、なかにはナラ枯れに耐性を持つ者もいて生き残るのだろうか。あるいは、気候変動など何か他の原因で木自体が弱って、全体の耐性が落ちているのか。何百年かの時を経て生き残ってきた木々の行く末を、森の未来を、憂う。

そんなこんなで、道なき森の中を6時から14時まで徘徊し、おじさん二人と鹿5頭に出会った以外は誰にも合わず、多少のお土産も手に入れてどっぷりと森に浸ってきました。

富士登山　9月14日　　白川浩平　　10月9日

今年の夏に富士山に登ろう！と小学5年生の息子と約束していましたが、長雨のせいで夏休み中に行く事が出来ませんでした。今年は無理かなあとあきらめかけていましたが、9月13、14、15日の連休の天気予報が良く、今年最後のチャンスだと思い、急遽出発しました。13日、高知県足摺岬より一日かけてのドライブで深夜富士宮ルート5合目駐車場着、車の中で仮眠。夏山最後の連休のせいか、かなり登山者が多く、結構うるさくて落ち着かない。少し眠ったらもう5時頃になり、準備を始。6時頃朝日を見ながら出発、宝永山火口を経て、御殿場ルートから頂上を目指す、通称「プリンスルート」で登り、富士宮コースを下山する予定で登り始める。登山口から見上げる頂上は思ったより近く見える。朝一番のうちは快晴で日が当たると暑い位であったが、火口の中の日陰に入るとさすがに寒い。人ごみを避けてこのコースを選んだが、なるほど火口の中はガラガラであるが、足下はふわふわの砂利で歩きにくい。御殿場コースに出た位からガスがかかりはじめる。6合目から7合目位で昨夜の睡眠不足がたたったか、疲労が激しい。まるでエベレストの頂上アタックのように(もちろん経験した事はありませんが)足が前に進まない。7合目位からは、それまで元気だった息子も軽い頭痛を訴え始める。頑張って8合目の小屋まで登ったが、2人ともバテバテである。時間的にはまだ余裕があったが、相談した結果、今回は無理せずあきらめる事にする。帰りは少し寄り道をして、宝永山のピークを踏んで行く事にする。宝永山の火口の底からの登り返しがまたきつく、ヘトヘトになって下山しました。変に遠回りをせず、まっすぐ富士宮ルートを登っておけば頂上まで行けたかも…とも思いますが、これはこれでいい経験になりました。高校2年生の冬、一人で富士山に登ろうとして、夜中テントを吹雪でつぶされて退却しましたが、いまだに富士山の頂上を極める事が出来ておりません。

白川君へ　　南里章二

お元気で何よりです。息子さんとの富士登山の様子、楽しく拝見しました。昨夜届いた山岳会誌に載せられた白川君の長文の寄稿も楽しく読ませていただきました。白川君の高校時代、部員が唯一人ということで大学山岳部にお任せしっ放しで何も指導出来ず申し訳けありませんでした。しかしこの20年ほど思い続けられてきたことを一気に掃き出し、心の整理もつかれたことでしょう。今となってはあの時白川君の面倒を見ていた田中、宮崎、西濱君たちも白川君が大学山岳部に入らなかったことを決して責めることなくむしろ暖かい目で見守ってくれていると思います。大学進学時に「きつく注意」するだけでなくもっと真摯に相談にのってあげられたら良かったと反省しています。しかし卒業後、部員が増えた高校の合宿に何度か参加してくれて、現役生が白川君を「鉄人」と呼んでいたことをよく覚えています。しばらくポナペ島で暮らされていたとか。白川君が居るうちにもう一度ポナペを訪れたかったのですがかないませんでした。これから山岳会の集まりに

も堂々とご参加ください。お待ちしています。

秋の集会　駒王　　渋谷一正　　10月9日

今日、ある先輩より連絡あり、台風はきているし、御岳は噴火している。集会はやるの？

やりますよ！山岳会の年に一回の集会ですから！

渋谷一正

18名が参加し、無事終了しました。

越田和男

この度もお世話様でした。60代～80代の老人クラブではありましたが、楽しい集いでした。厚く御礼申し上げます。山岳部の行く末を案じるマジメな議論もありましたが、具体的な妙案が出るわけもなく、愚痴と嘆き節に終始して、失礼をいたしました。

帰路、薮原から古い林道を車で辿り着いた旧鳥居峠近くの御嶽遥拝所のひなびた佇まいと、御嶽の噴煙の遠望は、旅のいいオマケでした。勿論犠牲者の方々に手を合わせた次第です。

駒王で同宿した、遠方から御嶽の捜索に応援に来ていたらしい婦人警官（または自衛官？）のなかに、結構な美人が居られたことを後で聞き、気がつかなかったのが残念至極。

山で1泊　海谷高地にて　　山本恵昭

10月21日

以前、雨宮さんからお勧めいただいていた頚城駒ケ岳に行ってきました。今年5月にカンさん・大森さんと海谷高地から登ろうとしたのですが、増水した海谷渓谷を渡渉できずに断念。今回は単独で、素直に登山道をたどって駒ケ岳へ登り、海谷高地をまわってきました。日帰りでも可能なコースですが、せっかくなのでキャンプ道具を担いで海谷高地で一泊してきました。

10月18日　三峡パークへ8:00に到着。準備をして8:40出発。急な登山道を梯子やロープを頼りに登り続けると、やがて斜度が落ちて上部ブナ林へ。下はまだ緑豊かな森なのに、この辺りは黄葉が、そして山頂部はもう葉が落ちている。この山の急な登り坂は季節の移ろいを辿っているかのようだ。11:00少し開けた山頂で昼食。紅葉の阿弥陀山、うっすら雪化粧をした焼山、すでに白く輝く長梅の山々が見渡せる。ハヤブサが頭上を3回転して飛んでいった。

駒ケ岳南峰からは、痩せ尾根の急な岩場の下りに緊張の連続。古い残置ロープや錆びた鎖が頼りないが、他に頼るものがないので頼らざるを得ない。最低コルからは、鬼ヶ面山へ急な登り返し。道は鬼ヶ面山頂は巻いて、また急な下りへと。鬼ヶ面山を超えて、少しは穏やかな道となる。ふと道端の立ち枯れブナを見るとキノコが…。こんな悪場でキノコに目がいく酔狂は私だけか。ナメコザクザク、ヒラタケどっさり、クリタケ、ブナシメジを少々。キャンプ用具の重荷に、さらに追加荷物が加わった。鋸岳の登りにさしかかって少し進むと、海谷への分岐に到着14:00。左へ折れて尾根上の道をひたすら下る。氷ノ山辺りのブナは大木ほど瘤や枝折れでごつごつして、いかにも苦労して生き抜いてきたという印象だが、このあたりのブナは同じ大木でも幹が素直にまっすぐ伸びていて美しい。15:20海谷渓谷の川原に降り立った。登山靴をサンダルに履き替えてズボンをたくし上げ、渡渉を繰り返し下る。水深はすね程度。16:00取水口の近くの川原にテントを設営した。流木を集め焚火をするが、急激な冷え込みに我慢できず早々にテント内へ逃げ込む。夕食はたっぷりのキノコスープ。

19日　7:30キャンプ地前の流れを渡ると登山靴に履き替え、よく整備された登山道を下る。後は歩くだけと油断していたら、そうは問屋が卸さなかった。最後の渡渉地点、普段はすね位の深さと聞いていた。

しかし、数日前の雨の影響か、今は岩の間をドウドウと水が流れている。こけたら巨岩の間に挟まれて、水没お陀仏。覚悟を決めて、腰まで浸かって渡渉する。対岸に渡り終え、誰もいないことをいいことにズボンもパンツも脱いで絞り、岩の上でしばらく干してみる。しかし、この谷底にまだまだ陽も当たりそうにない。あきらめて濡れたまま履いて先を急ぎ、三峡パーク9:00着。三峡パークでは、ちょうど海谷祭りの開会式が始まったところであった。いろいろな出店があり、手打ちそば、地鶏焼き鳥を食べる。珍しくハタケシメジを販売していたので購入し、お土産に。

海谷高地での1泊。夜半、目が覚めて外をのぞくと無限の星空、それを切り取る山々の黒いシルエット。そしてすぐにウトウト。次に目が覚めると、いつの間にか主役は月にかわっていた。夜露に濡れた川原の岩が月明かりに輝く。思わずテントの入口を全開にして寝袋に入ったまま眺め続ける。ゆっくりとした時間が流れ、東の空が白みだす。漆黒の森から、モノトーンの木々の姿が浮かびあがり、やがて赤や黄色の彩を取り戻した。鬼ヶ面に朝日が当たり輝いていたかと思うと、しばらくして川原にも陽が届き、逆光の中で川面から朝霞が立ち昇る。焚火の火を起こし、コーヒーを一杯。

最高に贅沢な時間。辻まことの世界に少しは近づけたすばらしい「山で1泊」でした。

越田和男

海谷山塊単独紀行興味深く拝読。貴君の衰えを知らぬ山行意欲、技術、体力、生活力にはいつも感服の至りです。でも実は、今回は羨ましさを通り過ぎて、きわどい痩せ尾根の下降や、増水の渡渉など、ひやひやの連続でもありました。どうか仲間の居ないときはもう少しのんびり歩きを楽しんで下され。

山本恵昭

ご心配いただき、有難うございます。

とても小心者ですので、用心には用心を重ね、慎重に行動しています。ただ、老化が着実に近づいてきていることは実感しています。乱視が進んで遠くも近くも見えにくい。薄暗くなるともっと見えない。膝が上がりにくい。指先がスムーズに動かないときがある。

十数年前、庭でこけて手を骨折したときに思いました。野生動物としては、もう寿命なんだと。これからも、安全第一で自然を楽しみたいと思います。

久しぶりにカニ・きのこに参加して　井上知三

11月16日

カニ・きのこに参加の皆さまお疲れさまでした。幹事役の山本恵昭さん何時ものことながら感謝・感謝ありがとうございました。 昨日、会長の平井さんと早朝豊中を出発、順調に9:30に集合場所の畑が平に到着。身支度を始めると思わぬ降雪、一面うっすら雪化粧しました。先発の山本さんと中腹辺りで合流、きのこを探しながら扇ノ山の避難小屋で昼食後駐車場に下山。その後、浜坂のカニ祭り・宴会の買い出し準備と慌ただしく時が過ぎ夕刻、武田さん大森さんと何時もの浜坂県民サンビーチのキャンプ場で合流。皆で宴会の準備開始。

今回の目玉は幻の天然のまいたけ（山本さんが事前に準備）の天ぷら美味・絶品でした。それに雄さん持参の「香住鶴のひやおろし」が相性抜群、例年の焼きガニ・鍋と時の過ぎるのも忘れ楽しい時間を過ごしました。

今回は少人数だったので色々と恵まれラッキー…？翌朝はカニのせり昨年不漁だったようですが今年は目標の数を確保値段も手頃でした。記念撮影後解散。忘年会の話もチラホラ…？

山本恵昭

カニキノコ会に参加の皆様、お疲れ様でした。

土曜日7時頃は晴れていたのですが、森の中をきのこを求めてうろうろしていると急に黒い雲が現れました。しばらくすると夕立のような降雪に見舞われ、見る見る笹の上に積もっていく。林道に雪が積もると降りれなくなると思い急いで下山していたら、平井さん井上さんと合流。下のほうはそうでもないそうなので、一緒に山頂往復。

温泉をパスし買出しをして、武田さんと合流。香住鶴ひやおろしを呑みながら、マイタケ天ぷら、ニシンの刺身、セコガニ、焼きヒラタケポン酢和え、焼きガニ。そうこうしていると大森さん登場。にぎやかにワイワイやるうちに酔いがまわって、気がつけばいつの間にか車の寝袋の中でした。久しぶりに記憶がない。結局、カニキノコ鍋は作ったものの、誰も手をつけずに皆さん夢の世界へ行かれたようです。

日曜日、朝から穏やかに晴。武田さん平井さん大森さんが競市へ。たまたまお願いした仲買人は、数年前にも依頼した方だったそうです。なかなか良いカニを安く仕入れていただきました。朝から昨夜のとろとろになったカニキノコ鍋を食べてお腹一杯。雑炊にはたどり着きませんでした。食べきれずに余った分を捨てるのには忍びなく、鍋ごと持って帰って家で濃厚カニキノコ味を再度楽しみました。

おーもり

この催しももう10何年になりますね。おかげさまで毎年季節のキコとカニを味わえてありがたいことです。リーダー山本に感謝しております。

さてさて。日曜日、帰神の当日は娘が外食。というわけで本日月曜にカニの夕べを楽しみました。おいしく頂けてありがたいことです。

さてさてさて、ご近在の皆様。来年はお仲間にいかがでしょう。カニの値段ですか。時期やモノによりますが結構割安。1枚千円台から2千円台程、そんなくらいです。

山本恵昭

まだ明るいうちから、武田さんが買ってきてくださった香住鶴「ひやおろし」から始まり、それが無くなるとスーパーで購入した香住鶴冬季限定「しぼりたて」原酒へ。どちらも甘口ながらしつこさはなく、フルーティで美味しいお酒です。それぞれアルコール分18%、19%と書いてあります。つい飲みすぎて、酔っ払うはずですね。ちなみに、香住鶴の社長さんは甲南出身だとか。良い仕事されておられますね。

越田和男

実は、兵庫県出身ながらこの酒のことを最近まで知りませんでした。香住と云えば、昭和初期に大活躍された甲南山岳部の先輩・故伊藤愿さんの出身地。その愿さんの遺稿集「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞欧日録」(清水弘文堂書房)が上梓された頃、編集の二女松方恭子さんに教えてもらったのでした。

最近、日吉の東急に時々入荷するので辛口の方を買って楽しんでます。

山本恵昭

香住が伊藤愿先輩の出身地とは知りませんでした。いろいろとご縁があるものですね。香住鶴は関西限定かと思っていましたが、そちらのほうでも販売されているのですね。

日本酒については、兵庫県は恵まれています。私は住吉で生まれ育ちました。白鶴酒造の空き箱置き場で基地を作り、菊正酒造の空き瓶置き場でかくれんぼをして遊んでいました。御影、住吉、魚崎と、いろいろな酒造会社の見学ができるようです。酒蔵巡回バスもあるようですが、街中ハイキングしながら試飲の繰り返しを楽しまれている方もおられるようです。山に登るばかりでなく、こんなツアーも楽しそうです。

忘年会 IN 尼崎　　タニ　　12月13日

忘年会お疲れ様でした！
ご尽力頂いた石原様、有り難う御座いました！！

お墓参り　　大森雅宏　　12月30日

藪内君の事故からほぼ30年経ちます。その節は皆様にご援助いただいてありがとうございました。

ヤブの同級生の要くん初め心安いメンバーにお声がけ。六甲のお墓にお参りしてきました。

30年。メンバーもだいぶ老化、いえいえ味のある姿に。墓前で缶ビールで思い出話。そのまま解散にはならず、六甲道で昼ビールの追加と昼飯。日差しの暖かなひと時でした。

謹賀新年　　tani　　1月 5日

明けましておめでとう御座います！

写真は昨年12月の八ヶ岳中山尾根上部岩壁。雪がべっとりついてホールド・スタンスが分かりず、なかなかしびれましたが好天に恵まれ充実の足慣らしでした。

九州温泉山旅　　山本恵昭　　1月 7日

年末、妻と大分へ、温泉と焼酎三昧の車中泊山旅に行ってきました。

神戸六甲アイランドからの夜行フェリーで、26日大分港に早朝着。その日に長者原まで行き、雪山支度を整え入山。久住山と九州最高峰の中岳に登る。好天の中展望を楽しんでいると、2回爆発音が轟き、緊張が走る。すぐ近くの硫黄山は普通に蒸気を出しているだけだったので、どうやら阿蘇の爆音だった模様。遠くに見える阿蘇山からは黒い噴煙があがっている。秘湯と言われる法華院温泉山荘まで下って宿泊。当然、温泉入り放題、焼酎グビリ。

27日　快晴の中、久住山の展望台大船山へ登り、下山。山荘で仕入れた情報を元に、山里の湯へ。知る人ぞ知る炭酸泉で、入っていると全身泡だらけとなりポカポカしてくる。地元の登山家のおじさんたちと楽しく談笑。その後、スーパーで買出しをして、一路小国温泉くぬぎ湯へ。コイン式の家族湯で50分800円。ちょっと硫黄の香りがするが、湯にこれといって強い個性はない。わざわざここまで来たのは、温泉利用すると蒸し釜が無料で利用でき、車中泊もOKとのこと。早速、蒸し釜に食材をセットして、入浴。風呂上りは、豚バラ、鶏肉、レタス、ブロッコリー、サツマイモ、温泉卵、豚まんと、蒸し釜料理フルコース、そして焼酎。

28日　のんびり朝食を済ませ、由布院へ。由布岳西峰ピストン。上部の岩場には雪がついて結構迫力あり。期待していた眺望は、急にガスが出て残念。下山後は、湯布院康葉で日帰り入浴。珍しい青湯と呼ばれる炭酸水素泉で、メタ珪酸の効果で肌ヌルヌルすべすべ。その後、ちょっと趣を変え、国東半島へ。杵築でちょっと張り込んで海鮮炭火焼の夕食。道の駅くにさきまで行き、焼酎で車中宴会、車中泊。

29日　駐車場からすぐの海岸でご来光。ごみがほとんどないきれいな海岸。道の駅の店が開くのを待って太刀魚寿司やみかんなどを仕入れ、国東半島を一周。全国八幡社の総本宮、宇佐神社に参拝。別府へ戻り、竹瓦温泉へ。別府を代表する古い公共温泉で、趣がある。たまたま無料の日だったようで、混雑していたのが残念。百貨店で惣菜を買って、夜のフェリー船旅へ。徹夜運転をせずに、飲んだくれて風呂にも入って帰れるので快適。

梅で一杯は如何　　安井　正　　2月14日

保久良梅林の梅の蕾が膨らんできました。

21日（土曜日）は満開とはいかずとも観梅時期と思います。雨が降らなければ小生11時頃から酒と肴を持ってベンチでぽけ～っとしています。「岡本梅林」へお越しになりませんか？

安井　正

梅は少し早かったですが、晴天に恵まれ心地よく酔いました。

左側お二人は牧野さんのお嬢さん夫婦で、右端は山本千秋君（中高山岳部の後輩）です。

山本恵昭

観梅会、お世話になり有難うございました。

掲示板にあんまり反応がないので、誰も来ないのかなあと心配していました。でも、坂を登って梅林に着くと、安井さん、牧野さん、田中さん、藤安さん、井上さんがすでに宴会モードに。すぐに、初めてお目にかかる山本千秋さん、しばらくして牧野さんの娘さんご夫婦とお孫さんも登場し、にぎやかな会になりました。梅はまだこれからというところでしたが、楽しい話題に花が咲き、ちょっと一杯のつもりが本格的に飲み続けてしまいました。

今から40年ほど前、私が高校生の頃に南里先生からお話を伺っていた山本千秋先輩と、今回初めてお会いすることができて感激です。また、よろしくお願いいたします。

石川洋子

昨日は、楽しいひとときに参加させていただき、ありがとうございました。牧野の娘、石川洋子です。ファミリーで参加させていただきました。もうひとり、むすこが参加させていたのですが、友達と遊びたさにさきにいってしまいました。

保久良神社の参道の入り口の家に縁あって、越してきて4年。ほんとうによいところにきたなあと実感した一日でした。すぐに山にいけるし、こんな企画にいれていただける！わたしが一番はりきっていますが、やまに関しては2回目の有馬い

きをファミリーで春に企画中です。男の子二人、たくましく山に親しんでほしいです。よろしくご指導ください。

後、子育てその他で気があがると山をあるくとわたしは気が落ち着き、風吹岩によくたすけられています。来年もぜひ、保久良　梅見会　開催してください！！ありがとうございました。

越田和男

誠に結構な観梅の宴、羨ましき限りです。

小生の同期の後期高齢者が3名（イーチャン、ドングリ、お星さん）も参加して、元気なようすで何よりと存じます。横浜も梅の盛りはこれからです。今週は近くの大倉山梅林に行ってみるつもりです。

今度は桜で一杯は如何　　安井　正　　3月22日

保久良梅林の端に桜が数本あります。

4月4日、11時頃から保久良鳥居前に居ます。二週間後では遅きに失するかもしれませんが、葉桜で一杯も一興では？

なお保久良の梅はここ数日前から散り始め、観梅会は一ヶ月早かったです。

氷ノ山　横行渓谷周回山スキー　　山本恵昭　　3月29日

2シーズンぶりに、山スキーに行ってきました。

当初は、3日かけて小谷温泉から大渚山・雨飾山・金山とロングツアーへ行くつもりでした。しかし、久しぶりに道具を点検しているとシールの末端バンドが劣化してボロボロに。これではロングツアーは無理ということで、1泊で氷ノ山のお気に入り横行渓谷へ行くことにしました。

3月27日　横行渓谷の林道は、「ブナのしずく」からちょっと上がったところで積雪のため通行止。7:00シールで登るが、何度も雪が途切れてスキーの脱着がめんどうくさい。林道終点の東屋は雪で埋まり、屋根に2mほどの雪が乗っている。ここからは、以前大森さんと来た源流コース。すばらしいブナ林の中を上り詰め、千本杉から山頂へ12:30。山頂で「どこから」と声をかけられた方をよく見ると、神戸大山岳会の土山さんだった。友人と神大ヒュッテをベースに4日間ほど雪山を楽しんでおられるとのこと。「ぜひ小屋に」とお誘いを受け、ご一緒することに。神大ヒュッテで薪ストーブを囲み、昼間っからほろ酔い気分の贅沢な一夜。

29日　朝もゆっくり起きて、朝食前に千本杉まで空身で登り一滑り。朝食後10:00、天気は上々、そのまま下りるのももったいないので、横行渓谷の南側の尾根を回って下ることにする。山頂斜面をトラバースし、南へ続く尾根上は上り下りがめんどうくさいので、東側斜面を高度を下げないように滑り込み、二の丸手前ピークへ登り返す。ピークで景色を眺めながら大休止11:00～？。東に伸びる広い尾根を下る。快適なブナ林の緩斜面が続くが、意外と所々潅木が濃い部分がありわずらわしい。あっという間にやまめ茶屋からの林道に合流し、横行渓谷東屋へ12:00。長い林道をひたすら下るが、単調さに疲れて時々沢際へ下りてイワナ観察。駐車場所へ13:00。

わくわくする当初の計画を諦めて、手近な氷ノ山で我慢することにしました。しかし、神大ヒュッテを利用させていただき、テントで濡れることも無く、避難小屋で寒い思いをすることも無く、立派なブナ林に包まれた横行渓谷を周回し、山スキーを楽しんできました。

例年掲載しています

「残しておきたい書き込みあれこれ」

本年は、ページ数の都合で割愛いたしました。

甲南山岳部・山岳会の歩み

90年通史概説

文中**太字人名**は当時OB　　2015年6月15日稿

前史

明治44年　(1911年)：甲南幼稚園開園
明治45年　(1912年)：甲南小学校開校
大正8年　(1919年)：甲南中学校開校
大正12年　(1923年)：旧制甲南高等学校(尋常科4年＋高等科3年からなる7年制高校)発足
山岳部の前身となった“遠足部”が尋常科2年生の香月慶太の提案で発足した

旧制甲南高等学校山岳部の創部

大正14年(1925年) 遠足部を“山岳部”と改称し、伊藤愿、西村格也、香月啓太、檀淳らを中心に、部員制を採用し、岩登り、アルプス登山、積雪期登山など近代登山への道に進む。アルピニズム宣言なる一文を部報に掲げて守旧派上級生を排した。

アルピニスムス宣言　(部報創刊号より)伊藤愿の草稿と云われている。

現時我國の山岳界はその澎湃たる登山流行の大潮流の只中にあつて、大なる一飛躍をなさんとしてゐる。即ち今や、登山概念に於ける、將又、登山形式に於ける進展段階に立つてゐるのである。

山岳の客観性研究は主観的内容を帯び、登山概念の主観的發展は必然的にその上層建築たる登山形式の変遷を齎らしたのである。理論形式の進展は必然的に實行形式の發展に結果したのである。

登山術の概念に就いての煩些なる論争は今や存在の合理性を失つて了つた。

斯くして今や新しき概念は主観的傾向を帯び、登山形式に於ては Ohne Füehrer の主張となったのである。 然らば又 Alleingehen に就いても、Alleingehen が登山概念の Kategorie 外なり。とは誰が断言し得るか。

遮莫、荒れ狂ふ嵐の中の幾時間、冷き岩稜、高鳴る胸、緊張の一瞬間、寒冷、寂寥の岩小屋に送る忍苦の十数日、その真摯なる態度、迸り出る若き生命の躍動、山行く男の子、これこそ我等若人の精進する姿である。

(創刊の辞に代へて 27.11.13.)

昭和初期（1926～35年）創成期の活躍

おりしも時代は、スポーツ登山の黎明期、甲南高校山岳部は、主に、槍、穂高、剣、後立山等北アルプスを活動の場とし、多くの学生クライマーの輩出により、ヴァリエーション・ルートの開拓で幾多の輝かしい記録を残した。

また、部員数も多く、7学年全校生500名にも満たぬ生徒数で、最盛期は部員80名を数えた。

六甲山麓の本山村岡本の校舎からは、当時先駆者藤木九三氏らにより岩登りのゲレンデとして紹介された芦屋ロックガーデンなどが至近距離にあった。藤木氏らの指導も受け、山岳部員は足繁く通った。しかも、7年制であるメリットを生かして、尋常科（中学）低学年から岩登りの基礎を身に着けることが出来たことが、“岩に強い甲南”を生む理由となった。また、比較的裕福な家庭環境に恵まれていたこともあり、必要な装備類を備えて積雪期登山へも積極的に取り組んでいった。成果は次表にみられる通りである。

昭和2年（1927年）:**「山岳部報告」創刊号を発刊**。藤木九三、石川欣一両氏の寄稿がある。

以後、「部報」「部内雑誌」「時報」「山岳会通信」「山嶽寮」と変遷し、 現在まで110冊を越える出版物として引継がれている。

昭和5年（1930年）：山岳部のOB会として**“甲南山岳会”が発足**。**香月慶太**が会長となり、以後昭和64年(1989年)に**鷲尾顕**に引き継ぐまで、長きにわたってこれを務めることとなる。

昭和初期の主たる山行記録

大正15年8月	初めての北アルプス行 （燕－槍）	磯田辰男　伊藤愿　西村格也 香月慶太　檀淳　前田敏文　長尾
昭和2年7月	小槍および北穂滝谷の遡行 （単独行）	伊藤愿
昭和3年5月	常念～槍～立山残雪期の幕営縦走	伊藤愿　辻谷幾蔵（RCC）今田重太郎ら
昭和4年3月	善六沢より西穂高 （単独）	伊藤愿
5月	剣岳早月尾根＋八ッ峰下半部	**伊藤愿　西村格也**　高橋健治（京大） 佐伯由蔵
7月	錫杖岳烏帽子岩	楠木義明　秋馬晴雄　水野健次郎 井上正憲
昭和5年7月	穂高ジャンダルム飛騨尾根 （初登攀）	**伊藤愿**　田口一郎
昭和6年3月	白馬鑓ヶ岳南山稜 （初登攀） 白馬小蓮華尾根 （初登攀）	近藤実　田口一郎　西村雄二 西村雄二　水野健次郎　多田潤也
昭和6年3～4月	八方尾根～五竜～鹿島槍 （積雪期初縦走）	**伊藤愿**　工楽英司（京大） 長谷川清三郎（京大）
5月	鹿島槍ヶ岳東尾根 （二ノ沢より） （初登攀）	**田口一郎**　西村雄二
7月	北穂滝谷第2尾根 （初登攀）	田口二郎　関集三　伊藤新一 佐山好弘

7月	前穂北尾根3峰フェイス（初登攀）	田口二郎　関修三　伊藤新一 佐山好弘
8月	北穂滝谷第3尾根（初登攀）	田口二郎　伊藤新一
	これらの報告で滝谷の第1～4尾根の番号をつけた概念図を初めて紹介した。この尾根番号が現在も使われている。	
10月	鹿島槍北壁主稜（初登攀）	**伊藤愿**　藤田喜衛（京大）　平吉功（京大）
12月	富士山で極地法を初めて実践紹介	京大隊（西堀栄三郎隊長）に**伊藤愿**が参加　頂上で雪洞3泊
昭和7年3月	白馬南俣より牛首岳ダイレクト尾根（初登攀）	**田口一郎**　松野茂雄
7月	前穂北尾根第4峰（初登攀） 後に甲南ルートと呼称	近藤実　山口良夫
8月	北穂滝谷第1尾根　A･Bフェイス（初登攀）	伊藤新一　伊藤収二
	ジャンダルム第1テラス北壁（初登攀）	伊藤新一　伊藤収二
	前穂高東面北壁	伊藤新一　伊藤収二
昭和8年3月	不帰岳第2峰尾根（初登攀） 後に甲南ルートと呼称	田口二郎　伊藤新一
4月	鹿島槍ヶ岳東尾根（三ノ沢より）（初登攀）	田口二郎　近藤実　伊藤新一
7月	剣岳チンネ北壁正面壁（初登攀）	伊藤収二　比企能

昭和6年（1931年）：単身渡印した**田口一郎**は、ダージリンからシンガリラ尾根のパルートに至り、カンチェンジュンガ山塊を偵察した。

昭和9年（1933年）：2月、治安維持法違反容疑で山岳部の主力部員多数が特別高等警察に一斉検挙され、部活動は一時停止された（**白亜城事件**）。山岳部に左翼的なメンバーが多かったのは、早稲田の山岳部との緊密な関係にあったのが影響したと云われており、以後「山岳部に入ると赤くなる」との伝説が戦後の昭和30年代前半まで続くことになる。

昭和10年代前半（1936～41年）

1年間の部活動の完全停止のあと、創成期に次ぐ第二世代の部員が昭和10年代前半まで引続き北アルプスのヴァリエーション・ルートの初登攀などに活躍した。

昭和10年代の主な山行記録

昭和10年7月	鹿島槍ヶ岳北壁正面壁（初登攀） 剣岳池ノ谷剣尾根右股奥壁（初登攀）	喜多豊治　植田忠七 奥山正雄　山口雅也
12月～1月	クナシリ島チャチャヌプリ登頂	東大隊に**喜多又太郎　伊藤新一**が参加
昭和11年8月	剣岳･池ノ谷剣尾根ドーム（初登攀）	福田泰次　関暢四　赤松二郎　中村成三

昭和12年3月	杓子岳東壁 （D尾根）（初登攀） 白馬鑓ヶ岳北山稜 （初登攀）	山口雅也　福田泰次 喜多豊治　武田六郎
昭和13年8月	ベルナーアルプス・シュレックホルン 北東壁（初登攀） 当時タグチルートと呼ばれた	**田口一郎　田口二郎**　S. ブラバンド
昭和14年3月	穂高白出沢よりジャンダルム飛騨尾根	伊藤文三　福井實
7月	剣岳小窓尾根池ノ谷側バットレス （初登攀）	赤松二郎　小川守正　福井實
昭和15年7月	北千島パラムシル（幌莚）・シュムシュ （占守）島遠征	**中村成三　鷲尾顕　関暢四** **赤松二郎　村上武雄　福田泰次** **宇尾洋介**
昭和16年3月	不帰岳第1峰尾根 （初登攀） 鹿島槍が岳荒沢奥壁南稜 （初登攀）	**伊藤新一**　小川守正　福井實 **伊藤文三**　佐谷健吉(浪高OB)

この時期、京都大学の各地遠征に甲南ＯＢが参加する機会が多く見受けられた。

昭和11年（1936年）	：	京都大学ヒマラヤ遠征の予備調査の命を受け、**伊藤愿**が単身渡印。 K2遠征の為のカラコルム入りの内諾をとりつける。
昭和13年（1938年）	：	京大の内蒙古・チャーハル南部踏査隊に**喜多豊治**、**加藤弘三**が参加。
昭和14年（1939年）	：	京大の小興安嶺踏査隊に**比企能**が参加。
昭和15年（1940年）	：	12月～1月、京都探検地理学会のカラフト踏査隊に**中村成三**が参加

昭和15年（1940年）：乗鞍岳・位ヶ原山荘竣工。山麓の鈴蘭小屋の主・福島清毅氏（後の安曇村村長）との間で、「甲南室」確保の覚書が交わされた。

戦時下の山岳部と会員動向

日米開戦の年、昭和16年度には、運動部を束ねる学生の自治組織「校友会」は解散させられ、専ら命令組織である「報国団」が結成された。その傘下の**山岳部は「剛健旅行班」**と改称され、アルピニズムなどを謳う登山活動は禁止の憂き目にあった。この動きに山岳部員は大いに抵抗して、部室のドアーに Konan Alpine Club の看板を貼り付け、配属将校も含む学校側もこれを見て見ぬふりをして、一時はこれまで通り自由勝手な山登りを続けた。

昭和16年（1941年）：12月、徳澤より奥又白池。L小川守正ら8名

昭和17年（1942年）：3月、遠見尾根より五竜岳。L小川守正　小林誠　加賀昌郎　徳末省三　岡橋節三　小泉省三　奥田賢二郎

しかし、やがては戦況悪化で、それも叶わぬこととなる。昭和18年～20年の間の記録はない。

一方、開戦前にスイスに滞在していた**田口一郎・二郎**兄弟は、欧州での戦争勃発で出国できずに、ベルンで一郎が客死した。後に戦死した六郎と合わせ田口家では二人が戦中に亡くなることとなる。残った二郎は、旧友・高木正孝（成蹊・東大OB）とともにアルプスで氷河や岩登りの技術を磨き（ウェッターホルン北壁登攀など）、戦後の日本山岳会のマナスル遠征隊の中心メンバーとして活躍することとなる。

戦没甲南山岳会員：本大戦中、甲南山岳会では次の8名の方々が戦没されるという痛ましい結果となった。戦後の昭和27年（1952年）に芦屋ロックガーデンのブラック岩奥に設置された甲南山岳会の「追憶」と題された物故者追悼レリーフは、この戦没会員への哀悼の意に端を発している。

楠木義昭	（1945年インパール）	**喜多又太郎**	（支那事変）	**多田潤也**	
湯川孝夫	（1945年8月広島）	**藤澤　浩**	（1944年北支）	**加藤弘三**	（レイテ島）
村上正一郎	（1942年南支那海）	**田口六郎**	（1944年西部ニューギニア・ヌンホル島）		

戦後の復活と学制改革

昭和20年（1945年）：終戦直後、少数ではあったが部室に戻った山岳部員は、世情の悪化、特に食糧難のなか、山岳部を復活させ、翌年には、戦後初の山岳部の部活動が道場・百丈ヶ原でキャンプと岩登り。秋には穂高涸沢合宿が行われた。

昭和22年（1947年）：3月、 前穂北尾根を徳沢より、ラッシュで登攀成功。帰途ビバークの末、徳澤園に帰還した（**小川守正**、中村忠雄、奥田泰三、福井亨）。物資不足の下、 戦後初の本格的積雪期登山として注目された。

昭和24年 （1949年）：3月、槍ヶ岳北鎌尾根で行われた関西学生山岳連盟神戸セクションの合同春山合宿に、甲南高校から伊藤治、川崎厚二が参加した。この合宿は単独では大きな山行が出来ずにいた在神各校の要望で実現したものであり、甲南が指導的立場にあった。神戸経済大予科、神戸工専、新制灘高、報徳工商が参加している。これが旧制甲南高校山岳部としての最後の山行記録となった。

昭和25年（1950年）：**学制改革により旧制甲南高校が廃校**。旧制甲南高校山岳部の活動は一旦新制甲南高校山岳部に引継がれることとなった。この年、OB会である甲南山岳会の戦後初の会合がもたれ、現役への協力を確認した。

昭和26年（1951年）：**甲南大学発足。**甲南学園では、旧制高校の廃校時に甲南大学の発足が間に合わず、一年のブランクの後に甲南大学が開校した。そのため、旧制の高等科の山

岳部員は甲南大学に入学せずに他の大学へ進学し、その結果、大学一期生に山岳部員が居らず、大学山岳部の発足が遅れた。

この年の8月、渡欧中の**伊藤愿が単独でマッターホルンに登頂**するという朗報があった。

昭和27年(1952年): **甲南大学体育会山岳部発足**し、旧制高校山岳部の活動を継承し現在に至る。

田口二郎、この年の日本山岳会マナスル踏査隊および翌年の第一次マナスル登山隊に参加。

この年、**甲南山岳会物故会員追悼レリーフ**が芦屋ロックガーデンのブラック岩奥の岩壁に設置された。

昭和28年(1953年):第8回国体(愛媛)に田邊潤(高2)が兵庫県代表に選ばれ参加。

冬山では、八方尾根黒菱池田小屋にて中学・高校・大学から18名が参加して合同合宿(L阿部純一)が開催された。

このころ、中学生を主体とするパーティで積雪期の後立山に繰り返し出かけており、成功はしなかったものの、春の南俣から不帰第1峰を狙うなど、中高生として超一級の山登りとして注目に値する。

昭和30年(1955年):第10回国体(神奈川)に平井吉夫(高2)が兵庫県代表に選ばれ参加。

昭和30年代(1956～65年)　遭難事故・ヒマラヤ計画の挫折など

昭和31年(1956年):大学山岳部の春山合宿中(L阿部公義、木全実、雨宮宏光、鈴木頼正、竹中寛)、剣岳・小窓尾根で木全実が滑落事故を起こし負傷。

昭和32年(1957年): 大学山岳部の春山合宿(L雨宮宏光、麻畠重彦、竹中寛、伊丹弘忠、福永隆一)で剣岳・小窓尾根をアタック中、雪崩による遭難事故が発生し、福永隆一(大1)が死亡。 **2年連続の遭難事故であり、甲南山岳部唯一の死亡事故**となった。

事故の反省と学校当局からの自粛要請もあり、控えめな再スタートを余儀なくされたが、昭和30年代後半には部員も増加し再び活況を呈することとなる。

昭和34年(1959年):3月、L伊丹弘忠以下11名で馬場島から奥大日尾根へ。田邊潤と越田和男が奥大日岳アタックに成功(積雪期初登攀)。

昭和35年(L廣瀬健三以下8名)、36年(L大関和夫以下11名)、37年(L二谷和成以下15名)の春山で3回にわたり杓子岳東面に合宿し、白馬鑓ヶ岳北稜(廣瀬、藤安健一)、杓子岳東壁の各尾根(越田、倉藤考次、大関、武田雄三、森本全彦、鵜木洋、村上與利一、井本

洋、水渡清夫）や双子尾根、などを次々に登攀。

昭和36年5月：剣西面・池の平山小窓谷側側壁初登攀（**田辺潤**、**越田和男**、倉藤考次、武田雄三）

昭和37年（1962年）：12月、厳冬期の前穂高北尾根合宿（L武田雄三以下17名）**前穂4峰新村・北条ルート**（武田雄三、柏敏明）西穂高往復（長谷川恵一、村上與利一、水渡清夫）。

昭和38年（1963年）：3月、**利尻島遠征**（L武田雄三以下16名）当時の関西からはまさに僻遠の地ではあったが、16名の参加を得て、東北稜（長谷川恵一、菅義弘、竹中統一）南稜バットレス（武田雄三、井本洋）南稜大槍（武田、長谷川、井本、水渡）東稜（森本全彦以下9名）などに登った。

この時期、沢田立子をリーダーに**女子部としての活動**が見られるも、このときは一時的に終わった。

昭和38年（1963年）4月：**甲南中学・高校が岡本キャンパスから芦屋へ移転**。これまで中・高・大が同じキャンパスにあったことで、それぞれの山岳部も一体感を持って山行をともにするような機会があったが、中高の移転後は関係も薄れがちとなり、高校山岳部の出身者が大学進学後も山岳部に入部するケースが極端に少なくなった。

昭和39年（1964年）：**山岳部・山岳会機関誌「時報」創立40周年記念号を発行**（**柏秀樹**編集）。

この年4月、甲南山岳会による**ガネッシュ・ヒマール遠征計画の予備調査**のため、**田邊潤**と**廣瀬健三**がネパール・カトマンズを訪れた。**伊藤文三**（昭和15年旧文卒）を隊長にした初めてのヒマラヤ行を目指したものの、この計画はその後のネパール政府による登山禁止令に遭い、あえなく頓挫し、甲南としてのヒマラヤ行は、10数年後の昭和52年（第一次キシュトワール遠征）にまで持ち越される結果となった。

ヒマラヤ計画に挫折はしたが、部員数にも恵まれた昭和30年代後半は、積雪期の北アルプスの長距離縦走や、北穂滝谷、北鎌尾根を含む槍穂高、剣岳西面合宿、残雪期の鹿島槍東面、笠ヶ岳東面合宿など、羨むべき山行を重ねている。

また、この時期以来、芦屋駅近くの雨宮邸の物置に毎週金曜日の夜、若手OBと現役部員が集まる(**雨宮邸の山嶽寮**)という好ましい習慣が十数年続いたが、遠征挫折の良き後遺症というべきか。

昭和40年代（1966～75年） 北海道、カナダ、そしてインド・ヒマラヤへ

引き続き活発な部員に恵まれて、若手OBの参加も多く、積雪期では、奥大日岳～剣岳（昭和41年3月　L浪川純吉以下5名）、赤岳～硫黄岳を含む双六周辺（昭和42年3月　L国分廣昭

以下10名、昭和43年3月　L石原浩二以下6名）、慶応尾根～前穂北尾根（昭和46年12月　L山本真博以下11名）、小川温泉～イブリ尾根～白馬～白馬乗鞍（昭和47年12月　L松本好博以下13名）など多くの実績を積んだ。

OB独自の動きもあり、厳冬期の穂高・白出沢に4年間通い続けて、昭和44年(1969年)：12月、L**森本全彦**のもと、**塩崎将美**、**浪川純吉**がジャンダルム飛騨尾根を登った。

昭和45年(1970年)：乗鞍岳・位ヶ原山荘の移転。引き続き甲南室が確保され今日に及んでいる。

昭和40年代後半は、**山岳部創部50周年**（昭和48年11月に六甲山ホテルで記念総会）を迎え、また現役部員数にも恵まれるとともに、アクティヴな若手OBの動きもあり、活動範囲も遠く北海道や海外の山々に及んだ。また、一度途切れたかに見えた女子部員も復活して、西川けい子、吉松香代子、鷹巣久美子、正木綾子らが合宿に参加している。

昭和48年(1973年)3月：**北海道日高山脈北部合宿**（L平井幹男以下10名）カムイ岳北東尾根より入山、ビパイロ岳（松本好博、朝倉満）、カムイエクウチカウシ（井上知三、早川榮二、村田信一）、十勝幌尻岳（平井、田口正博）、日高幌尻岳（平井、早川、村田、渋谷、西村、松下）などに登頂した。

昭和48年(1973年)6～8月：　**カナダ・ロッキー合宿**（L井上知三、平井幹男、松本好博、早川榮二、村田信一）が　山岳部創部50周年記念行事として発案され、現役山岳部として初めての海外合宿となった。まずLake　O'haraをベースにMt.レフロイ（平井、早川、村田）、Mt.ヴィクトリア（井上、松本）などをこなし、ロブソンに移動、Mt.ロブソン北東面カインフェース（井上、村田、早川）に成功、後半はOB（**雨宮宏光**、**森本全彦**、**村上與利一**、**浪川純吉**）も参加してアッシニボインを全員で登頂した。

昭和49年(1974年)　3月：**北海道十勝岳～大雪山スキー縦走**（縦走隊L早川榮二以下5名）十勝温泉凌雲閣から入山、厳しい風雪に耐え、十勝岳、美瑛岳、トムラウシと縦走、2週間後に、湧駒別温泉から入山したサポート隊（L朝倉満以下4名）と忠別岳石室で合流、旭岳、愛別岳にも登頂して、湧駒別温泉に下山した。

昭和50年（1975年）8～9月：サハラ砂漠縦断（**南里章二**）

同年7～11月：**インド・ザンスカール踏査行　森和則**（OB）松本好博（現役）の2名が数か月にわたりインド北部およびネパールを旅した。ラダックからザンスカールを経て、シングンラでヒマラヤを越え、ロータン・パス経由マナリに至る旅で、2年後の外国人に解禁されて間もないキシュトワール・ヒマラヤ遠征へのきっかけを掴んだ。ダラムサーラに足を延ばした森はダライラマ

の謁見を果たしている。

昭和50年代（1976～85年）キシュトワール・ヒマラヤ遠征と国内事故

先の現役のカナダ合宿や、森、松本のザンスカール踏査行は2度にわたるキシュトワール・ヒマラヤ遠征に繋がり、国内でも引き続き順調な歩みを続けてきた。**南里章二**や**山本恵昭**の海外への単独踏査行も特筆すべき動きとなった。しかし、後半には奥大日での雪崩事故、更には、他会のパーティに参加した甲南山岳会員の遭難死があった。その後の部員不足の兆しが見えてきた時代でもあった。

甲南山岳会の当時の**機関誌『甲南山岳会通信』**は昭和 51 年（1976 年）発行の第 31 号から名称を**『山嶽寮』**と改め、以後ほぼ年一回の発行を続けて現在に至っている。これは、昭和初期の旧制高校時代の山岳部報に設けられた部員・会員の親睦目的の寄稿欄の名称に由来するもので、本記念号が第 70 号となる。

昭和51年（1976年）3月：前穂高北尾根合宿（L渋谷一正以下女子2名を含む10名）屏風岩第1ルンゼに成功（渋谷、納富清司）。4峰北条新村ルートは事故で敗退した（松下哲夫、大森雅宏）。

昭和52年（1977年）7～8月：**第一次キシュトワール・ヒマラヤ登山隊**（隊長：**南里章二　森和則　松本好博　渋谷一正　松下哲夫　吉松香代子**　納富清司　医師・菊池正和）甲南隊としてはじめてのヒマラヤ遠征。 6560m（後に6050mと修正）の無名峰を目指すも登頂ならず。

同年9月：**ザンスカール地方調査行　南里**、**松本**がキシュトワール登山隊解散後、ザンスカール地方の村々に滞在しての民俗学的調査、そのあといくつかの峠越えで日本人として初めての足跡を残している。

昭和53年（1978年）3月：**知床半島遠征**（L大庭義郎以下12名）羅臼岳～知床岳縦走。

昭和54年（1979年）3月：鹿島槍ヶ岳合宿（L要裕晶以下10名）米国イリノイ州立大学からの留学生ラルフ・プチャルスキーが参加。

昭和54年（1979年）6～8月：**第二次キシュトワール・ヒマラヤ登山隊**（隊長：**渋谷一正　松下哲夫　大森雅宏**　泉清司　要裕晶　住友健時　写真部OB・**三上和夫**）前々年に敗退したラルン谷奥の6050mの無名峰に**松下**と**大森**が初登頂、「ラルン峰」と命名。

昭和55年（1980年）12月～1月：剣西面・奥大日尾根合宿（L西岡進以下7名）中の雪崩遭難。豪雪（56豪雪と呼ばれる）に遭い剣本峰を断念して剣御前で引き返す。下山中クズバ山直下で雪崩に遭い5名が約800m小又川側に流され、尾根に戻ること不能となった。後に小又川を自力で下降して馬場島に至り事なきを得る。OB中心の救援隊は馬場島に至ること自体が困難を極めた。

昭和53年（1978年）8月：**南里章二**（単独）アマゾン・ウカヤリ川下り

昭和56年（1981年）8月：**南里章二**（単独）アフリカ・ルエンゾリ・アレクサンドリア峰（5091m）とコンゴ（ザイール）河下り。

昭和57年（1982年）8月：**山本恵昭**（単独）**ペルーアンデスのワスカラン南峰**（6768m）、ピスコ西峰（5752m）に登頂。

昭和59年（1984年）8月：**山本恵昭**（単独）ヒンズークシュのチトラル周辺探査。マスツージ川の支流ゴーレンゴル、ロギリゴルなどを探る。

昭和60年（1985年）1月：**藪内昭博**（昭和55年理卒）が鹿島槍ヶ岳で遭難死。参加する宝塚山の会のパーティが鹿島槍で消息を絶ち、藪内の遺体は8月東谷上部で発見された。甲南山岳会有志は第1次から第22次に至る捜索隊に参加した。

昭和60年代から平成初期（1986～2000年）部員の減少とOBの海外指向の時代

昭和の終わりのころには、部員減少に先手を打って、甲南高校生（白川浩平、安定真紀）を大学の合宿に参加させるなどの試みもあったが、功を奏せず、平成に入ったころには部員不足が顕著となった。**八木健**（昭和58年卒）ら若手OBを中心に現役指導を行い、部員勧誘にも一役を買ったが、効果なく、甲南単独では大きな山行も困難となり、他校との合同山行が多く見られるようになった。

昭和61年（1986年）3月：新穂高～笠新道～抜戸岳～笠ヶ岳～双六岳～槍ヶ岳～新穂高（L西名俊英以下5名）前年11月、12月に続いてのこの方面への入山。

昭和62年（1987年）12月：明神岳東稜～奥穂～涸沢岳西尾根～白出沢出会（宮崎哲、田中一也）

昭和63年（1988年）10月：穂高涸沢合宿（L宮崎哲以下高校生を含む6名）滝谷ドーム中央稜、第4尾根ツルム正面壁　墜落事故あるも大事に至らず。

平成元年（1989年）2～3月：ヒマラヤ・クスムカングル北壁（関西学連隊に宮崎哲が参加）登頂断念。

平成元年（1989年）11～12月：小窓尾根～剣岳～早月尾根（宮崎哲AAVK2名と同行）

この年、 初代会長**香月慶太**に代わり鷲尾顕が甲南山岳会第2代会長に就任。

甲南山岳会歴代会長			
初 代	1931～ 89年	**香月慶太**	(昭和 5年 旧制文科卒)
第2代	1989～ 98年	**鷲尾 顕**	(昭和15年 旧制文科卒)
第3代	1998～ 99年	**川崎厚二**	(昭和25年 旧制理科卒)
第4代	1999～ 2002年	**牧野 宏**	(昭和36年 経済卒)
第5代	2002～ 2014年	**武田雄三**	(昭和38年 経済卒)
第6代	2014年～	**平井幹男**	(昭和50年 文卒)

一連の八ヶ岳合宿:平成3年12月(L阿部康彦以下7名)、平成4年12月(L阿部以下7名)、平成6年3月(L鷹取祥史以下5名)、平成8年3月(L松井修平以下5名)硫黄岳 阿弥陀岳 赤岳 横岳 大同心南稜 大同心ルンゼ ジョウゴ沢 阿弥陀岳北稜及び北西稜 西尊稜 裏同心ルンゼ 小同心クラック 赤岳主稜 中山尾根など。

平成 4 年(1992 年):ロックガーデンの**甲南山岳会レリーフ横に物故者銘鈑**が取り付けられた。レリーフと銘鈑を取り付けた岩場は、その後の阪神淡路大震災にも耐え、現在も物故者慰霊祭が毎年 4 月に催されている。

平成5年(1993年)8～11月: **アフリカ・ネパール遠征**(L阿部康彦、**西濱昌典** 龍谷大から2名) キリマンジェロのギリマンズおよびウフル・ピーク、ケニアのレナナ、バティアンおよびネリオン・ピーク、ネパールのテントピークなどに登る。

平成6年(1994年)10月:**ネパール・シングチュリ峰6501m**(**西濱昌典**、松成健)南稜敗退

平成7年〈1995年〉11月:**同上**(**西濱**)北東フェイスを試みるも6400mで断念。

平成7年 (1995年) 理工学部**平井一正教授を山岳部顧問に**迎える(平成12年まで)。

体育会としての必要部員数にとどかず、顧問教授の引き受け手もなく、部の存続を危ぶまれていたこの時期に、神戸大学を定年退官され甲南大学の教授に就任された平井先生は、まさに救世主であった。

平成9年(1997年)6月:**インドネシア・Mt. グデ 2958m** (**川崎厚二**、**美田靖夫**、バンドン大学イマム、ブディ)

同年 7月:**カラコルム・ブルタル峰**(**飯田進**、**平井吉夫**、L関学OB南井英弘以下4名、上智OB池谷健)5000m付近まで

平成10年(1998年)6～7月:**カラコルム無名峰5180m**(**米山悦朗**、**雨宮宏光**、**平井吉夫**、**飯田進**、L関学OB南井以下3名)、上智OB池谷、関学OB三戸田が初登頂、ダルソー・ピークと命名。

同年　9～10月：**チベット・ラプチェガン山群**（京都府山岳連盟隊・隊長栗井原一成に**簗瀬俊之**が参加）7100m級の未踏峰を目指すも6940mで断念。

平成11年（1999年）　**センチネル峰登山・スワート・ヒンズークシ踏査**（L**米山悦朗**、**平井一正顧問**、**雨宮宏光**、**鵜木洋**、現役・橋田豊彦、池内友宏）　**鵜木**、池内、ハイポーター2名が　センチネル峰5280m登頂。ナルタル峠、ハユール峠、シャングラ峠、ラワン峠、シャンドール峠など踏査。高山病の橋田を緊急下山、即帰国させるなどの一幕があった。

平成12年（2000年）　**オールド・シルクロード踏査**（L**米山悦朗**、**雨宮宏光**、**飯田進**、現役・池内友宏）　解放直後のミンタカ峠を訪ねた後、チャブルサーン川を遡り、キルギス峠に至り、峠の南北にある　ボボン・ピーク（5180m）と5220mの無名峰（パッキリ・ピークと命名）に初登頂。

平成12年：**甲南山岳会・山岳部のホームページ**
http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/　が**塩崎将美**の尽力で開設された。以後現在（平成27年）に至るまで、そのアクセスは20万を越え、「掲示板」を通じた会員相互の親睦のみならず、部外に存在感を与えるPRに寄与している。

21世紀（2001年～2015年）の山岳部・山岳会　（大学山岳部の凋落）

部員減少が続き、遂に新入部員ゼロの年が続いた。新人5名を迎えた年もあったが、退部続出で実働1～2名が常態となった。熟年OB数名と現役部員1～2名のパーティ、他校山岳部、山岳会との合同山行などが多々見られるようになる。

平成13年（2001年）5月：**チベット偵察行**（**平井一正名誉会員**、**米山悦朗**、**雨宮宏光**）未踏峰・布加崗日（プーチャカンリ）6328mの登路を探る。

同年9月：大台ケ原東の川・中の滝登攀（**塩崎将美**、**浪川純吉**、**大森雅宏**、**山本恵昭**、池内友宏　他にWV部から2名と探検部OB）

同年　10月：御嶽・鈴ガ沢東股遡行（**森本全彦**、**武田雄三**、**塩崎**、**浪川**、**大森**、**川野幸彦**、**山本**、**松山弘和**、池内）

平成13年（2001年）10月：　機関誌「**山嶽寮**」**山岳部創立75周年記念号（編集：越田和男、柏敏明）を発行。**　日本山岳会会報『山』および年報『山岳』の紹介記事で高い評価を得た。

平成14年（2002年）7～8月：**ヒンズーラジ・トレッキングとルパール・ピーク登頂**（**米山悦朗**）カランバール峠、ダルコット峠を訪ねた後、ナンガパルバート南西にあるルパール峰　6150m　に登頂。

平成14年（2002年）8～9月：パキスタン・シムシャール訪問とミングルサール登頂（**米山**、**雨宮**、**鈴木頼正**、**二谷和成**、**武田雄三**）　米山、武田がハイポーター2名と登頂。

平成15年（2003年）4～5月：チベット・ココシリ（可可西里）探査（**米山、雨宮**）

平成16年（2004年）6～7月：アフガニスタン・ワハン回廊探査（**米山**、NGO団体SORAの事業に参加して督永忠子他1名と。平位剛氏も一部同道）空路ハイザバードに入り、オクサス川を遡り、イルシャド峠を越えてフンザに至る。

同年　7月：トルコ・アララット山　5165m　登頂（**南里章二**）

平成18年（2006年）5～12月：チベット・ヒッチハイク横断（森本博之）雲南省からチベット、中央アジア、中近東諸国、エジプトに至る。帰路にはミャンマー～ラオス～雲南省と辿る現役山岳部員の独り旅。先々で甲南山岳会のHPに現況報告があり、会員もまた楽しんだ。

平成19年（2007年）8～10月：**クビ・ツァンポ源流域学術登山隊**（同志社大学山岳部・日本山岳会関西支部共催　隊長同志社大山岳部OB和田豊司）に谷勇輝（理工学部4年）が参加、**クビ・カンリ6721mに登頂。**

同年10月：熟年OB隊のランタン・ヒマールのトレッキングと登山（**森本全彦**、**柏敏明**、**塩崎将美**、**浪川純吉**、（関学OB）小西、青木）ヤラ・ピーク南峰5520mに登頂。柏が凍傷で足指5本失う。

同年11月：甲南・関学合同富士山雪上訓練（甲南：谷勇輝、奥田剛史、関学：中島健郎、山本大貴）

平成20年（2008年）9月：屏風岩、北鎌尾根、前穂東壁、北尾根4峰、滝谷など難ルートの連続登攀（谷勇輝、関学OB中島健郎）

平成21年（2009年）5月：剣岳北方稜線（**山本恵昭**、神戸大OB矢崎雅則、神戸大現役石丸祥史）カンリガルポ遠征のトレイニング山行。馬場島～赤ハゲ山～小窓～剣頂上～早月尾根～馬場島

同年10月～11月：神戸大学・中国地質大学（武漢）**カンリガルポ山群合同学術登山隊**（日本側井上達夫隊長以下6名、中国側10名）に甲南から**山本恵昭**が登攀リーダーとして参加。中国、日本隊員計4名がKG-2峰6708m（ロブチン峰と命名）に初登頂した。

大学・高校山岳部部員ゼロに

平成20年（2008年）谷勇輝の卒業をもって、実働部員ゼロとなる。以後数年間は（名義貸しの）登録部員のみの状態で形式上は体育会山岳部として存続したが、平成26年（2014年）に至り、最後の登録部員であった武田有希（インドア・クライマーとして活躍したが、登山活動に至らず）が卒業して、名実ともに、その創部90周年を迎える直前に山岳部が消滅した。現在体育会では、伝統のある山岳部の再起を期して「休部」扱いとなっているが、平成26年夏には、部室も撤去された。（部室はその後、同じく休部状態のスキー部との共用ながら復活された）

甲南高校山岳部についても、南里章二（甲南山岳部OB）、神戸謙司（関学山岳部OB）両

先生の指導により、平成22年（2010年度）までは堅実な歩みが見られたが、この年度を最後に山行の報告が途絶えている。

行方の不安を抱きながらも、活発な熟年、壮年会員を中心に甲南山岳会員の山行、辺境の旅は続く。

平成23年（2011年）8月：光岳リンチョウ沢遡行（**山本恵昭**）

平成24年（2012年）2～3月：マレーシア・キナバル登山（**山本**父娘の旅）

同年8月：赤石沢から赤石岳（**浪川純吉**、**大森雅宏**、**山本恵昭**）

平成25年（2013年）5月：海谷高地から阿弥陀山（**森本全彦**、**井上知三**、**大森**、**山本**）

平成26年（2014年）2月：大峰・大普賢岳グランドイリュージョン氷瀑登攀（**谷勇輝**他3名）

ホームページhttp://homepage2.nifty.com/konan-alpin/への寄稿は盛ん、『山嶽寮』の炉辺も守られて若手の来訪を待っている。

あとがき

『山嶽寮』甲南山岳部創立75周年記念号（2001年発行）から早や15年。当時この次の周年記念誌は100年記念となるだろう、それまで存命の可能性は薄い、との思いで、巻末の資料編として「年表」「部報等の総目録」「会員の著作、翻訳、寄稿目録」を柏敏明君と手分けして作り上げた。記念号自体も日本山岳会の年報『山岳』に紹介されるなどで好評を博し、巻末資料も（誤記もあり、気にはなるところだが）それなりに活用されたのではないかと自負している。

今般、90周年記念誌は発行しないとのことであるが、休部状態で復活の期待できない現役大学高校山岳部、老齢化による先すぼみの山岳会に直面し、せめて概略通史でも纏めておきたいとの思いに駆られた次第。何分全記録を掲載するわけにもいかず、活躍された割にはお名前の掲載がなかったりするケースのあることが危惧されるところだが、小生のミスジャッジとしてお詫びしておく。

なお、戦後70年に当たる年でもあり、戦没会員のリストを作成した。これは、これまでの部報、時報、山嶽寮などから拾って纏めたものであり、このような形で掲載するのは初めてのことである。芦屋ロックガーデンの追悼レリーフ設置の発端となった方々のご冥福を改めてお祈り申し上げる次第である。

文責 ： 越田和男 （昭36理）

山嶽寮　第70号　付録ＤＶＤ目録

1. 動画

①	昭和12年頃	ロッククライミング	山口省太郎	(旧10理)
②	昭和15年秋	上高地	山口省太郎	(旧10理)
③	昭和17年1月	乗鞍	山口省太郎	(旧10理)
④	昭和34年4月	不帰1峰	福田泰次	(旧15理)

2. 録音

① 創部80周年記念講演
「旧制甲南高校山岳部と三つの事件」　小川守正　(旧17理)

3. アルバム

①	中学	福田泰次	(旧15理)
②	高校	福田泰次	(旧15理)
③	ロッククライミング	福田泰次	(旧15理)
④	東北の山	福田泰次	(旧15理)
⑤	北千島	福田泰次	(旧15理)
⑥	総集編	福田泰次	(旧15理)
⑦	個人蔵アルバム　(5冊一括)	柏　敏明	(昭41経)

⑧ ＫＫＨＥⅡ1979　甲南大学山岳部 第2次キシュトワールヒマラヤ登山隊 1979
⑨ その他　(集合写真大集合　ほか)

4. 会員の著作・翻訳紹介

① ホームページより転載

5. 資料

① 旧制甲南高等学校山岳部　報告
② 甲南山岳部・甲南山岳会　時報　(40周年記念号)
③ 行動記録　(昭和53年)
④ 山嶽寮　第70号
⑤ 東京甲南会広報
⑥ 関西学生山岳連盟　報告
⑦ その他

6. 翻訳

① 『ロレンツ・サラディン　山の生涯』　平井吉夫　(新高昭32)

時報・東京甲南会ほかの各資料には住所などの個人情報が含まれます。
各種個人情報の取り扱いには特にご配慮をお願いします。

編集後記

山嶽寮第 70 号をお届けします。今年は付録にＤＶＤがついています。子供のころの月刊雑誌や学習雑誌の付録はワクワクしましたが、今回の付録もナカナカではないかと編集担当は思っております。装丁はちょっと緊縮財政ですが。

さて本文は、大関さんへの「追悼」で始まります。ながく甲南山岳会の副会長をお務めで存在感の大きかった大関さんへの牧野さん・越田さん・飯田さんのお気持ちが綴られています。また会員短信にも多くの方がコメントを寄せておられます。

「随想」は「この一葉に寄せて」と題して写真一葉とそれに寄せる思いを特集しました。今年の総会の帰りがけ、髙橋さんに「ゴンさん・ポチさん・イモコさんの写真を部室で発掘したんですが、それを材料に是非」とお願いしたのが発端でした。部室のほかの文化財的写真のご関係などにもお願いして、香月さんと鷲尾さん、フクデンさんにもご登場いただいて、15 人の皆さんの原稿で構成しました。南里さんはじめ一番若い松成さんまで、お忙しいなか気持ちも時間もこちらに向けていただいてのご寄稿に感謝いたします。また印刷原稿の確認に併せてのメールのやり取りも特に印象に残るものでした。

「山行」は川野さんの鹿島槍東尾根のレポートをベースに。下部のルートは異なりますが同じ鹿島槍東尾根を登った、または登ろうとしたフクデンさんの昭和 13 年 3 月と昭和 11 年 5 月の記録を、今回の平成 27 年 5 月に並べて掲載しました。そんなわけで「鹿島東尾根 三題」としています。伊藤文三さんは昭和 11 年の鹿島について、修学旅行をさぼって行った山だから記録に出てこない、と書いておられましたがフクデンさんとお二人で向こう岸から笑ってご覧のことでしょう。

「紀行」「論考」は雨宮さんから。カラコルム・チベット・アンデスの海外登山・踏査を振り返ったものと、61 号に発表の論考を加筆補完する内容です。雨宮さんのちょっとリラックスした山の話には思わず引き込まれてしまいます。

「翻訳」は平井吉夫さんの、ソビエトの登山に関する「もうひとつの登山」。付録ディスクに収載のロレンツ・サラディン関係の翻訳とともに、平井さんが敬愛された田口二郎さんからの宿題と書いておられます。「ソビエト」・「あとがき」・「サラディン」の 3 つを合わせると 50 ページ近い内容で本誌に一括掲載は難しく、誌面でのご紹介とデータでのご提供とに手段を分けています。読み応えがあります。

甲南ＡＣの「90 周年通史概説」は今年が甲南山岳部 90 周年ということで越田さんが労作をお寄せくださいました。資料として利用するときページを繰るのに便利かと巻末に配置しました。

会員短信・報告は事務局井上さんのお手を煩わせました。「山行と集い」は塩崎さん管理のホームページの掲示板から。お二人には毎年のことですがお礼を申し上げます。

今年も綱渡りでした。ご寄稿のみなさまありがとうございました。

原稿宛先 山嶽寮 編集担当　大森雅宏
電話／ファクシミリ　　Ｅメール